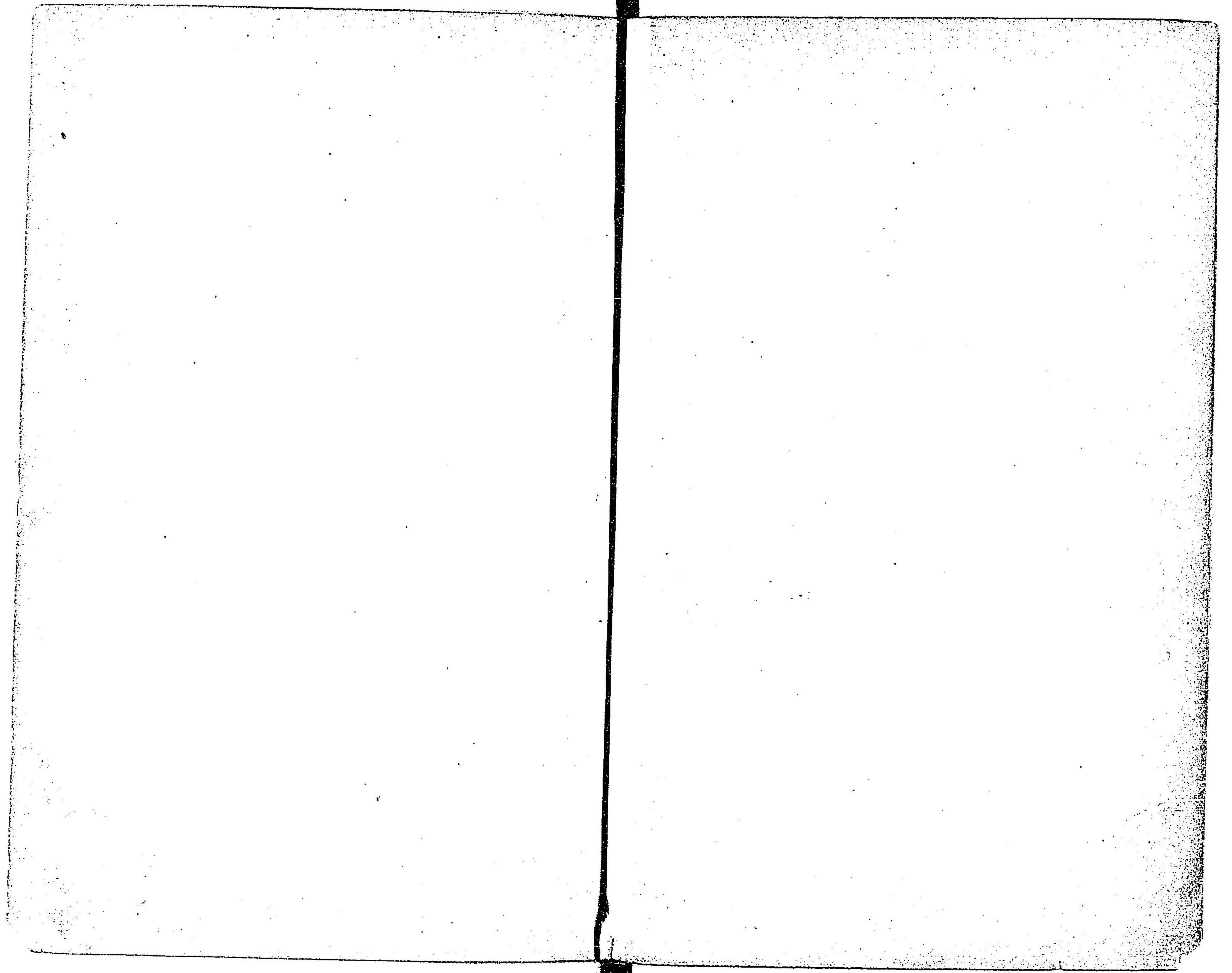


慶應義塾大學講師
曹洞宗大學講師 忽滑谷快天著

浮世狂子講話

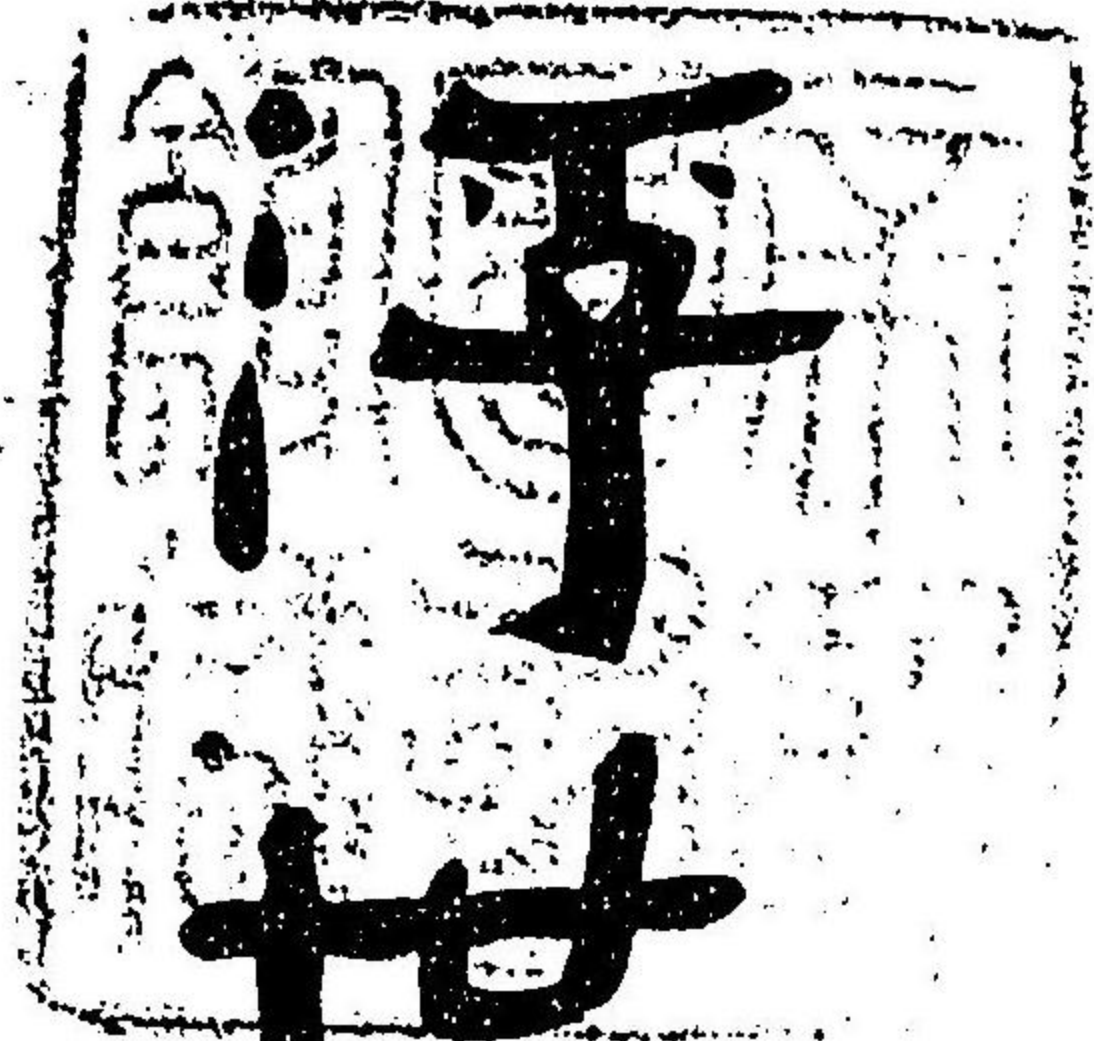
附 田舎莊子

東京 服部書店藏版



835-179

111 100



附
田舎
莊子
世
狂子
講話

明治
44. 4. 26
内交

注意

- 一、本書の本文及び其側に附したる假字は原本の儘とし、訂正を加へず。
- 一、本書は原本四卷あり、莊子の逍遙遊、齊物論、養生主、人間世、大宗師、徳充符、應帝王の七篇を翻案し、之に著者の禪學的見解を加へたるものなり。
- 一、本書最終の一篇應帝王に相當する一文を脱す、これ講者の藏書破本なるに由る。
- 一、講者は本書の完本を得んため、少なからざる苦心を以て搜索に努めたり、しかも之を得る能はざるは遺憾甚し。
- 一、世の藏書家にして本書の完本を有するあらば願くは講者に貸附し、他日一箕の功を全うせしめられんことを。

浮世莊子講話序

予嘗て『田舎莊子』を読み、以爲らくこれ虎を畫いて猫に類するのみと。夫れ莊子の文たる神出鬼没、峻山大海と接し、佛魔同床に睡る。莊子の莊子たる所以、實にこゝにあり。然るに『田舎莊子』の文たる恰も平坦なる原野を行くが如く、千篇一律、平々凡々、奇なく怪なし、單に寓言てふ形式を莊子にとりたるに過ぎず。殊に莊子を以て儒説を反面より述べたるが如く主張するに至つては腐儒の小見、笑ふべきのみ。嗟乎、我國の學者は莊子以上の奇想を吐く能はざるか、莊子以上の鬼文を屬する能はざるか。

一日古書堆裏に一本を發見す、題して『浮世莊子』といふ。繙

て之を見るに奇説縦横、莊列の堂に上り、老佛の鼎に指を染む。其想たる莊子に出て、莊子より高く、莊子を説くと稱して、莊子の謂ふ能はざる所を謂ひ盡して餘りあり。蓋し老佛を根とし、禪莊を幹として、寓言の華を開きたるものか。其文たる篇々變化あり、蟻鯨相論し、金石相笑ひ、松桐相語り、蚤虱相議し、萊蕪相憐む。一たび之を繙けば、卷を終らざれば止む能はざらしむ。しかるに此書たる世人其存在を知る者稀にして、之を得ると極めて難し。

明治四十四年三月

忽滑谷快天識

要目

著者略傳	一
原序	二
蟻鯨情量	三
莊子逍遙遊大意	三
鯨の大言	三
蟻鯨の争論	四
蟻の論駁	五
鯨の夫婦	八
員精方祗翁	一〇
天地は一大生物	一二
結論	一四
粉蝶辨色	一九
	二三

齊物論大意……………二二

槐の蟲……………二四

莊子の夢……………二五

儒者の偏見……………二七

道家の是非……………二九

佛家の是非……………三〇

眼に常道なし……………三四

耳に常道なし……………三五

鼻口手足に常道なし……………三六

人生大夢……………三八

結論……………四〇

萊蕪苦樂……………四三

燕膏の得失……………四四

大根の苦樂……………四五

胡羅の名論……………四七

天命……………五二

結論……………五三

地黄精靈……………五七

養生主大意……………五七

地黄丸の精靈……………五八

養生の不養生……………五九

虛無恬淡の妙藥……………六二

儒釋道三家の養生……………六六

不養生の養生……………六七

結論……………六八

始皇封松……………七〇

諸木松を賀す……………七〇

桐の祝辭……………七二

松の名木……………七五

始皇帝の暴……………七七

好事も無きに如かず……………八〇

結論……………八一

蟬蛻自得……………八三

人間世大意……………八三

蛤虫の自負……………八五

蟬蛻の自適……………八八

蛤虫の不幸……………八九

蟬蛻の幸……………九〇

人と畜類……………九二

聖人は龍の如し……………九三

賢知の害……………九四

和光同塵……………九五

結論……………九六

臺日傳授……………九七

狐憑……………九九

一得齋の失敗……………一〇〇

快翁の説明……………一〇二

精一の工夫……………一〇三

熊渠子の譚……………一〇四

紀昌飛術の話……………一〇五

教外別傳……………一〇六

結論……………一〇八

伏翼兩端……………一一〇

鳳凰の婚禮……………一一一

伏翼の音物……………一二二

伏翼の詭辨……………一二四

麒麟の婚禮……………一五

伏翼の二心……………一六

摸稜の手……………一七

結論……………一八

彭顔天壽……………一九

 徳充符大意……………一九

 彭祖の謬見……………二一

 顔子の貧……………二三

 顔回の高論……………二四

 萬物一體……………二六

 天壽は徳にあり……………二九

 天の徒と人の徒……………三〇

 結論……………三一

金鐵論功……………三三

黄金自負……………三三

小人の倨傲……………三八

鐵の駁論……………三九

悪人は善人の質……………四一

黄金の無能……………四四

結論……………四六

石臼生死……………四七

 大宗師大意……………四八

 豆腐の放言……………四八

 石臼の無常……………五〇

 生死は晝夜の如し……………五二

 結論……………五五

順逆兩忘……………五七

 順の一字……………五八

順逆相對……………一五九

風雲順逆なし……………一六一

水火順逆なし……………一六二

結論……………一六四

三猿會心……………一六六

猿の藝盡……………一六七

庚申待……………一六八

見猿……………一六九

聞猿……………一七一

言猿……………一七三

親猿の妙論……………一七五

思猿……………一七七

結論……………一七八

蚊子議和……………一七九

虱の怒……………一八〇

蚤の議論……………一八一

蚊の仲裁……………一八二

物皆能不能あり……………一八三

結論……………一八四

附録……………

莊子大意……………一

雀蝶變化……………七

木兔自得……………一〇

蚊蚋疑問……………一四

鷗辨論道……………一七

鷓鴣得失……………二〇

鶯鳥巧拙……………二二

菜瓜夢魂……………二四

墓之神道……………二七

古寺幽靈……………三二

蟬蛻至樂……………三五

貧神夢會……………三七

莊右衛門傳……………四二

猫之妙術……………四四

聖廟參詣……………五三

鳩之發明……………六三

浮世莊子講話

忽滑谷快天述

本書の著者は田中長興ながさかというて冥山と號した人で、正徳、寛保の頃に出世した學者である。當時は徳川幕府の中興と謂はれた吉宗が將軍と爲つて最も文教の振興した時代で古學派には伊藤仁齋の子東涯、文章派には物徂徠、太宰春臺、國學派には加茂真淵、蘭學派には青木文藏、朱子學派には室鳩巢、貝原益軒、史論家には新井白石、俳家には森川許六、小西來山、文藝家藝術家には近松門左衛門、英一蝶、尾形光琳などが盛名を博した時である。田中冥山は此間にあつて動物學を研究したるものと見えて延享元年に、『太平鶴譜』一卷を著はして鶴の種類を説明し、鶴に係した事項を記載して上木した。本書『浮世莊子』も當時出版されたものであらう。本書に依て観る時は冥山は黄老の道に志し、兼て禪學を修め、

頗る博覧の人であつたと見える。今予が講せんと欲する所は著者の時代より百年も後れて嘉永二年に上梓された本で、左の如き序文が載せてある。

浮世莊子序

一日書架を掃んとして鼠の糞とともに一本を得たり、埃をはたき、披閱に趣意は孔孟莊子の庇間より生出、詞花滿々として、しかも意味玄々の實をむすべり。味ふに忽ち六塵の胸を透し、六慾の宿氣を散ず。依て是を人とともに樂まんと、頓に發售の基を興すととはなりぬ。

嘉永己酉首夏

積國圃主人識

却説これより本文に入ると第一に

蟻 鯨 情 量

と題してある、著者の本意は擬莊子譬喻、寓言、假物、托事、著作、玄微、數章とあつて蟻ぢやの鯨ぢやのといふ動物の譚に托して老莊の深い趣意を説くので、中に就て此蟻鯨情量の一文は莊子の首篇逍遙遊の大意を陳べたのである。逍遙遊とは徜徉自適の様子で三百六十五日何時も正月の心地がするををいうた。君子は窮するも亦樂み、通するも亦樂む、世に遇はずして九尺二間に燻つて居ても憂へず、世に用ひられて廟堂に立て飛ぶ鳥を落す勢を得ても喜はず、幸福の日にも心は春の如く、不幸の日にも亦心は春の如く、高きに居れば高きに安んじ、低きに居れば低きに安んじ、天に生るれば天に安んじ、天使と兄弟の交をなし地獄に落れば地獄に安んじて青鬼赤鬼と角力をとつて遊ぶ。されば物の爲に心を擾されず、世の爲に守りを失はず、如何なる境遇にあつても天空海潤の氣性を失はぬのが莊子の大本領である。著者冥山は此意を陳べんとて蟻鯨情量と題し

たのである。

西海の鯨、東海に遊び行けり。ある洲崎によりそひ、側を見れば數多の蟻ども東西に馳ちがひ、大王の御幸也とのゝめきたり。

此一段は造化の妙を叙したるものにて、凡そ天地間に生を享けたるもの、鯨の如く大なるあり、蟻の如く小なるあり、鯨は大なれども剩れる尾鯨もなく、蟻は小なれども足らざる手脚もない。大なるものは大なるだけの利便もあれば不便もある。小なる者は小なるだけの長所もあれば短所もある。大なるも小なるも其利害得失を相殺して觀れば平等で、大も以て小に誇るに足らず、小も以て大を羨むに足らぬ。大は小を兼ねるとは云ふものゝ、稲穂を小楊枝の代りに使ひ、象を使つて猫の代りに鼠を捕へしむるとはできぬ。また小を集めて大を爲すとは云ふものの、線香を集めて富士山の倒るゝを支へるともできず、蜺貝を以て大海を汲み干すともできぬ。畢竟大なる者は大にして始めて其所を得、小なる者は小にして始めて其所を得るのである。故に高い物は高いなり、低い物は低い

なりで平らかである、これを禪家には

高處高平低處低平

といひ、又

法住法位

ともいふ。されば天地間に棄物なく、造化は一切の物に私しせぬ。王陽明は之をる一園の竹に喩へた。竹に大なるあり、小なるあり、細きあり、太きあり、長きあり、短きあり、種々様々の差別があれど、其差別がある儘に齊しく竹で皆平等である。皆齊しく平等なる竹であるが、其平等なる儘に長短大小の差別がある。これが造化の妙であるのぢや。若し大を研つて小とし、小を補ふて大とし、大小を混じ、長短を同じくして後に平等となるならば造化の妙手は得て見るとができぬ。禪の意を以て謂へば

長者長法身、短者短法身

大なる者も小なる者も、長きも短きも皆同一佛性を具したる佛子である。

さるを吾人は此理に暗い所から迷ひを起して自ら不幸の窮兒と爲るのである。

本文にのゝめたりとあるは喧呼したとで、かまびそしくのゝしるとぢや。そこで鯨と蟻と議論を始めた、

彼鯨蟻どもに謂て云、汝らは造化のかたはしを得たる小虫の分として、子細らしく君臣の義を正し、大王呼はり片腹いたし、わづか方寸の穴にかゝまり居て外をしらず、我ごとく大きな物あるとをしらざるか。

これは鯨が萬物皆其所を得て宜しからざるなき道理に達せずして差別に惑うて妄見を起したのぢや、蟻は義虫と稱せられて同族に對して同情極めて深く、主人あり、双隸あり、親子朋友の情誼濃かに、信義を守ると最も大にして、儉素、勤勉の美德を具へたるは何人も知る所であらう。

予は嘗て一個の菓子と蟻埤の側に置きたるに數多の蟻が出て來て賞味したる中に就て一匹の蟻は其朋友か、妻か夫かは知らねども氣息將に絶えんとする他の蟻を銜へ來つて菓子の方に置き之をして食はしむるを見て

大いに其惻切の振舞に感じたとがある。人には人の天地あり、蟻には蟻の乾坤あり、人を貴み蟻を賤しむは人間の私見である。況や鯨の大を以て蟻の小を笑ふをや、況や白人を以て黒人を笑ふをや、況や官吏を以て百姓を卑しむをや、況や男を以て女を嘲るをや。男を尊むで女を卑むは楯木を尊んで楯鉢を卑むのぢや、白人を以て黒人を笑ふは大根を以て牛蒡を笑ふのぢや、官吏を以て百姓を笑ふは小刀を以て菜切庖刀を笑ふのぢや。達人より之を觀れば天地同根萬物一體ぢや、故に把住する時は眞金も色を失ひ、放行する時は瓦礫も光を放つ。

佛事門中一法を棄ず

とはこの意である。

鯨の恐論を聞いて蟻は之に大反駁を試みんとして進み出た。

と笑へば、蟻の大將すゝみ出て云、汝が軀の大なるにほこりて我々が小さきを笑ふは汝が情量の及ぶ所に就ていふ也。それゆへ汝より大きな物を見ては大といふべし、故に大山大海をいへばいかにも信すべし。汝が魚

仲間なかまに鯉こいといふ魚あり、海より大き也といはゞ信しんすまじ、これ汝じが情量じやうりやうの及およぶ所ところにあらざるゆへ也。汝じより小なるものは小なりといふべし。それゆへ蟻あみといへば信しんすべし。蚊かの睫まゆに蟻あみといふ虫あり、此虫ここのちゅうの住國ぢゆうこくに無量むりやうの都みやこあり、鄙ひびあり、郡ぐんもあり、村邑むらむちもありて無數むすうの虫ちゅうども住居ぢゆうする事をいはゞ、汝じは虚偽こゝろごなりと思ひ、中々なかなか信しんすまじ。これ汝じが情量じやうりやうの及およぶ所に非あらざるゆへなり

蟻あみの大将だいじやうの論ろんは實じつに堂々たうたうたるものである。物ものには大も無く小も無い、遠とほいも無ければ近いも無い、大小たいせうは人の情量じやうりやうに依よて生なずるので、其情量じやうりやうは、我身われみを標準ひょうげんとして我身われみより大なる者を大と思ひ、我身われみより小なる者を小と思ふ。これが大小相對たいせうたいごうの發足點はつそくてんである。又遠近とほぢんもその通りで、我足われあしにて歩みあしを移うつして測量りやうりやうするが遠近相對とほぢんたいごうの第一歩だいいつぱである。故ゆゑに大小遠近たいせうとほぢんは人の情量じやうりやうにあつて物ものには無い。人は犬猫いぬねこに比ひすれば大であるが象馬ぞうばに比ひすれば小である。蚤蝨ぞうしより觀みれば大世界だいせかいであるが、地球ちきうより見みれば蛆虫しじちゅうである。されば人は大でもなく、小でもなく、大世界だいせかいでもなく、蛆虫しじちゅうでも

なり。

鯉こいといふは莊子しやうしに、北冥ほくめい有魚ありいそ、其名そのな爲鯉なりこい。鯉こい之大おほ不知しらず其幾千里そのいくせんり也。化而爲鳥けりてなりとり、其名そのな爲鵬なりぼん。鵬ぼん之背そのせ不知しらず其幾千里そのいくせんり也。怒いかり而飛をり、其翼そのよく若垂天之雲なりたてのうみ。是鳥なりとり也、海運うみうん則將徙なりま於南冥なりなんめい。南冥なんめい者天池也なりてんち也。蛟かとほ列子りやくしに、江浦かう之間のまは、生麼蟲なりまぢゅう。其名そのな曰焦螟なりせうめい。群飛ぐんひ而集をり蚊睫なりせんせつ、不相觸なりあは也。栖宿なりせき去來なりき、蚊不覺なりせ也と記ししてある。

されば鯉こいは生物せいぶつの最も大なるもの、焦螟せうめいは生物せいぶつの最も小なるもの、這はは皆人みなひとの情量じやうりやうに依よて大小たいせうを論ずるのみである。大小たいせうのみではない人は萬物ばんぶつの尺度じちど

で善よといふも惡わるといふも、真理しんりといふも、非真理ひしんりといふも、畢竟ひつじやうは人を尺度じちどとしての情量じやうりやうで、人を離はなれては善よも是非ぜひも真理しんりも非真理ひしんりもあるものでない、これ所謂すゐん人本主義じんほんしやぎの世よに唱導なうどうせらるゝ所以ゆゑであらう。

蟻あみの大将だいじやうは更さらは論ろんじていふ、汝じが軀かみ大おほき也なりといへども十丈じゆうぢやうには過あぎ、我々われわれはいたつて微細みさいの虫ちゅうなれ共なり、

目もあり口もあり。汝が目も我々が目も見るところに違ひはなし。口に食ふ事も汝は鰻鰩の類に腹をふくらせば、我々も干からびたる蟻の類に舌鼓して性命を養ふ所に異なし。且それ目あるものは物に明らか也。既に明らかなるゆへ、晝夜日月あり。足あるものは地あり。既に地あれば山丘海川なくんば有べからず。汝に鯢あつて夫婦のかたらひあれば、我々にも牝蟻あつて、夫婦の道あり。夫婦の道あつて父子兄弟あり。父子兄弟あつて貴賤上下の別あり。貴賤上下の別あるゆへ君臣の禮儀あり。

鯨に目口があれば蟻にも目口があり、蟻に夫婦の道があれば鯨にも同穴の契りがある。夫婦があれば親子もあり、兄弟もあり、貴賤上下も自ら生じ、君臣の禮儀も自ら備る。少しも不思議なことはない。鯨は大にして海に住み、蟻は小にして陸に棲む、其住む所は異れども其自適する所以は一である。

天下の物には各能不能がある、蟻を海に入らしむれば溺れて死し、鯨を陸に上らしむれば渴して死ぬ。故に天は生物をして各々其性を全うして

其居に安んぜしめ、其宜きに處して其能を爲さしむるのである。されば愚者と雖も取るべき所もあり、智者と雖も足らざる所はある、生れながらにして泣顔なる人は吉事に臨むには不適當なるも凶事に臨むには詭ひむきである、生れながらにして足の長き者は走るには便利なるも身を屈めて物を操るには不便である。柱は屋根を支へるには便なるも炭火を挾むには便ならず、耳搔は耳を掻くには便なるも飯を抄ふには便ならず、木は以て箱を造るべきも以て鍋釜とは爲すべからず、鏡は以て貌を照すべくも以て水を汲むべからず、漆は黒さを厭はず、白粉は白さを嫌はず。顔の皮は薄きを厭はず、瓜の皮は厚きを嫌はず、蠶は食て飲まず、蟬は飲て食はず、蜂は飲ず食はず、豚は大いに食ひ大いに飲む。之に由て是を觀れば物に貴賤高下は無い、其貴ふべき所に因て之を貴べは物として貴からざるはなく、其賤むべき所に因て之を賤めば物として賤しからざるはないのである。蟻は進んで論じていふ、

汝た、軀の大きなるを自慢すれども、汝が仲間の鯢は海よりも大き也。鳥

體間の大鵬は九萬里に翅をのぶ。これらより汝を見れば、九牛が一毛にも及ばず。

大にはまた其上の大があり、小にはまた其下の小がある、大にも限りなく、小にも窮りはない。故に大も大にあらず、小も小にあらずと謂はねばならぬ。

九牛の一毛とは些少なるをいふのちや。漢書司馬遷傳に、假令僕伏法受誅、若九牛亡一毛とある。

蟻はまた鯨鵬より大なる者あるを示していふ、

又これらのものを微塵の虫とする物あり。日を以て左の眼とし、月を以て右の眼とし、世界の草木を髭髮とし、四海の水を唾涕膿血とし、一たび息すれば風となる。その名を員精方祇翁といふ。

道は天地を以て一大生物とする議論で、實に今日の汎神思想の母である。天地は一大生命の現はれたもの、一大靈心の所作たるは予の信じて疑はざる所である。道家は之を名つけて道といひ、儒者は之を崇めて天と

いひ。佛者は之を稱して佛といふ其名は異れども其指す所の物は同一である。今本書の著者冥山は之を員精方祇翁といふ。此員精方祇翁なる名は何れより出たものか知らぬが、蓋し天員地方の説に由て天精地祇と配合して員精方祇の名を造つたものと思はる。此思想は元來印度より出た。三論檢幽鈔に、六道衆生、天地之物、皆是自在天身。乃至、自在天身、總有八分。虛空爲頭、日月爲眼、大地是身、河海爲尿、山丘爲糞、風爲命、一切火爲熱氣、一切衆生是身内之蟲とあり、また摩登伽經に、汝法中自在天者造於世界、頭以爲天、足成爲地。目爲日月、腹爲虛空、髮爲草木、流淚爲河、衆骨爲山、大小便利盡成於海とあるにて知るべきである。

此人より見れば、人間は勿論、鳥獸も、聖人賢人佛菩薩仙人も、みなことごとく三百六十の節々に繋る所の虫なり。此方祇翁は浩浩々々として、かほどに大きなれども、別に餘りありともせず。人間は其中に在て小なれども足すともせず。虫は又其内に居れども逼狭ともせず

如何にも吾人は員精方祇翁の身に群がる所の虫であるに相違ない、此點

に於ては仙人も天人も、菩薩も凡夫も同様である。換言すれば吾人は天地一元氣の子で、宇宙に徧滿せる一大生命を受けて生れ、六合を包含する一大靈心の催はしに依て生れ出たものに相違ない。されば一切衆生皆天地の覆載を受け、神佛の慈悲に漏るる者はない。大なる衆生は大なる儘、小なる衆生は小なる儘、平等に天の恵みに與つてゐる。鳶飛魚躍皆此消息を語つて餘りある。見よ廣厦潤屋は人の安んずる所なるも、鳥は之に入て憂ひ、高山深林は虎豹の樂む所なるも、人は之に入れば畏れ、大河深淵は鼃鼉の便とする所なるも、獸は之に入て死し、峻木峭岸は猿猴の安んずる所なるも人は之に登つて怖るゝ、されど天は人をして大厦廣屋に居らしめ、鳥をして高山深林に棲ましめ、鼃鼉をして大河深淵に潛ましめ、猿猴をして峭岸峻木に登らしめて各其性を全うせしむる。故に天を樂み命に安んずるほど好いとはない。

佛とは梵語、佛陀の略語ぢや、大論に、佛陀秦言知者、知過去未來現在衆生非衆生數、有情無情等、一切諸法、菩提樹下了了覺知、故名佛陀と釋し、

妙樂の記には此云知者覺者對迷名知、對愚說覺とある。菩薩とは梵語、菩提薩埵の略字ぢや。大論の釋に依れば、菩提名佛道、薩埵名成衆生とある、これは佛道を用て衆生を成就するの意ぢや。賢首の意に依れば、菩提此謂之覺、薩埵此曰衆生、以智上求菩提、用悲下救衆生と云うてある。

三百六十の節々とは骨節の大數を擧げたゞけぢや。淮南子に、天有四時五行九解三百六十日、人亦有四支五藏九竅三百六十節とある。天地は成住壞空をもつて一切とし、虫は生老病死をもつて一劫とす。されば汝が我を微細の虫なりと嘲るは頭の虫が耳邊の虫を夷狄とし、片田舎の者と笑ふがごとし。是我身の外に人ある事をしらざるもの也。況や人の外の廣大無邊の天地をや。

鯨を以て蟻を嘲るは條虫の長さを以て蛔虫の短さを笑ふが如く、賢者を以て不肖者に誇るは頭を以て臍を罵ると一般ぢや。成住壞空とは天地の始終をいふたのぢや。少し文句が長くなるが佛祖統紀の說を擧げやう。先づ劫の字から説かう、

劫梵語、具云劫波、華言分別時節。謂人壽八萬四千歲時、歷過百年則壽減一歲、如是減、至人壽十歲則止。復過百年、則增一歲、如是增、至八萬四千歲。此一增一減名爲一小劫。如是二十增減名爲一中劫、總成住壞空四中劫名爲一大劫。

されば八萬三千九百九十年の百倍即ち八百三十九萬九千年が一増又は一減の年數で其二倍即ち千六百七十九萬八千年が一小劫ぢや。又二十増減即ち三億三千五百九十六萬年が一中劫、一中劫の四倍即ち十三億四千三百八十四萬年が一大大劫ぢや。次に

成劫者、謂世界始成立也、有二十小劫。第一小劫因過去壞空之後、第二禪光音天空中布金色雲、注大洪雨、積風輪上、結爲水輪、有大風起、吹水生沫而成須彌等山、時一切有情皆集光音天、天衆既多、居處迫窄其福減者、下生世間。最初有一天子、從光音天沒而來生大梵天中、是爲梵王。其壽六十小劫。第二小劫光音諸天、來生初禪梵世天中、爲梵輔天。其壽四十小劫。第三小劫、光音諸天復有來生梵世天中、爲梵衆天。其壽二十

劫。如是漸々下生欲界天中。時光音諸天、有福盡者、化生爲人、飛行自在無有男女之相、地涌甘泉味如酥蜜、因試嘗之遂生味著、失其神通及以神光、世間大暗黑風吹海、漂出日月、置須彌山腹、照四天下、乃有晝夜。彼時衆生、由耽地味、顔色麤悴、復食自然粳稻、殘穢在身、爲欲蠲除、便生二道、成男女根。宿習力故、便生淫欲、夫妻共住。光音諸天、後來生者、入母胎中、遂有胎生。時自然粳稻朝刈暮熟、刈復隨生、米長四寸。後因人多貪取、漸生糠粃、刈已不生。第四小劫乃至第二十小劫、皆悉一増一減名爲成劫。

住劫者、謂世界安住也。有二十小劫、第九小劫、人壽減至五萬歲。時第一拘留孫佛出世。減至四萬歲、時第二拘那含牟尼佛出世。減至二萬歲、時第三迦葉佛出世。減至一萬歲、時第四釋迦牟尼佛出世。第十小劫人壽減至八萬歲、時第五彌勒佛出世。第十五小劫、於減劫中、第六師子佛乃至欲樂佛凡九百九十四佛、相繼出興、說法度人。第二十小劫、於増劫中、樓至佛出世、滿足一千也。已上二十小劫皆悉一増一減、名爲住劫。壞劫

者、謂世界壞滅也。有二十小劫、如火灾起時、壞至初禪天、始從地獄、終至梵天、有情衆生、經十九增減劫、次第壞盡、唯器世間空曠而住。乃至一切有情都盡、最後一增減劫、方壞器世間、有七日從海底出、大海盡竭、須彌崩壞、風吹猛焰、燒上梵天、悉成灰燼、乃至三千世界一時燒盡、名爲壞劫。

空劫者、謂世界空虛也、有二十小劫、壞劫之後、自初禪梵世以下世界空虛、猶黑穴、無晝夜日月、唯大暗黑、名爲空劫。耳邊とは完骨とて耳の高き骨のことぢや。

汝やうく自身の情量の極るだけをもつて、世間の大小を盡さん事、中々思ひもよらぬ事也。常に見、恒に聞く所をもつて、未だ見ず未だ聞ざる所を論ぜんと、拘儒小士の推量臆度にて、反て己を縛り人を縛る。惡ぞ聖人を道に足らん。一己の情量決して天地を窮むべけんや。

人は畢竟人たるのみ、宇宙といふも、人生といふも皆吾人の心より書き出したるものに外ならぬ。是を以て吾人は兎角常に見る所に偏し、恒に

聞く所を執して以て天地の大を極めたやうに思ふ。これ所謂拘儒小士で末節に拘束されて自由のさかぬ學者、斗筭の小人物たる所以である。今日科學者と稱せらるゝ輩が僅かに顯微鏡や、望遠鏡の及ぶ所だけを窺ひ見て、天地の大を臆度し、一己の情量を以て神明佛陀の存在を否定し、先聖の遺訓を蔑視して自ら學者なりと誇り居るは洵に拘儒小士の尤なる者と謂はねばならぬ。彼等が唯物論の滓渣を食ひ利己主義の汚濁に住みて耻るゝを知らざるは、恰も莊子に、所謂濡需者豕の蝨擇、疏鬣自以爲廣宮大囿……乳間股脚、自以爲安室利所底の人物で寧ろ憐むべきである。そこで蟻の大將は論結していふ、

汝よくこれをしらば我々が小なるをもあなどらず、汝が大きなるにもほこらず。一切衆生相に於て彼我の見を斷じて後、我いふ所を理會すべし。世間に處するの道は彼我の二見を止て、おのれが一己の情量をもつて大小を論じあらそはずんば、いつも正月の心地ならん。これ莊子が逍遙遊の意味なるべし。

一切の煩惱妄想は我見を母として生れ来るので、我見は差別の相に執著して彼此の隔を見て、我を是とし、他を非とし、吾を益し、彼を損する。胸中に我他の二見があれば一切の人と物とに觸れて、必ず順逆の二つを見る、順逆の二つを見る故に喜怒哀樂の風波が真如の大海を攪亂して放肆邪侈の狂瀾を捲き起すに至る。之に反して聖人の心は止水の如く明鏡の如くで將らず迎へず、物に應じて逆ふとがない。かゝれば萬物は我有となり、吾は亦萬物の有となつて、我と萬物と間がない是に於て乎從容として萬物と共に遊ぶとができる。春日潜庵が

一念克復すれば天空海濶の氣象

というたやうに、吾人が一己の私念に克つ時は天に喜びあり、地に光あるを見ると必ずできる。潜庵また云く

君子も亦其遇ふ所に安んずるのみ、蓋し君子の心は一身の計にあらず、一家の爲にあらず。嗚呼其見る所や遠し、其期する所や大なり。小園の風月襟懷に適し、一堂の靜觀恬然として自得す。

此自得自適が人間最大の幸福である。天下の至貴とは勢力を得官位に上るを謂ふのではない、天下の至富とは金玉を積み綾羅を装ふを謂ふのではない、天下に至壽あり、千秋萬歳の齒を重ねるを謂ふのではない、分に應じ性に安んずれば貴く、情に適し足るを知れば富み、死生を明めて天を樂めば壽いのである。

粉蝶辨色

此篇は莊子齊物論の大意を叙べたので、齊物論は莊子が死生を齊觀し、順逆を同視し、是非を融合して天下是非の物論を一掃に掃蕩し去る所の大文字である。夫れ蛇は脚なきを是とし、百足は脚あるを是とす、僂僂は白晝を非とし、人間は暗夜を非とす。春雨霽の如くなれば雅客は之を賞して佳期と爲せども行人は其泥濘に苦んで之を詛ふ、秋月光輝を放てば詩人は之を觀て錦腸を吐けども盜兒は其照鑑を憎んで之を不祥とする。さすれば是非は脚の有無にあらず、順逆は晝夜の明暗に在らず、禍福は春雨と秋月とにあるのではない。故に我を是とし、他を非とし、彼を是とし、此を非としたなら、是非の論は遂に窮極する所は無し。

彼の儒墨を尊ぶ者は老莊を非とし、老莊を奉ずる者は儒墨を非とし、釋教を信する者は基督教を嫌ひ、基督教を執する者は佛教を厭ひ、念佛に心醉する者は題目を排し、題目に熱心なる者は念佛を擯斥し、坐禪を修する

者は教相を唾棄し、教相を修むる者は坐禪を度外視する。されど儒墨を以て老莊を非とするは脚あるを非とし脚なきを是とする蛇の論である。基督教を尊んで佛教を卑むは暗夜を尊んで白晝を卑む僂僂の論である。念佛を奉じて坐禪を斥くるは照鑑を悪んで秋月を不祥とする盜兒の論である。

抑も道は一である、猶ほ天邊の月の如く、大海に映すれば自ら壯大の觀を呈し、流水に映すれば自ら碎けて流るゝが如く、汚水に映すれば自ら穢れたるが如く見ゆる。併し月には少しも違ひはない。之と同じく道は一である、環中虛白の絶對の天にあつて無窮の萬方に應ずるを以て、衆生の心水に差別あるに隨て、自ら差別の相を現するのである。即ち耶蘇の心水に映じては神と爲り、釋迦の心水に映じては佛となり、マホメツトの心水に映じてはアラとなり、念佛行者の心水に映じては阿彌陀となり、參禪道者の心水に映じては本來の面目となり、神道者流の心水に映じては天照大神となる。斯くして衆生の心水の差別に従て神明となり、

佛陀となり、菩薩となり、鬼神となり、山神となり、疫神となる。所謂
千江水あれば千江の月
である。故に達人より是を觀れば是もなく非もなく、順もなく逆もなく、
迷もなく悟も無い。所有哲學、所有宗教の中に一貫の大道があることが知
れる。此趣意を述ぶるのが粉蝶辨色の目的である。粉蝶とは粉翅の蝶で
胡蝶のとちや。

槐の木（まじゆ）の虫どもより集り遊び居たる所へ、粉蝶（こなて）ひらくと飛來る。槐の虫
ども笑ふて云、汝は何國のものぞ、純白なる身に白粉して甚伊達（いまだ）こき也、
薄紙（うすかみ）の如き翼を鼓（た）き、あかしげなる飛やうなり、そも何といふものぞ。

槐の虫の粉蝶を怪む、猿の犬を嫌ふ、人の蛇を惡む、念佛の題目を疎ん
ずる、皆其外相に著眼して其真相を洞觀せざるの致す所である。故に毛
嬙西施の美を以てするも、之をして口に腐鼠を衞み、身に海藻を著け、
腰に死蛇を帶せしめば乞食非人と雖も鼻を掩ふて退くであらう、されど
之に粉黛を施し、玉を佩び、弁を飾り、紵素を曳き、蓮歩を移し、巧笑

を漏し、秋波を送らしめば如何なる石部金吉と雖も、其色を悦ばざるも
のはない。之を外相に迷ふの病といふ。澤庵禪師が遊女の贊に

佛は法を賣り、祖師は佛を賣り、末世の僧は祖師を賣る。汝は五尺
の體を賣つて一切衆生の煩惱を救ふ。色即是空、空即是色、柳は綠、
花は紅、

水の面に夜なく、月はやどれども

こゝろもとめず影ものこさず

とある。

そこで粉蝶が論じていふ。

粉蝶が云我は莊子（しやうし）が夢に見えし蝶といふもの也。汝らは槐（まじゆ）の木にのみ住な
れて、其外をしらす。我これを憐（あはれ）み思へば又汝らは我形（わがかたち）を憐（あはれ）み笑ふか。汝
らが骸（かた）の青も我自（わが）も自身の巧（たく）には非ず。もとより造物者（ぞうぶつしや）のわざなれば其間
に於て何ぞ是非（せひ）すべけんや。

外相に迷ふが故に槐の虫は蝶を見て怪み、蝶は槐の虫を憐む。されど色

即是空と體達して見れば白きを以て青きを笑ふともなく、空即是色と洞觀して見れば青きを以て白きを怪しむともない。青き虫も、白き蝶も造物者の妙手に出て、優劣のある筈はない。抑も一切衆生の境遇は皆六合に充滿せる一大靈心の催ほしによつて興へられたものなれば空を飛ぶ鳥も、水に住む蛙も、地を行く獸も、家に住む人も皆悉く其自身にとつては最善最良の地位に居るのである。同じ人の中にあつても天子あり、大官あり、學者あり、商工あり、富めるあり、貧きあり、病弱なるあり、強壯なるあり、天なるあり。壽なるあり、千態萬狀であるが、一人として平等に佛の恵みを被らざるは無く、一人として最善の境遇に居らぬはない。富める者は富めるだけの原因を祖先以來造り來つて富んでゐ、貧しき者は貧しきだけの原因を祖先以來積み來つて貧しくなつたので、決して偶然ではない。これと同様に強壯なる者も、病弱なる者も、各それ相當の原因があつて今日の境遇をなしてゐる。造化の攝理には少しも不公平はない、花は紅に咲くが其最善の境遇でないか、柳は綠に垂るゝが

其最良の境遇でないか、犬は夜を守り、猫は鼠を捕るが其最善の境遇でないか、小兒は泣くが其最良の境遇でないか、母は子を育てるが其最善の境遇でないか、君主は天下を治めるが其最善の境遇でないか、罪人は罰せらるゝが其最良の境遇でないか、乞食は橋の下に臥するが其最善の境遇でないか。カライルは

人間最高の知見は運命に服して之を以て最善なりと信ずるにありといふた。

莊子が夢に見えし蝶とは莊子齊物論に、昔者莊周、夢爲蝴蝶、栩栩然蝴蝶也。自喻適志與、不知周也。俄然覺則蓬々然周也。不知周之夢爲胡蝶、與、蝴蝶之夢爲周與とあるをいうたのちや。蝴蝶は儒者の偏見を陳べていふ。

それ物の争は是非より生ず。仁義を祖述し、堯舜桀紂の善惡を別にし、孔孟を規矩とし、王道をたつとび、力をもつて仁義を假、霸道を惡むは儒者の是非なり。

それ争ひは彼を非とし此を是とするより起らぬはない。古への帝堯、帝舜を聖人と心得、夏の桀王、殷の紂王を大逆無道の暴君とし、仁義を以て大道を盡したる者とし、之を宗として紹述し、孔子孟子を規矩として、仁義を以て天下を治むる王道を尙び、仁義を外面に粧ふて内實は強勝弱敗を目的として政道を行ふ霸道を惡むのが儒者の是非ぢや。儒者は仁義を尊べど仁義は別々のものか同一のものか、別々とすれば何を以て之を統一して道とするか。同一とすれば何故二つに分けて説くか。仁義は何故に人の守るべき道とするか、人は何故に之を行ふべき義務があるか。儒者は孔孟を規矩とするも、孔子と孟子とは必ずしも同一の教を説いたものではない。孟子は性善を骨張するも、孔子は必ず性善と明言はせぬでないか。仁義が必ず政道として充分であるか、霸道が必ず政道として惡結果を來すものであるか。同じく儒者とはいふものゝ、孟子は性善を主張し、荀子は性惡を説き、楊雄は善惡の性混すと論じ、蘇東坡は善惡共に無いと説いたではないか。かくして是非の論紛々として窮る所はな

からう。

祖述とは中庸に、仲尼祖述堯舜憲章文武とある宗として紹述するをいふのぢや。王道霸道とは孟子に、以力假仁者覇、覇必有天國。以德行仁者王。王不待大、湯以七十里、文王以百里とあるにて大意を知ることができやう。次は道家の議論。

盈るを惡み、智慧を退け、聖を棄て愚を復するは道家の是非なり。

黄老を祖とする道家は退嬰主義を専らとする故盈つるを惡む。淮南子に孔子觀桓公之廟有器焉。謂之宥卮。孔子曰善哉我得見此器。顧曰弟子取水。水至澁之其中則正、其盈則覆、孔子造然革容曰善哉持盈者乎。乃至夫物盛而衰、樂極則悲、日中移、月盈虧、是故聰明睿智、守之以愚、多聞博辯、守之以陋、武力毅勇、守之以畏、富貴廣大、守之以儉、德施天下、守之以讓とあり。宥卮と稱する器は其半まで水を入るれば正しく立ち盈たせば覆るやうにできてゐる。これ人生を譬へたものである。世に充分を求むる者は決して目的を達するとはできぬ。必ずしも騏驥を求め

て之に乗らんと欲すれば終身馬を得ず、必ずしも西施楊妃を得て之を要らんと欲すれば終身妻を得るとはできぬ。

七分の活計に不足なし

八分目の腹に醫者要らず

九分にて足れば間違なし

である。老子に、富貴而驕、自遺其咎、功遂身退、天之道といひ、又、禍莫大於不知足、咎莫大於欲得とあるは此意ぢや。

知慧を退くるとは老子に、慧智出、有大偽、六親不和、有孝慈と道ひ又淮南子に國治、可與愚守といふ如く機智を退けて朴直愚樸に復せしめんとするのぢや。

聖を棄て愚を復するとは老子に絶聖棄智、民利百倍、絶仁棄義、民復孝慈とある。これらは皆道家の偏見で通方の論ではない。次は佛氏の偏見ぢや。寂滅にもむき、親兄弟を辭して一切所有を捨、戒律を持て貪瞋癡の三毒を斥るは佛氏の是非なり。

寂滅に趣くとは涅槃經に、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂とある。小乗教の説に従へば三界は四苦八苦に逼られて片時も安穩なるとは無い、此三界の生死は前生の罪業の結果である。前生の罪業は吾等の煩惱より起つた。故に道行を修めて煩惱を對治すれば再び三界生死の身に生るゝとは無いといふてある。此煩惱を對治して罪業の原因を滅ぼし、再び三界に生れぬのが寂滅に赴いたのである。これは人生を以て單に苦痛とのみ觀、浮世を以て専ら罪業の結果とする小乗の淺見でとるに足らぬ。

親兄弟を辭して一切所有を捨るとは印度の出家の風習で、元來釋尊以前の婆羅門が出家する習慣である。六親に離れ、一切の所有を拋棄せねば佛道修行はできぬと思ふは小乗佛教徒の舊思想である。大乘には在家の菩薩もあり出家の菩薩もあり、童男童女も開悟する事ができると説いてある。遁世離欲が必ずしも菩提に入る必要條件ではない。

戒律を持て貪瞋癡の三毒を斥くるとは戒律は佛弟子の守るべき規律で、

防非止惡の爲に設けた佛制である。故に戒律の精神を領得して戒律の文字に拘束せられてはならぬ。今十戒に就て謂へば一々皆吾人が精神の性徳を示したものである。即ち

- | | | | | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|---------------|--------------|-------------|--------------|
| 一不殺生………仁慈の徳 | 二不偷盜………正直の徳 | 三不邪淫………貞潔の徳 | 四不妄語………信義の徳 | 五不酤酒………節制の徳 | 六不説過………謹慎の徳 | 七不自讃毀他………謙讓の徳 | 八不燃法財………寛厚の徳 | 九不嗔恚………忍耐の徳 | 十不謗三寶………信仰の徳 |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|---------------|--------------|-------------|--------------|
- 戒
心徳

斯く十戒は一心に具はる妙徳で、坐禪して一心清淨なれば其中に一切の

戒は持たれて餘りある。一切の戒が持たれて本具の心徳が現はるれば煩惱が其儘菩提となり、凡夫が其儘佛と爲り、娑婆が其儘淨土と爲る。此理に達せぬからは非の論を起すのぢや。儒者は佛氏をもつて異端と訕り、佛者は儒教を指て三世に暗き世間法と賤しめ、自出世間の法と高ぶり、道家は虚無一玄の道を修して聖賢を抑へ、各おのれが道を是として人の道を非とす、これによつて是非のあらそひを起し、海を視とし萬木を筆とし、世界を紙として書盡すとも其諍論裁べからず。

儒者は佛教を以て異論邪説と誹れば、佛徒は儒者を指して現在一世を説く淺薄の教へで、過現未の三世を知らぬと抑へ、自らは出世間無上の大法と慢心し、道家は虚無の大道を説いて聖賢を斥け、仁義を卑しめてゐる。斯く諍論したのでは際限がない。彼等の所謂是なるものは己れに合するもので、彼等の所謂非なるものは己れに合せざるものである。されば是を求むる者は道理を求むるには非ずして己れに合する者を求むるの

で、非を去る者は背理を除くには非ずして己れに合せざる者を斥くるのである。故に世の所謂是非なる者は孰れが是か孰れが非か知るとはできぬ。これらは蝸牛角上に國を立てたる蟹と觸との争ひの如く、盲人もが象を摸して一人は頭、一人は鼻、一人は耳、一人は脚、一人は腹、一人は尾名々象の一部を摸して全象と心得、議論して止まぬと同じである。異端とは端緒を異するの義であるが今は外道邪説と同じに用ひるのぢや。虚無一玄とは淮南子に、虚無者道之舍也とある。また老子に。天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生とある。同書にまた無名天地之始、有名萬物之母。乃至此兩者同出而异名。同謂之玄。玄之又玄、衆妙之門とある。されば道家は道を以て虚とし無とし、玄とし、一とするのぢや。

これより蝶は道に常道なく、法に常法なき旨を論じていふ、銘々の道をば常とすれども物は常なるべからず。目は物を見るが役なれども、訓狐といふ鳥は夜は微塵の虫をも見れども晝は大山をも見る事能はず。

目も果して常なるべけんや。

儒佛道の一偏に拘泥するの徒が己れを是とし他を非とするは恰も眼が見るを常道として鼻の嗅ぐを道にあらずと斥くるが如く、鼻が嗅ぐとを常道として舌の味ふを異端と罵るが如くである。眼は物を見るを以て常の道とすれども鼻の目は晝は見えず、人間の眼は夜は見えぬ、これ常の道でない證據である。また今日の千里眼は眼を用ひずして見る、伊太利には手の背で色を見分け、頸で物を見る婦人がある。されば見るを以て眼の常道とはいはれぬ。

訓狐とは鼻のとで唐書五行志に、鸛鶴一名訓狐とあり、韓愈の時に、有鳥夜飛名訓狐、矜凶挾狡誇自呼とある。耳は聲を聞が役なれども、跋難陀龍王は耳なうして聞。虬は掌にて聞、牛は角にてきく、耳果して常なるべけんや。

芭蕉は耳なくして雷を聞いて開き、葵花は眼なくして日に向て轉ずる。佛圖澄は掌を以て見、又鐘聲を聞いて人語を爲した、これ亦耳を以て聞

くのではない。されば聞くは耳の常道とは謂はれぬ。
 跋難陀龍王とは法華文句に難陀此云勸喜、跋此翻善とある。法苑珠林に
 阿含經を引いて、難陀跋難陀二龍其形最大。繞須彌山七市。頭猶山頂尾
 在海中とあり、祖庭事苑には餅沙王、年設大會報龍之恩、人皆歡喜從之
 得名、爲目蓮所降。無耳而聽とある。虬とは龍の屬で蛇に似て四脚ある
 といふ。

口は物をいふ事が役なれども海外に骸の物いふ國あり、馬の物語は鼻をも
 つてす。口果して常なるべけんや。足は地に附時は歩行、側ときは蹶く、
 これ足の役なれども、蟻は倒に行、蠅は天井に仰て棲。足も果して常なる
 べけんや。聲も鐘にも借、又は竹にもかり、肺の臓に扇ぐ、風にも借、聲
 果して常なるべけんや。

蟬は身にて鳴き、青春の男女は眼にて語る。されば
 物を云ふが口の常道とはいはれぬ。蛇は足なくして歩み、アミーバは全
 身を以て口とも足ともし、錢は足なくして御足と稱せられ、達磨は足あ

つて足なしと稱せられてゐる、故に足も歩むを以て常道とは謂はれぬ。
 ロンブロンソが研究したる盲女は膝にて味を知り、趾で香を嗅いだ。佛
 家には六根互用の説もある。されば色聲香味觸共に常道はないのぢや。
 かくのごとく物ゝのく常なる事なければ、これによつて何ぞ是非の争をな
 すべけんや。汝らが我を笑ふもこれに同じ、汝が骸の青色なるをつねと思
 ひ、我骸の白を異やうなるものと思ふによつて我を非とし自是とす。これ
 髮の若々したるをもつて髭の虬結をそしる也。

人は兎角自ら是とし他を非とするが故に他人の事は秋毫の末までも察す
 る明があつても、我事となれば泰山ほどの過失も目に入らぬのが常であ
 る。淮南子に、邳人有鬻其母、爲請於買者曰、此母老矣、幸善食之而勿
 苦とある。自ら大不義を行ひながら斯様な勝手な文句を並べる人は決し
 て少くない。二人の者が相諍ふて各、自らは是なりとせば如何なる智者でも
 決するとはできぬ。若し第三者あつて諍はずして之を觀れば愚者と雖も
 其曲直を斷ずるに難くない。これ不諍の法である。

さればおのれが長じたるをもつて人の短を議するは大瓶の中の空をもつて、盃の中の空を笑ふ也。辯をもつて辯舌を折くは百舌の鳴聲にて燕子の鳴を攻る也。智慧をもつて愚痴を證するは機關人形をもつて土偶の無識なるをかなしむ也。

己れの長を以て人の短を議するは女子の乳房を以て男子の乳房を議するが如く、宗教家の議論の如きは多くこの類である。辯を以て辯を折かんとするは水田の蛙が溝の中の蛙に鳴き勝たんとするが如くで、政治家の議論は皆此類である。智慧を以て愚痴を證するは頭腦を以て肛門を誹るが如くで、學者の議論は皆此類である。それ人の走るには手を以てするのではない、されど手なければ速かに走るとができぬ。鳥の飛ぶには尾を以てするのではない、されど尾なければ高く飛ぶとはできぬ。物には皆不用の用といふものがある。故に智愚相争はず、長短相攻めざるが天地の大道である。

夢の裡にて我と遊ぶ人あり、我と争ふ物あり。夢さめて後、遊びし人もな

く、あらそひし物もなく、何物をか真とし、何物をか幻とせん。

これは莊子が人生大夢論である。胡蝶の一生が莊子の夢か、莊子の一生が胡蝶の夢か、孰れが夢、孰れが覺、辨ずるとはできぬ。故に人生を夢といふも夢、人生を夢でないといふも夢、人生を夢といふも夢なりといふも夢、人生を夢でないといふも夢なりといふも夢ぢや。されど人生を夢に非ずと見れば人生を夢といふも、夢にあらずといふも等しく夢ではない。故に人生は夢覺を以て論ずべきものでない、死生も其如くで生は死者の夢、死は生者の夢とすれば死も生も二つながら夢である。併し死生は夢にあらずとすれば死は生者の覺めたるにて、生は死者の覺めたのである。されば死生は夢覺を以て論ずべきとでない。夢覺同時、死生一條と達觀して見れば生を喜び死を哀しむの愚かなるとが知れやう。況や名利に狂奔して終生役々たるが如きは愚中の愚と謂はねばならぬ。カアールは名利に狂奔する英雄を癡犬に喩へた。癡犬は其尾に空鐘を結びつけられて其鳴るに驚いて奔る。愈走れば愈鳴り、愈鳴れば愈走り、走り

に走り、鳴りに鳴て後に斃れる。世の英雄なる者もその如く空名空利と稱する鐘を己れの尾に結ばれて、愈々名を得れば、愈々名を揚げんとし愈々利を博すれば、愈々多く利を漁せんと狂奔して、終身役々として斃れて後に止む。古人の語に

君子は樂み餘りあつて名足らず、小人は樂み足らずして名餘りあり

とある。能く善く味ふべきである。

故に聖人は我を非とする者あれども其非を容す、我を是とするものあれども其是を入ず。萬物はおし平均齊きものなり。吾よく齊うするにあらず、齊うすべき事あらば物を齊うするに非ず。これ莊子が齊物論の意味也といひ終て飛去。

聖人は我を謗る者あるも其謗を受けぬ、之に反して小人は我を毀るものあれば其毀りを身に帶して離さぬ。其謗りを受けざる故に聖人を謗る者は却て自ら其謗を受くるに至る。ソクラテスは人の爲に打たれ、蹴られ

ても怒らず、罵詈を加へられて恨みず。『彼の毀りは我に適せず、我は之に當らず』というて平氣であつた。聖人は毀譽の二つに心を動さぬのみではない、死生の變に於ても同様である。達磨の佛性論には、凡夫當生憂死、臨他愁飢、皆名大惑。所以至人不謀其前、不慮其後、無變古今、念々歸道。

とある。凡夫は生を食つて却て死に近づき、譽を求めて反て毀りを蒙り、利を計つて反て害を招く。これ萬有齊一の眼が開けぬからである。昔し仰山問滄山曰、百千萬境一時來時如何。滄山曰、青不是黃、長不是短、諸法各位自位、非于汝事、仰山則作禮。

萬有は齊一であるが、混一ではない、青黄長短各、自位に住して平等なのである。故に吾人は私欲妄想なければ至る處に樂天地はある。達磨の佛性論に

無妄想時、一心是一佛國。有妄想時、一心是一地獄。乃至、若不以心生心、則心々入空、念々歸靜、從一佛國、至一佛國、若以心生心、則心々

不靜、念々歸動、從一地獄、歷一地獄、
と示してある通りぢや。熊澤蕃山の語に

仁者は大虚を心とす、天地萬物山川河海みな吾有なり、春夏秋冬幽明晝
夜、風雷雨露霜雪みな吾行なり、順逆は人生の陰陽なり、死生は晝夜の
道なり、何をか好み、何をか惡まん、義と共に從ひて安し
とあり、盤珪和尚は

をしやほしやと思はぬゆゑに

今は世界が吾物ぢや

といはれた。これ皆萬有を齊觀したる達人の見である。

萊 蕪 苦 樂

この篇の意は人生には苦あり樂あり、利あり害あるが故に、人生を單に
苦のみと思ふも迷ひであれば但に樂のみと想ふも亦誤りである。從つて
人の苦痛は快樂より多いと思ふも迷ひであるが、快樂が苦痛より多いと
想ふも亦誤りである。故に苦痛にのみ著眼して厭世主義を唱へるにも及
ばず、さりとして快樂にのみ執著して樂天主義を奉ずるも亦偏見たるを免
れぬといふにある。淮南子に、
譽生則毀隨之、善見則怨從之、利則爲害始、福則爲禍先。唯不求利者爲
無害、唯不求福者爲無禍。

とあるが如き、また涅槃經に功德天と稱する美人と黑暗女と名くる醜婦
と常に同伴してゐるとを説いてあると同様の説と思はる。

萊根蕪善に謂て云、汝と我とは同じ一類にて殊に何國にても同じ島に生た
ち誠に青松の知音なり。然れども是まで互の身の上の苦樂を話あふたる事

もなし。先づ汝は何を樂み何を苦とするぞや。

天上界にさへ五衰の苦みがあると聞く、況や人間界に苦樂のあるは致し方はない、故に苦に居て樂を妄れぬ工夫が肝要である。

中根東里は、

出る月を待つべし、散る花を追ふ勿れ

といふた吾人も老來意氣沮喪して頭上に積む雪を歎くよりは、

白髮は來世の曙光なり

として希望を失はぬが好い。

青松の知音は長く諒らぬ友誼のとちや。孟郊詩に、近世道交喪、青松落

顔色とあり、註に青松之色四季不改、道交喪失如松落色とある。

燕菁が云、某が樂みは生れて間もなく、二葉の時より摘菜と稱せられ、其

後は葉付燕菁ともてなされ、肥臭き身をもつて、椎茸鱧の摺身などと肩

をならべ、あるひは胡麻味噌に和られて、風呂吹となり、又は香のもの

なる莖となり、年よりて皺だらけになれども干燕菁と賞玩に預る、これら

某が譽にて一生を樂む所以なり。去ながら生れ付長短く、横肥で畠物仲間にて侏儒とゆびさゝれ、不仁ものゝ部に入事一生涯の苦なり。又汝が苦樂はいかん。

月に盈つるとがある以上は必ず缺けるとがある。花に咲くとがある以上必ず散るとがある。潮にさすとがある以上は必ず退くとがある。人に生るゝとがある以上は必ず死ぬとがある。花が散るを厭ふなら始めより咲かぬがよい。月が缺けるとを嫌ふなら始めより盈たぬがよい。人が死ぬとを悪むなら。始めより生れぬがよい。人が生きてゐる以上は生きてゐるだけの苦みもあり、亦生きてゐるだけの樂みもある。故に吾人は少しも不足を云ふ權利はない。

次は大根の苦樂ぢや。

大根が云、某甲が樂も汝に劣らず。別して膾となつて膳部第一の大役を勤むる事、汝が及ばぬ我身の大慶なり。年よりて干大根となつては夏の初つかたまで、蘆蒿といへる尤物と出逢て淺からぬ樂みなれども、稟受胴體長

く、色白には生たちぬれども鳥物仲間にて俤子人形の化物、又は播種はくしゆの變化とさみせらるゝと、一生の苦なり、汝は勢の短き事を悔み、我は如突高き事を歎く也。いでや造物主人の許へ行て汝と我とよい加減に造易つくりかへてもらふべしとて、二人ながら伴ひ行んとす。

此大根の迷執は何人にもある、造物者に對する不足不満の念は何人にもあらう、併しこれが凡夫の淺ましい所ぢや。夫れ天は萬物に私しせぬ、美しき花を開く木には美しき實はならず、美しき實のなる木には美しい花は咲かぬ。好い聲の鳥は其貌が醜く、其貌の美麗なる鳥は其聲が必ず悪い。角ある獸には牙を與へず、牙ある獸には角を與へず、大きな男は小さな妻を娶り、大きな女は小男と同穴を契る。賢女は醜婦多く、美人は多く薄命である。學者の子に學者がなく、高僧の弟子には賣僧が多くなる。天は決して一人に私しするものでない。

そこで大根と燕菁との迷夢を覺さん爲に人參が進み出た。

尤物とは美人のことぢや。左傳の昭公廿八年の條に見へる。

俤子人形とは芥子人形で豆人形のことぢや。

側に胡蘿默然として居たりしが、大きに笑ふて云、嗚呼、汝らは惑の甚しき物なり。それ物の齊しからざるは物の情なり、萬物とくく天に出、人事の致す所に非ず、自然にして然るもの也。菜根が長も燕菁が短さも自然の性にして今更損益すべき物に非ず。燕菁は秃の轉語にして短小の名なり、菜根は長きをもつて大根と稱す。しかれば汝らは其形と名と正當を得ながら。今又造物主人に請て、形を作り易てもらはば、大根燕菁の名も失果て何物とかよびなすべきぞ。大根は長く太きを重寶し、燕菁は横肥たるを愛す。これ汝等が自然の徳用を反て不徳と思へるや。鳥は日々に染ざれども色黒、鶯は日に浴せざれども色白し。これ亦彼らが自然の性なり。

洵に胡蘿の言ふが如く、大根の太く長きは天の彼に成せる徳で、燕菁の圓く短きは造化の彼に與へたる性である。さるを之を不徳と思つて我儘なる考を起すから不平は絶えぬのである。之と同じく、車夫の足は太いのが天の彼に成せる徳で、女子の尻は大なるのが造化の彼に與へたる賜

である。さるを女子は其尻の大なるを愧ぢ、車夫は其足の太きを嫌ふは何たる謬見であらう。これ鳥にして黒きを惡み、鷺にして白きを嫌ふと同様ぢや。凡そ天下のものは其長處は必ず短處で、其短處は必ず長所ぢや。故に如何なる良薬にても藥毒の殘らぬ物はなく、如何なる善良の事にも弊害の伴はぬものは一つもなく。かくして美人は美の爲に身を滅ぼし才子は才の爲に身を誤り、仁者は仁の爲に己れを損し、智者は智の爲に役せられ、正直なる者は正直の爲に人に欺かれ、能く泳ぐ者は溺れて死し、能く戦ふものは其命を全うせずして殺さるゝ。

故に達人は天の攝理に不平を言はず必ず其遇ふ所に安んずる。彼の乞食に齊しき哲人エピクテタスは、
衣なく、家なく、寵なく、奴僕なく、市邑なく、塵垢滿身、而して何物をも有せざる一介の人にして猶ほ悠々自適の生涯を送り得る一事は、如何にして之を能くし得んか。見よ神は其能くし得べきことを示さん爲、此所に一個の人を差遣せり。よく予を視よ、予は市邑なし、所有なし、

奴僕なし。予は地を席として寝るなり、予は妻を有せず、兒子を有せず、所領を有せず、有する所は唯天と地と、更に亦見すばらしき一領の上衣のみ。然も予は何物をか欲望せんや、予は哀まざるにあらずや、何人か予が欲望する所を求め得ざりしを見たることありや。予は何れの日か天を怨み、人を咎めたることありや、予は何れの日か何人かを非難せしことありや。予が顔色の悲酸するを見たるものありや。然し予は如何に人の恐れ尊奉する徒輩(王侯貴人)に應接せしか。予は奴隸の如く彼等を待遇せざりしか。人の予に面する時、それ王侯に面するの思あらざるかといふた。

胡蘿は更に進んと云ふ、

汝ら我を見よ、長からず、圓からず中脬の形を得たりといへども、色徹赤に生たち、鳥物仲間にて高陽、あるひは酪酏拔當上戸など譏られ、又は塗樽の吸捏と見立にあひ、笑はるれども、我素より下戸なれば一滴の酒をも飲たる事はなけれども、いつも色の赤は自然の性なれば是非なし。冬瓜

が白粉は彼が化粧どるに非ず、茄子が鐵漿も彼が伊達にあらず。是亦自然の性也。

天下の物は一として平等に天恵に與らぬはない。大き物は大きに利あつて細きに利ならず、細き物は細きに利あつて大きに利ならず。長きものは長きに便あれども短きに便ならず、短きものは短きに便あつて長きに便ならず。高き者は低きに宜しからず、近きものは遠きに宜しからず。各、一得一失、一利一害があるから、其得失利害を相殺して見れば何れも平等である。故に

溪深ければ 柄長く、溪淺ければ 柄短し

で、深淺長短各、不足もなく剩れるもない。されば花は紅にして餘りもなく、不足もなく、柳は綠にして不足もなく、剩りもない各、平等である。人事も其通りで子のある人は子のあるだけの樂みもあるが、同時に子を養ふ苦みもある。子の無い人は子の無いだけに樂みもないが、同時に子を養ふ煩ひがない。故に子のある人も子の無い人も利害苦樂を相殺して

見れば優劣はない。位置の高い人は位置の高いだけの勢力もあるが、同時に位置に相當した心勞もあり。之に反して位置の無い人は位置の無いだけに心勞もないから、勢力もない。これ亦利害得喪を相殺して見れば優劣はない。教育あり學問ある人は教育あり學問あるだけの心の樂みがある代りには、又それだけの心痛がある、人間文字を知るは憂の始めといふ諺の如くぢや。之に反して教育もなく學問もなき人は學問上の樂みが無い代りには、單純の頭腦を以て何事にも呑氣にしてゐらるゝ、資産のある人は資産のあるだけに安樂に暮してゐる代りには資産の保護や財産争ひの爲に言ふに謂はれぬ苦みをする。之に反して其日暮しの人は毎日勞働する苦みがある代りには盜難の虞れもなく、財産を横領される心配もない。御家騒動は富豪にはあるが貧民は絶えてない。果して然れば貴きも賤きも、富めるも貧きも、賢きも愚かなるも、其利害得失を相殺すれば平等である。是を以て眼なきものは好き色を見るを得ざるを哀まらずして汚れたる物を見ざるを喜ぶべく、鼻なきものは芬き香を聞くを得

ざるを歎かずして惡臭を嗅がざるを欣ぶべく、舌なき人は美味を味ふを得ざるを恨まずして人を罵るを得ざるを悦ぶべく、頭なき者は頭痛の虞なきを樂み、腹なきものは腹のたゞざるを幸と思ふがよい。高陽とは書言故事に、高陽王雍爲相日一食萬錢。李崇曰高陽一飯敵我千日とある、奢侈のことぢや。

冬瓜をかもうりといふは甌瓜と書して、毛ある故に名を得たのぢや。汝らが形も我形も固より天道より造して授け給ふ所なれば銘々の身の分上を安んじて天道を樂むべし。天の命令を奉じ待ずして萬事を差理無理に行付て、一朝には其利用を得る事あるには似たれども、永久を保つ事かたし。今強慾不義にして、不命の財産を貪り、私知を巧にして虚偽の寶へ人を陥溺の輩に曉したしといひ止。

造化の攝理は一切の有情にも非情に平等齊一であるから、無情の山川にも有情の人間にも同様である。況や人間の中にて彼に私し、此に幸するやうなことはない。されば吾人が一切の行爲は必ず其結果を生じて吾人

自ら之を收むるに至る。善因善果、惡因惡果、必ず此身に報い來る、此點については一點も疑ふべき所はない。エマーソンはいうた、

何等の生物と雖も一として天の私しするものなく、却て皆多少の増損補償ありて、所有稟賦と所有缺陷とを衡平にす。一部分に施されたる餘剰は、同じ動物の或る他の部分より控除せられしものを以て補填したる而已。若し頭と頸とが長大せられたらば、胴と尻とは切つめらる。

機械學上に於けるエテルギイの理は亦是他の一例のみ。力に於て得る所は時間にて之を失ひ、時間にて得る所は力にて失ふ也。

氣候と水土の影響是亦其一例とす。寒冷なる氣候は不利なるも能く人をして活潑ならしむ。而して不毛礮確なる土地には瘴癘、鱷魚、虎、蝎等を産せず。

所有過剰は不足を生じ、所有不足は過剰を來す。一切の甘味は其酸味を有し、一切の禍は又其福を有す。凡そ快樂の容受器たる機能は其快樂に相當する責罰を之が濫用に課せらる、是れ开が節用に應るに开が長生を

以てする者とす。

富若し増殖せば之を消費する人々も亦増加す。天は壘蕪及び例外を嫌ふ。夫の千差萬別なる境界が自ら平等に歸し去るは、大海の波浪が其最も高き蕩漾の極より忽ち頽れて平面を求むるの迅速なるに譲らし。世には恒に一切を平等にする事情の在るありて、驕れる者、強きもの、富める者、幸なる者を悉く他の人々と同じ地面に引下すなり。茲に入あり餘りに強猛にして交際に適せず、暴戾なる兇漢にして穢、海賊の臭味を帯びたる者ならんか、天は可憐なる幾多の子女を其人に授けん、而して子を愛し、子の爲に憚る親心は、其父の倭き澁面を懇勸なる禮貌に和げん。

斯の如く宇宙は活く、人間萬事一として福善禍惡の理に漏る者はあらず。夫の吾人が心裏にありて道念たる所の心魂は吾人の身外にありては理法たる也。世は之に依て造られたり。賞罰は決して延期せられず、完全なる衡平法ありて人生の所有部分に其權衡を正す。寔に世は九々の表の

如く、或は又方程式の如し。所有秘密は告げられ、所有罪惡は罰せられ、所有德行は報いられ、所有冤枉は雪がる。皆黙々の裏に於て百發百中するのみ。

百事百物は皆二重にして兩々相對す。賣言葉に買言葉、目は目を償ひ、齒は齒を償ひ、血を血を償ふ。愛は愛に應ず。與へよ、然らば汝も與られん。何物をも危うせざれば何物をも得ず。虎穴に入らざれば虎兒を得ず。一日作さざれば一日食はず。害を謀れば害に逢ふ。人を咒はば穴三つ。天に向て睡する者は其面を汚す。

吾人は自ら損害を蒙るとなくして他に損害を加ふる能はず。バロク曰く何人に於ても未だ嘗て其長處にして而も己れに有害ならざる者はあらず。但し災禍の補償は多年の後に於て亦智性の目にも明白になり來る者とす。例へば大熱病、四肢の割斷、慘酷なる失望、財産の損失、戚友の死亡等は其當時に於ては、實に不償の損失と思はれ、又到底償はれざる者と見ゆ。然れども百發百中なる歲月は、萬事の裏面に伏在する治癒力を漸々

に發現し來る。即ち親友、妻女、兄弟、情人等の死の如きは、唯純乎たる損失のみとしも見えなんと雖も、後年に及びてや、一の嚮導者若くは守護神たるが如き觀察を呈す。何となれば其事たるや普通に吾人の生活法上に革新を起し、其閉ちんとを待つ、ある幼年時代、又は青年時代に終を告げしめ、慣れ來りし職業家庭或は生活法を打破して、品性の發育に一層利なるが如き新職業新家庭或は新生活法の成立を許せばなり。エマーソンの言ふ所は一々真理の正鶴に中つてゐる。實に天の配劑には一寸の隙もない、必ず善惡禍福相報償するものである。故に吾人は天命を奉じ、分に安んじて、浮雲の富貴を希ふてはならぬ。古語に

富貴なれば驕奢を生ず、驕奢なれば淫亂を生ず、淫亂なれば貧賤を生ず、貧賤なれば儉謹を生ず、儉謹なれば富貴を生ず

とある。この循環によく注意せねばならぬ。

地 黃 精 靈

此篇は莊子養生主の大意を抒べたので、莊子が養生主の目的は、世人が生を養ふ所以のものを以て却て生を害するの惑を解かんとするにある。思ふに小人は身を養ふとを知つて心を養ふとを知らず、君子は心を養ふを以て身を養ふの本とする。子を以て之を觀れば世人の所謂衛生なるものは衛生にはあらずして害生である。牛乳ソツプ等の柔かなる物を食うて胃腸を弱くし、チアシスターゼと稱する消化劑を常用して消化器を無能とし、セムや仁丹を以て衰弱せる神経を興奮して愈々衰弱に走をかけ、可成寒風に當らぬやう室内に蟄居して皮膚の抵抗力を滅殺し、煖爐を以て居室を温めては却て感冒に犯され、毛皮の襟巻を爲して反て咽喉を害し、旨酒佳肴に飽いては却て毒血を製造しつゝある。殊に生存競争の爲に、否、無用なる生活費用を得んが爲に、焦心し、煩悶し、不健全なる主義や、卑陋なる趣味を懷いて、世を詛ひ、人を罵り、晝夜に精神を勞して、

寝ねても猶ほ悪夢を感ずるが當世縉士の常態である、かゝる人々に是非本章を繙かせたいものである。

梅亭の主人養生の爲に地黄丸を服用す。ある時忽然として眞黒なる法師現れ出て云、我は君の常に服用し給ふ地黄丸の精なり。君我を愛し服して養生と思ひ給へども未だ養生の眞實義をしり給はざるゆへ、其奥旨を教申さん爲に願われりとして竹篾を斜にかまへ、一調子あげて云。

それ生を食する者は却て生を傷けるとが多い、世の神經衰弱患者の如きは絶えず其健康をきづかひ、千思萬考して其生を養はんとを努め、晝夜戦々として其身を害するを憂へてゐる。これ其神經衰弱をして愈益甚しからしむる所以である。また肺結核患者の如きは不治の病なりと聞いて失心落膽の極、煩悶に重ぬるに煩悶を以てし、百方手を盡して生命を長からしめんともがくのである。これ彼等が病患をして愈益甚しからしむる所以である。譬へば游泳の法を知らざる者が水中に陥りたるが如くで、周章狼狽して手足をもがく、手足をもがくに從つて愈々水中に沈む。之に

反して游泳の法を知る者は水に陥ると雖も決して狼狽せぬ、靜に我身を水に任せて置く、故に水の浮力は直に彼をして水上に出しむる。吾人が大患に陥りたる時も亦、吾身を病氣と醫師に一任し、運命に安んじて一日の生命を欣ぶ時は、自然に恢復に近づくものである。世の健康なる人々が養生の爲にとて一種の藥材を常用するが如きは實に一種の不養生である。必ず藥毒の苦むる所となる。故に生を食らざるが養生の第一義である。淮南子に、太上養神、其次養形、神清志平、百節皆寧、養性之本也。肥肌膚、充腸腹、供嗜欲、養生之末也とある、能くく玩味すべきである。地黄とは其根を藥用とする宿根草ちや、花は胡麻の花に似て黄白淡紫の別がある。

それ天地の萬物一物も生を養はざる物もなく一刻も生を衛ざる者もなし。貧賤の人は終日の身の勞苦を雪花飯又は酒の糠に甘ひて其生を養ひ、富貴の人は奇麗の曠室にあつて身を養ひ、美女花妖に常侍させて日を養ひ、琴三絃の淫聲に耳を養ひ、八珍醍醐の醜羞だらけにて口を養ひ、淫奔して性

を養ふ。しかれどもこれ皆外の五官を養ふものに似て反て内をそこのふも
の也。

蚯蚓の土を食ひ、犬の糞を食ひ、鶏の瓦を食ひ、家鴨の礫を呑み、蛇の
蛙を食ひ、雉子の蛇を噉ひ、牛の草を啖ひ、人の牛を食ふ、皆齊しく生
を養ふが爲である。併し天道は貪婪を惡むが故に度に過ぐれば必ず冥罰
を下す、口腹の欲を食れば必ず口腹の病に苦み、快樂を極むれば必ず哀
傷の罰を蒙る。眼を養ふの第一義は眼の慾を節するにある、耳を養ふの
第一義は耳の慾を制するにあり、口を養ふの第一義は口の慾を約にする
にあり、身を養ふの第一義は身の慾を慎むにある。故に雨森芳洲は
錢帛を欲せず、官職を願はず、勞に附かず、高きを養はず。嗜む所の
ものは豆腐、安んずる所のものは綿褥、好む所のものは碁、待つ所の
ものは死、靈臺内たゞ此幾件の事あるのみと云ひ、横井也有は、
一、飯は三石の掟を守るべし。

菜の花の頃をなら茶も盛り哉

一、汁一つ、菜一つ。夏は必ず茄子を用ひ、豆腐は三季にわたるべし。
香の物は論ずるに足らず。

音も香もせぬや豆腐の冬こもり

一、酒は膳の前後をすべて、三盃に過ぐかべらず……

連衆に酒ずきありて、此ヶ條に甚だ苦む、よりて了簡の一句を
示す。

いかさまに四たびはくどし村しぐれ

一、菓子はその日のあるに任す、まづ煎豆に定むべし。

煎豆に音こさませてあられ哉

一、灯は行灯にて事足りぬべし。

蠟燭はたつといふ名の寒さかな

右の條々けふより堅く守るべし。亭主に卑下の辭なければ、客に輕薄
の挨拶もなし。此やくそくをそらにして、厚味を求むる輩あらば、後
の世に蠅と生れて、風雅に不信第一の人とすべし。

誓文もたてぬ等なり神無月と戒めてある。

八珍とは周禮に、凡王之饋食用六穀、膳用六牲、飲食用六清、羞用百二十品。珍用八物とあり、註に珍謂淳熬、淳母、炮豚、炮牂、擣珍、漬熬、肝腎とある。又牛、羊、麋、鹿、麕、豕、狗、狼を八珍とするぢや。醍醐とは涅槃經に、善男子譬如從牛出乳、從乳出酪、從酪出生酥、從生酥出熟酥、從熟酥出醍醐。醍醐最上若有服者、衆病皆除とある。

そこで地黄丸の精は眞の養生法を説いていふ、外を閉て内の神氣を葆ふ、これ養生の大道なり。内の神氣を葆ふには虚無恬淡といふ妙薬にあらざんば能はず、其妙薬の配劑は視る事を收て目を衛る、目の色に奔る所を防ぐ也。聽とを却て耳を衛る、耳の聾聵を納る所を防ぐなり。淡薄の物を食して口を衛る、口の美味を愛する所を防ぐ也。略かくの如く外を防ぎ我性を寂滅不動の地位に居しめ内の神氣を葆ふ。しかるに目を養はんとて色をもつてし、口を養はんとて旨味をもつてするは生を

養はんとて反て性を傷るもの也。

神氣を葆ふとは元氣の充實して意氣の鎖沈せぬやうにするとかや。されば心を外境に馳せずして丹田に心氣を満たすが肝要である。廣瀬淡窓の語に、

養生の方は事を省くにあり、事を省くの方は欲を寡くするにありとある、此寡欲が即ち虚無恬淡である。所謂長生久視の術は些の一字を守るにある。食ふと些く、言ふと些く、求むると些く、思ふと些く、一切のとに於て些の一字を守れば必ず身安く心静かである。故に目の正月は芝居を見るにあらずして、目を閉ぢて眠るを第一とし、耳の正月は義太夫を聞くにあらずして、耳を塞いて聞かざるを第一とし、口腹の正月は大牢の滋味に飽くにあらずして、絶對に斷食するにある。三日斷食すれば耳目聰明と爲り、七日斷食すれば消化器の病を療じ、三週間斷食すれば一切の毒血を體外に排出して血液を新鮮にするに足る。かくして身を清め心を静かにすれば所謂寂滅不動の心地に住するとができる。老子

に所謂、外其身而身存

とは此事である。故に淮南子には

目妄視則淫、耳妄聽則惑、口妄言則亂。夫三關者不可不慎守也

と戒めてある。廣瀬淡窓は養生の法を説いて、

養生の道、身心俱に靜なるは上なり、身動き心靜なるは中なり、身心俱に動くは下なり、身靜に心動くは下の又下なり

というた。實に千古の金言である。

それ生は吾得て養ふ所のものに非ず。天の萬物を生ずる此生あれば、この養ひあり。落地兒の無知なるも、乳を搜り求むる事を知る。これ産子も生を養ふとを知る也。手にて應ば目を閉、風を見ては啼、これ産子の生を衛る事を知る也。且又無情の草木も雨露を得て生を養ひ、魚は水に養ひ、鳥は林に養ふ。しかれば養生の道は生と偕に來るもの也。知る事を待たずして知るもの也。故に聖人は天に任て行ひ、身を修て命を俟、生の自然にしたがつて造化の者と忤はず。是故に生を益又生を傷るの事なし。

生物が其生を愛するは天地生々の氣に因る者なれば何物も生れながらにして生を衛るの心がある。草木は教へを待たずして根を下し葉をひろげ、鳥は誨へを待たずして高く巢ひ、魚は知るを俟たずして深く潜み、鶏の雛は生れながらにして穀物を啄み、人の子は生れながらにして乳を搜るの本能がある。蜘蛛の網を張りて餌を獲、蠅地獄の蠅を捕へて消化するが如き天然の巧妙洵に驚くべきである。故に聖人の生を養ふは私知に任せずして天に任せ、人欲に従はずして自然に従ふのである。

大宋宏智禪師の時、天童山は常住物千人の用途なり、然あれば堂中七百人、堂外三百人にて千人につもる常住物なるに、善き長老の住したる故に諸方の僧雲集して堂中千人なり、其外に五六百人あるなり。知事の人宏智に訴へて曰く常住物は千人の分なり、衆僧多く集りては用途不足なり、枉て放たれんと申ししかば宏智曰く人々皆口あり汝が事にあづからず、歎くと勿れと

と隨聞記に記してある。宏智禪師の行狀の如きは實に私智に任せずして

天に任ずるの妙法である。古昔のよく生を養ふもの三家あり、儒に命を立るといひ、佛に無生といひ、道家に其身を外にして身存すといふ。命を立るといふものは、天の正命を順ひ受て、天道に任すゆへに、長生をも願はず、夭折をも悲まず。無生といふものは、養ひのよく生ずる所にあらざるを知るがゆへに、養ざるを以て生せざるにも非ざる也。其身を外にして自存すとは、其身を内にして亦其身を忘る也。

これは儒佛道三家の養生法を擧げたのちや。儒は天命に安んじて天の賦與する所を全うして人為を以て之を害せぬやうに心掛る。強ひて長生をも希はず、天死するとも哀まぬ。又佛家には諸法本來無生なり本空なりと悟れば肉體の生死に心を煩はさぬ、故に生の時は生に任せて安心し、死の時は死に任せて安心してゐる。これ生を養はずして生を養ふの道である。道家には其身を外にして彼れ此れと心配せぬ、彼れ此れと心配せぬ故に却て其身は安穩なのである。三教の説く所多少の相違はあれども、

其静を守るは一である。

立命とは孟子盡心上篇に、天壽不貳、修身以俟之、所以立命也とある。

老子の語は前に引證した通りである。無生とは二教論に、萬化本於無生、生、生者無生とある。

むかし腫物を煩ふものあり、痛つよく命も殆き折節、その父遠方にて死したりと告來る。彼者驚き周章て腫物の痛も打忘れ彼處に走り行道すがら、父の事をのみ思ひ餘念なければ、その腫物は愈のれと愈たり。これ其身を外にして身を存するの明効なり。某が論ずる所は莊子が養生主の意味なり。豈地黄丸の効能に勝すやといふ折節、表の方を大根うり通りしが、其聲を聞とひとしく地黄丸の精は消うせたり。

これは道家の養生法を例解して見せたのちや。寒さを免れんと欲せば寒さを忘るゝに如くはなく、熱さを免れんと欲せば熱さを氣にかけぬに如くはない、寒さを免れんと欲して之を避くる方法を講ずれば愈、寒さを増す、熱さを避けんと欲して之を避くる手段を盡せば益、熱さに堪られぬ。故に

洞山は寒暑を避くる方法として

寒殺閑梨、熱殺閑梨

の金言を下した。即ち寒の時は汝を寒殺して寒さを厭ふ心を殺し、熱の時は汝を熱殺して熱さを氣にかける心を殺すが好い。これと同じく、苦痛を免れんと欲せば苦痛を忘れ、病氣を愈さんと欲せば病氣を忘れ、老死を免れんと欲せば老死を怖れぬやうにするが第一の要心である。承陽

大師の御語に、

大惠禪師ある時尻に腫物出ぬれば。醫師是を見て大事の物なりといふ。大惠の曰く大事のものならば死ぬべきや否や。醫の曰くほとんどあやうかるべし。大惠の曰く若し死ぬべくんば彌坐禪すべしと云て、猶も強て坐しければ、其腫物うみつぶれて別の事なかりき。古人の心かくの如し。病を受けては彌坐禪せしなり。今の人病なうして坐禪ゆるくすべからず。病は心に隨て轉するかと覺ゆ。世間にしやくりする人に虚言して、わびつべきとを、云つげぬれば、それをわびしつべきとに

思ひ、心に入て陳ぜんとするほどに、忘れて其しやくり止りぬ。吾もそのかみ入宋の時、船中にて痢病せしに、悪風出来て、船中さはぎける時、病忘れて止りぬ。是を以て思ふに學道勤勞して他事を忘るれば病も起るまじきかと覺ゆるなり

と示されてある、洵に難有き御語である。清坐して百憂を忘るれば百病忽ちに治癒し去る。豈草根木皮の及ぶ所ならんや。

始皇封松

此篇の大旨は好事も無きには若すの一語に盡きてゐる。老子に禍兮福之所倚、福兮禍之所伏

とある如く、世間の事は晝は夜と爲り、寒は暑と爲り、反覆相因りて常ならざるは自然の數である。故に毀あれば譽あり、利あれば害あり、非あれば是あり、好あれば悪がある。故に吾人は此利害好悪、毀譽是非の外に遊ばねば神氣を全うするとはできぬ。

秦始皇常泰山に御幸の時暴に大雨降來れば、一木の松の陰に立よりて、雨を防ぎ、其後此松を封じて五太夫の位を授く。

これは史記の始皇本紀に、始皇上泰山立石封祠祀。下風雨暴至、休於樹下。因封其樹爲五太夫とあり書言故事には謂松曰太夫とある。此事に因て論を起すの序としたのぢや。

これによつて諸の樹木ども其慶をのべんとて伴ひ行ば彼松は更に悦びの色

なく赤澁かへつて居たり。

這は諸の樹木が禍福相倚るとを知らずして松の出世を賀せんとしたので世の凡人等の常情に譬へたのである。人生の百事は如何なる幸慶にも禍害は伴ふてゐ、如何なる災難にも幸福は随つて來る。例せば婚嫁は世人の慶事とする所なるも、一家破滅の大凶變は此時に胚胎する。婦人の妊娠も世人の吉事とする所なるも、婦人の一生の大危機は此時に湧き出る。一國の太子たる人が皇位に即くとは何人も其萬歳を賀する所なるも、暗殺てふ戰慄すべき悲劇の幕は此時に開きぬ。士人にして高位大官に拜せらるゝは何人も雀躍して欣ぶ所なるも、重大なる責任の下に焦思喪心するの否運は此刹那に始まるのである。畢竟人生は一大圈であるから。上るは下るので。下るは上るのである。故に松は太夫に封ぜられて少しも悦ぶ色がない。之を史實に徴すれば昔し那須與市宗高が源氏の大軍中より撰び出され、平家の軍船に立てたる扇を射んと弓箭をとつて馬を乗り出した時は天下の晴れの場所とて勇ましきの限りなれど、若し射損じ

たれば馬の上で割腹すべき悲運は此時に定つてゐたのである。中にも桐の木進よりて云、汝何とて憂の色ありや。始皇帝は唐土四百餘州の主なり、萬乗の君に太夫の位を授らるゝは、汝が萬代までの大慶ならずや。古へより帝王あまたなれども無情の草木に官位を授け給ひし事なし。

桐は松の立身出世に垂涎三尺の様子である。世人は官爵や資財を得さへすればそれで立身と思ひ、權勢家の一顧を得るを以て無上の光榮と心得てゐる、何たる陋見ぞや。吾人の所謂立身とは天賦の性徳を全うして天に對して愧ぢず、地に對して慚ぢざるのぢや。吾人の所謂出世とは一言を出せば造化の奧秘を闡明して萬世の法となり、一行を施せば人生の眞髓に中つて萬民皆其澤を被るとぢや。

萬乗の君とは兵車萬乗を出す天子のとぢや。書言故事に、古之天子居大國爲萬乘之國とある。

我は桐の木なれども官もなく、位もなく、やうく出世といふは琴になつて貴人高位の手弄になるまで也。尤も唐土の神農氏の琴を作り給ひしも、

我材を用ひ給ひ、周の成王の叔虞を晉に封じ給ひしは桐の葉の盟約により、張華が石鼓を識は桐の木の徳なり。蔡邕に見出されて焦尾琴の名物となる。これら我身の徳なりといへども未だ汝が如く位を得ず。汝賤き身として位を授られながら憂ふるは心に不足なりや否や。

桐の木は頻りに手前味噌を列べて己が身に爵位なきを啣ち、更に松の賤木にして高位を得たるを羨んでゐる。世の不平家と稱する人々は皆此桐の如くで、他人の立身出世は皆僥倖の如く思ひ、己れの不遇は社會の罪の如く断定して人を咎め自ら恨んでゐる、これほど憐むべき者はない。かゝる徒輩は如何に其欲望を満足しても不平不満の情は決して止む時はない。カアライルは嘗て、

人は上帝の無限の宇宙を自分一人にと要求する……宇宙の半分を彼に與へ見よ。彼は直に他の半分の所持者と争ひを起し、自分ほど世に虐待さるゝ者はないと叫ぶ
と罵倒したが眞に然りぢや。

神農氏が琴を作るとは和漢三才圖會に黄帝始作琴、或神農、或伏羲、或帝舜等之異説有之とある。神農が琴を作つたとは風俗通の説ぢや。圓機活法には、伏羲作琴以修身、理性、反其真也とある。成王のとは晉の世家に、成王剪桐葉爲圭、與唐叔曰封汝唐。周公請擇曰。王曰吾與之戲耳。公曰天子無戲言。遂封之とある。張華がとは異苑に、晉武時、吳郡臨平岸崩、出一石鼓。打之無聲。以問張華、華曰可取蜀中桐材、削作魚形叩之則鳴矣。於是如言。聲聞數十里とある。焦尾琴のとは蔡邑の傳に、蔡邑字は伯喈、王莽之を臣とせんとす。逸れて山中に匿る、難を吳中に避くる時。行く／＼巖下に桐烈くるを聞く、曰く良材なりと。請ふて以て琴を爲る。其尾焦く、遂に焦尾と名くとある。松が云、不足なるに非ず、我は千年のよはひを保ちて三冬にも其葉を變ず、四時を貫いて壽命の永きとに譬られ、松柏の凋に後るを知ると君子の德行に孔子は譬給ひ、菊と友として陶淵明が三徑の一にあづかる、

これは亦松の手前味噌ぢや。猫も杓子も手前味噌をいふ、愧つべきとぢや。松柏の凋むに後るとは、論語子罕篇に子曰、歲寒然後知松栢之後凋也とある。陶淵明の三徑とは陶潛が歸去來辭に、三逕就荒松菊猶存とある。三徑の事は三輔決録に、蔣詡字元郷、舍中開三徑、唯羊仲求仲、從之遊。皆逃名不出とある、即ち三徑は隱者が其庭園に三筋の徑路を開いたのぢや。三冬とは冬の三月のとぢや。其外故人松を稱する事多し。日本にても阿古屋の松は出羽の國に名を得、武陵の松は陸奥に名を止む。稻葉山の松は行平歸洛の離別をうたはれ、會根の松は菅相公の遺木として其名四海に轟けり。高妙の名今に朽ず。其外名木を得て詩人に賦せられ、歌人に詠ぜらるゝ事、其數かぎりなし。阿古屋の松は羽前國南村山郡にあつたのぢや。千歳山の頂上にあこやといふ地名があつて此處が松の所在地であつた。阿古屋は右大臣豊成の息

女といふ。萬松寺の後の山際に其墓がある。夫木集に、

みちのくのあこやの松に木かくれて

いづべき月の出やらぬかな

武隈の松は和漢三才圖會に、名二木松、在相馬街道追分。昔藤原元善任國時館前所植松也。其後孝義任國時、剪之用爲橋。如今唯杉村中有寺耳と記してあり、橘季通の歌に、

武隈の松は二木を都人

いかゝとはは見木とこたえん

稻葉山の松は山は尾州清洲の西ある、長橋より五里計と和漢三才圖會にある。在原行平が離別の歌に

たち別れいなばの山の峯に生る

松としきかば今かへりこん

とある。

會根の松とは同書に、播州印南部會根松、大周、一丈八尺、高一丈、櫛の

高一丈三尺、枝幹莠出、從良向坤長十一丈、從乾延巽長七丈許。每枝以木支之數百五十八本也。相傳、菅神左遷時、於是自手所植松也と記してある。高砂の松はいふ迄もない。

たれをかも知る人にせん高砂の

松もむかしのな友ならくに

と歌はれてある。

しかるに始皇帝我陰に立よりて雨を防の恩賜として、太夫の封ありといへ共、我爲には大きな不仕合なり。其ゆへは禹湯文武周公孔子などの聖人に位を授らば我身萬代の規模面目なるべけれ共、彼始皇帝は聖人の禮樂を破り、儒者を埋殺し、聖人の遺書を焚ほるぼし、箕歛の法を立て、民を苦め、惡逆無道の帝王なり。かやうの惡人に封せられて我何ぞ慶とせんや、一生の瑕瑾これより過たるはなし。

夏の禹王、殷の湯王、周の文王武王周公、之と並んで孔子は聖人と稱せられる人々ぢや、此等の人より位階を授からば松も名譽ぢやが、暴秦の

主たる始皇より位を受けたのは二代の瓊璫所謂松の操を破つたのちや。大丈夫たるもの苟も道に志す者にして暴君に仕へ、其非道を佐けて己れも亦其浮雲の富を享くるが如きは死して餘辱あるを免れぬ。また知明かに才富ひと雖も猥りに亂世に出る時は必ず其命を全うするとはできぬ。昔し周の衰弘は天地の氣を知り、日月の行を計り風雨の變を極め、律曆の數を明かにする程の才士なりしも遂に車裂されて死し、洛陽の蘇秦は辯舌才機、七縱八橫、匹夫より起つて趙國の相と爲る程の人物なりしも、これ亦車裂されて非命の死を遂げた。故に鳥獸でさへ心あるものは木を搥んで棲み、穴を深くして猥りには出ぬ、況や士人をや。始皇が古聖人の法を破つたとは李斯の新法を用ひたので、**焚燒自古所傳、詩書百家語、如誦詩書者殺之。**坑儒者四百六十餘人とある。箕斂の法とは淮南子に、**秦之時高爲臺榭、大爲園囿、遠爲馳道、鑄金人。**乃至、**頭會箕賦、輸於少府。**注に頭會は民口の數に隨て人ごとに其税を責む、箕賦は箕に似て然も民財を歛て多く取るの意なりとある。

今不仁不義なるもの、黄金數百兩を講んより、賢徳ある人の錢三文には如す。不仁不義の者に稱美せらるゝは反て我身を穢なり。

唐詩に野客は雲を心とし。高僧は月を性とすとある、此雲心月性を失はぬが士道といふものぢや。雲心月性を失はぬ工夫は平生の行狀修養に待つ外はない。室鳩巢の訓に

- 一、毎朝案に對して先づ衣帶を整へ、乃ち一坐了つて事故あるにあらざれば。妄動すべからず。
- 一、案に對するの間、惰念將に生ぜんとなれば正念を呼び起して、痛く之を懲すべし、暫時も忽にすべからず。
- 一、飲食は須く飢渴に充つべし、節を過すべからず、及び時ならずして食飲すべからず。
- 一、色欲の念一たび萌せば之を遏絶すべし、時あつて之を放まゝにすべからず。

一雜念は善惡を問はず、最も讀書を害す、戰々兢々豫め之を防ぐべし

とあり、又松平樂翁は

寧靜は是れ心を養ふの第一法。

謹謙は是れ身を保つ第一法。

知足は是れ樂を享るの第一法。

寡慾は是れ壽を延るの第一法。

というてゐる。能く／＼心を戒めて不義に陥らぬやう努めねばならぬ。

去ながら褒美せらる事あるゆへに訕毀るゝ事あり。好事もなきに如す。我

は褒らるゝもいや、訕らるゝもいやなり。但褒と訕との外に居るべしとい

へば、諸木尤と點頭て颯々として歸り去。

此一段が老莊の真意をや、好い事の中には必ず悪いとも含まれてあるか

ら、一方に褒らるゝ時は他方には訕らるゝ。一方に登るとがあれば他方

には降るとがある。一方に増すとがあれば他方には減るとがある。かゝ

れば災難は世人の皆厭ふ所なるが、災難にも害のみではない。失火にも

多年の毒菌を燒盡す利益があり、疫病にも過多なる人口を減ずる功があ

り、盜難にも用愼を堅固ならしむる効があり、殺人にも警戒を怠らしめざる利があり、病氣にも衛生に注意せしむる効驗があり、死亡にも浮世の苦を脱せしむる功德がある。世人の最も厭ふ所は死亡であるが、死に優る概きは澤山ある。

去年の秋の煩ひに一そ死んでしまつたら

との歎息は何人にも起る。されば淮南子にも謂ふが如く、

失火而遇雨、失火則不幸、遇雨則幸也。故禍中有福也。罌棺者欲民之

疾病也。畜粟者欲歲之荒饑也。

一方に好いと必ず他方に悪いとがある。好事も無きには如すとはい

ぢや。淮南子に此意をのべて、

人有嫁其子而教之曰爾行矣愼無爲善。曰不爲善將爲不善邪。應之曰善

且由非爲、況不善。

とあるが面白い寓言である。要するに一切の禍福吉凶、毀譽榮辱を以て心に喜怒哀樂の變を起さず、但義を守り、道を行ふのみに志す外はない。

好事も無きには如ずとは禪林類聚に、趙州諗禪師、一日在佛殿上、見文、遠禮拜佛、師以拄杖打一下。遠曰禮佛也是好事。師云好事不如無、云々とある。

蟻 蚶 自得

此篇は莊子人間世の大意を抒べるのちや、人間世の意は知は争ひの本と爲り、名は軋るの媒となる、故に名聲は妖孽と爲り、勢利は禍亂を來す。鶯は其聲美なるが爲に人に捕はれて籠中に閉居し、山は良材あるが爲に斧斤の害を蒙り、膏は燃るが爲に自ら煎られ、柿は其實の食ふべきが爲に人畜の傷損を受け、漆は其液の用ひらるべきが爲に割裂の難に遇ふ。之に反して無用の樹は天を磨するの高さに達するも之を伐らんとするものなければ其天年を完うし、無要の禽獸は人の之を顧るものなければ悠々として山野に自適する事ができる。天下の人有用の用を知つて無用の用を知らぬ。是を以て世に處するの道は智を以て愚を治めず、正を以て邪を攻めず、功を成して名を取らず、政を爲して位に居らず、物に應ずるに虚を以てし人を遇するに和を以てし、和光同塵するが佳いのである。想ふに人間世は實に事功を立てんと欲する者の深く玩味すべき一大教訓

である。兎角事功を立んとする者は己れ自ら其功に居らんとする、是を以て其功を妬む輩は競ふて此人を陥んとして百方之を妨害する。故に其功を成すことができぬ。されば眞に功を立んとならば他人の黒幕に隠れ、椽の下の力持に甘んじなければならぬ。功を立つるを目的として名を揚ぐるを目的としてはならぬ。大厦潤屋も地下數丈の下に埋められたる石の爲に立ち、亭松老杉も地下數仞の下に蟠れる根に因て立つことを思はねば大功は樹てられぬ。また社會を改良し、人心を誘啓するが如きも其社會の缺點を擧げて之を排撃するのみでは徒らに反動を起さしむるのみで少しも役にたゝぬ。若し社會に同情して其缺點を責めずして、却て其美點を助長すれば弊習は自ら止む。人を誘啓するも之と同じで、其人の過失を責め、其愚昧を現はすは徒らに其反抗心を挑發するの害がある。故に先づ其人の伴侶と爲つて徐ろに其天賦の良能を發揮せしむれば必ず教化の効を奏する。是れ佛家に和光同塵の方便ある所以である。果して然れば國を治めて治めたるの跡なく、人を教へて教へたるの蹤なく、功

を奏して奏したるの影さへ無いのが第一義である。禪家に所謂沒蹤跡、

斷消息の妙機はこゝにある。秋の虫ども草村により集り、銜々の聲を自慢に鳴居たり。申にも鈴虫蟬蟀に謂て云、四時の轉變、氣候の代謝、交天地の間に行はれて其時節いづれにありかなるはなけれども、別して秋の氣にむかへば、冷風萬物に扇で、其景物多き中に詩人歌人幽閑の情を展るものは虫のなく音を專にせり。

此一段は天地萬物の風雅なる有様を叙べたのちや。吾人は造化の妙工を以て風雅と見るのみでは充分でない。閑雅の中に教訓あり、優艶の中に恩徳のあるに心するを要す。古人が窺ある木の浮ぶを見て船を作り、飛蓬の地に轉ずるを見て車を造り、鳥の迹を見て文字を爲つたのは造化の教訓を實地に應用したのちや。人間の手が五指に分れて活用するを見ては分業の貴きを知り、また五指の交弾くより一拳の強きを見ては共同の利益を悟る。道德の夫法は自然現象の中に充ちくゝてある。さればニヤ

天地開闢の始め、人の便益を計りて諸神は人を分ちて人々と爲し給ひしは恰も手をば猶更に其目的に適はしめんとて五本の指に分ちしが如しとの寓言は知らぬ昔より意外の知識を含有し來れる寓言の一なり。といひ、又虫すら猶ほ己れが決して其面を見得ざる子の爲に其死前に食物を貯蓄するにあらずやといひ、また、

道徳的大法は自然の中心點にあつて恰く周圍に光明を放射するなり。そは一々の物質、一々の關係、一々の過程の精髓なり。我等がたづさはる萬物は皆我等に說法するなり。

我等は禽獸の無音劇を見て幾許の勤勉、幾許の天意、幾許の愛情を捉へたりしか。變り行く健康の諸現象は、克己自制を教ふる何たる深刻の説教師ぞや

というてゐる。蠶すら桑の葉を變じて絹とする、況や人として貴重なる

米を變じて糞とするのみでは天に對して申譯がない。人たるものはゆめ

天地の恩恵と其教訓とを忘れてはならぬ。

それゆへ秋の氣にいたれば我々が益正月の心地にて聲をかぎりに吟じ鳴て、草村に樂むなり。不便や汝は寇馬、聒々兒に形は似たれども一聲も鳴こと能はず。たゞ草原を飛まはり、露をなめて命をつなぐのみ也。汝何をか樂みとするぞや。

これは鈴虫が鳴くに誇つて蟬の鳴かざるを笑ふにて、智者が其智の己れに災ひするを知らずして大智の愚なるが如きを笑ふの寓言ぢや。世の美人が更に美服を着けて己れに淫せよと人を誘ひ、麝香猫が芬香を放つて己れを殺せと人を誘ひ、富豪が金玉を飾つて己れを盗めと人を誘ひ、學者が博識を街うて己れを妬めと人を誘ふが如きは皆此類である。故に大智は愚の如く、大巧は拙の如くする。

盆といふは孟蘭盆の略語ぢや。翻譯名義集に、孟蘭盆、孟蘭西域語轉、此翻倒懸。盆是此方貯食器。三藏云、盆羅百味、式貢三尊、仰大衆之恩

光、救倒懸之窘苦。義當救倒懸器應法。孟蘭言訛、正云鳥藍婆琴、此云

救倒懸とある。蟬、長き頭を打つて云、汝は聲をかぎり、吟をもつて樂とす、我は鳴ざるを樂みとす。金鏡兒笑つて云、虫は秋に吟をもつて人の賞翫にも預り、詩歌吟詠の種とこそなれ。汝が吟ざるを樂みとする其意いかん。

ラスキンは

それ水夫の船長たらんと欲するは己れ能く船を操縦するを知るが爲に
あらず、船長船長といはれんが爲のみ。君主の其土を廣め民を増さん
と欲するは己れ能く國家を治むるを知るが爲にあらず、陛下陛下と呼
ばれんが爲のみ

こゝろ、かゝる徒輩は恰も鈴虫の人の賞翫を得んとて吟くが如くぢや。
蟬が云、されば汝らは聲うつくしく吟ゆへに人の愛するは勿論なれども、
其愛するの餘りには草村を捜し、汝らを探ね求めて、竹籠にやし入、軒端
にぶらつかして汝らが聲よく吟をもてあそぶ也。汝曠々たる草村に居て、

自由自在に飛あるきて吟樂ひと、微小なる籠に入れられて居るとはいづれ
ぢや。草に在て吟樂ひは悦び樂む也。籠に入れられて鳴は哀み歎にあらず
や。其樂吟と悲鳴と同じく人の耳を悦ばしむるの樂みとなる、これ汝が苦
は人の樂になるに非ずや。終には籠の中の苦痛に堪ずして歎死に死して其
死然を得ず。ひとへに囹圄に下され、腐刑に死するものごとし。これに
ても汝樂みや否や。

これは蟬が有用の却て無用なるを辨ずるのぢや。今二三の實例に見ん
か、有用なる金錢を有する者は却て金錢の爲に命を失ひ、有用なる位置
を有するものは反て位置の爲に束縛せられ、有用なる才藝を有する者は
反つて才藝の爲に身を誤る。故に百技を身に備へんよりは一道を守るに
は如かぬ。見よ屠者は肉を食ふ能はずして藜藿を羹にし、車を作るの人
は車に乗る能はずして歩行し、陶工は陶器を用ふる能はずして缺盆を用
ひ、工匠は家を作れども大家に住せずして常に蝸廬に起臥しつゝある。
腐刑とは宮刑ぢや、腐臭故に腐刑といふ。又一説に丈夫の勢を割き復子

を生む能はざるは腐木の實を生せざるが如しとある。
我は生得吟ざるゆへ、人も賞翫せず、それゆへに籠におし入らるゝ苦痛もなし、氣随氣儘に草村を我物にして居る也。命數盡て死すれども草村に死し、生死ともに其所を得て外に求むる事なし、これ我鳴ざるをもつて一生を樂ひ所以なり。

これは蟻蚶が無用の用を論ずるので、道家の主義とする所はこゝにある。禪家に無功の功といふ説がある。譬へば天子は無爲にして百官に其職を司らしむれども、其治世の功は悉く天子に歸するが如くで、例せば將軍の干戈の功も、天子の御稜威で戦勝の効を收めたといはれ、内治の整理も天子の仁徳で國家が泰平になつたと謠歌せらるゝ、天子は何事をも爲さずして一切を成し、身に寸功なくして天下の功が之に歸する。これが一切事務の極致ぢや。風雅にて謂へば風流ならざる所が轉た風流なのぢや。佛の境界にて謂へば煩惱を斷ぜんとも思はずして煩惱自ら起らぬ、修行せんと力めずして一切の行が修行ならざるはない。善根を積まんと

思はずして一切の行が善根ならざるはない。孔子は七十にして心の欲する所に從て矩を踰えずとある。努めずして行はれ、思はずして中る。これが無用の用といふのぢや。
されば人間の世に住るもさまゝにて、或は蚶のごとく、蟹のごとく、蛇の如く、蛙のごとし。

人も蚶の如くぬらくらする奴もあり、蟹の如く横に理を押す奴もあり。蛇の如くつらくしき奴もあり、蛙の如く酒蛙たる奴もある。蚶は濁り、蟹は横はり、蛇は毒を含み、蛙は噪く、穴を同うすれば相争ひて強ものは弱ものを噉ふ。これ市井小民の面影也。

進化論者の謂ふが如く。人は利己的動物で生存競争強食弱肉の外に何の藝もないとせば人と蛇蝎の別は全くない。

市井とは白虎通の説によれば井田に因て市を爲るから市井といふ。風俗通の説に従へば人が市に至て賣買するに井上に於て洗濯して身を潔からしめて乃ち市に到るから市井といふ。

賢知あるものは鯉の如く、鯨の如く、蛟の如く。鯉はよく神化すれども天に昇る事能はず。鯨は蛟を戯して雷をなし、沫を噴て雨をなせども小池沼などの中に住と能はず、蛟は地に行ば水溢れ、山に行は石を碎の勇猛あれども海に入れば大鳥の餌となる。これ賢知ある者の面影なり。

鯉は大才士の青雲の志あるが如く、鯨は大學者の博識宏量なるが如く、蛟は大將軍の勇猛なるが如くや。

鯉の神化とは鯉が龍と爲るとで、五雜俎に俗説なりとある。後漢書の李膺傳に三秦記を引いて、龍門水險不通、魚鼈之屬、不得上、江海大魚薄集龍門下數千、得登則爲龍也とある。

鯨のとは圓機活法に、鯨大者數千里……鼓浪成雷、噴沫成雨とある。

蛟の大鳥に食はるとは長阿含經に、金翅鳥有卵胎濕化四生、大者縱橫六十由旬、飛下海中、以翅搏水、水則兩披、深二百由旬、取龍食之とある印度の俗説や。

たゞ聖人は龍のごとく神妙不測にて鯢とも鱓じ、蟹とも化し、鯉ともなり、

鯢ともなる。大にしては天にはびこり、小にしては芥子の中にも潜まり藏る、故に先聖の易を演給ふにも龍の徳をもつて大人に配し給ふ。易の道は謙遜を崇め、亢を抑へ、柔かなるを貴び、賢知ありとも其智恵を藏して、みだりに用ひざるにあり。

達人は時あつては鯢の如く汚地に甘んじ、蟹の如く山谷に潜み、時あつては鯉の如く龍門に登り、鯢の如く大波瀾を捲き起し、千變萬化すれども一として其宜きに合はざるはない。故に易に大人を龍に譬へた、易の道は不易の道で天地の常經である。开は謙虚を尚び柔弱を本とする。谷は謙虚を守るが故に天下の水は皆此中に入る。水は柔弱たるが故に上りては雲となり、霞となり、降りては雪となり雨となり、凝ては露となり、流れて河となり、溜つて淵となり、集つて海となる、萬物を潤澤して百物を生じ、魚鼈龍蟹の屬を養ひ、眞珠珊瑚の寶を生ずる。其微なるは把握すると能はず、之を撃てども傷くると能はず、之を焚けども燃す能はず。其力は金石をも貫き山岳をも倒す。微にしては芥子にも入り、大に

しては宇宙をも包むは水である。是を以て老莊の學は虚と柔とを骨目とするのぢや。

龍を大人に配すとは易の乾卦に、飛龍在天利見大人というてある。帝王の即位を飛龍といふ。何れも龍を大人に配したのぢや。

古へより賢知の人の其賢知をみだりに用ゆるによつて身を亡すもの多し。

龍逢は殺され、比干は心を剖れ、務光は河に身を投、屈原は汨羅に沈む。

これら皆我を我とするの我見あるによつてなり。

龍逢とは夏の桀王を諫めて殺された賢人關龍逢ぢや。

比干は殷の紂王を諫めて三日去らず。紂曰く聖人の胸に七竅ありと。其心を剖く。

務光は湯王の時の人、淮南子に、務光不以生害義故自投於淵。注に務光

は湯の時の隠士なり、湯王桀を討て天下を務光に譲る。人務光に謂て曰く湯其君を殺し將に不義の名を子に歸せんとす。務光因て石を抱て深淵に投じて死す。

屈原は楚の懷王に用ひられ三閭大夫と爲るも同列の大夫上官靳向に讒せられ、放たれて汨羅の水に投じて死す。

此等の人々は賢者には相違ないが賢智を以て愚惡の小人に臨んだから、却て彼等の怒毒を挑發して害に遇うたのである。

我國に於ては蒲生氏郷が機智縦横にして遂に豊太閤の毒害に逢うた如きは適例であらうと思ふ。

孔子の六十にして耳順ふとの給ひしは年六十にいたりて我を我とするの我見を盡し給ふ事明か也。おのれに賢知ありとも、おし藏して顯さず、老子の所謂和光同塵これなり。

六十にして耳順とは論語の爲政の篇に六十而耳順とある、我見がないから見聞する所が我意に悖らぬのぢや。石田梅巖は五十にして樂になつたと言うた。即ち何事に接しても意に通じて悖逆の念がない、そこで樂になつたのぢや。

和光同塵は老子に和其光同其塵とあつて、己れの智光を和けて目立ぬや

うにし、塵の如き見ぐるしき仕方を他人と同じくするとぢや。
翡翠は其毛のうつくしきを藏事能はず、魚は其鱗を隠事能はずして身を殺す。賢知ある者は其智恵をもつて己を縛り害を招く。汝等もかくの如し。聲うつくしく吟事を藏ずして籠に入らるゝの苦痛をまぬかれず。我いふ所は莊子が人間世の意味也といひ終つて飛されり。

思ふに大智は玉の如く其光りを葆ひ、小智は玻璃の如くに輝を放つ。小智の言は酒の如く其味甘くて人に害あり、大智の言は水の如く其味淡くして人に利あり。故に眞の光は無光の光でなくてはならぬ、眞の味は無味の味でなくてはならぬ。無味の味に甘んじ、無光の光を放つて、無言の言を口にし、無功の功を奏すれば暴君も此人を殺すに由なく、干戈も此人を威すに力なく、水火も此人を傷くるとはできぬ。

養目傳授

此篇は思慮を精一にするの工夫を説いたもので莊子列子等に蟬を捕ふる譬喩を以て示してあり。思慮を精一にするとは餘念を離れぬとぞ、忠臣は君あるを知つて我身あるを知らず、孝子は親あるを知つて己れあるを知らず、君の恨みは臣の恨み、君の喜びは臣の喜びと感ずる故君臣一體で我は臣彼は君との三念がない。是に於て乎純忠の士となる。また孝子は親の病を自己の病の如く感じ、親の哀みを己れの哀みと深く感じて親子一體となる、我は子、彼は親との三念がない、是に於て乎、至孝の人となる。忠孝の二道のみではない、諸藝諸道に至る迄皆其通りで、政宗が刀劍を鍛へる時は一念もわき目をよらず、精神を一刀にこめてうち、利休が茶をたてる時は刹那も餘念なく進退して一寸の隙もなかつた。若し刀劍をうつに一念でも餘念があれば油断が入る、油断が入れば絶好の刀はできぬ。書畫なども其如くで書畫を爲るうちに餘念が入れば必ず其

所に缺點が生ずる。果して然れば精一は百能百藝の奥義である。陽明學には之を精一の工夫といふが禪家には之を打成一片の工夫、又は萬里一條鐵などいふ。开は正念相續して純精絶點、至誠の心氣が滿腔に溢る、ばかりにするとかや。此至誠清淨の心は天にあつて命と爲り、物にあつて理となり、人にあつて性となり、親に對して孝と爲り、君に對して忠と爲り、夫に對して貞となり、子に對して愛となり、朋友に對して信となり、國に對して愛國となり、世界に對して人道となり、天地に對して感謝となり、神佛に對して敬虔となる。故に吾人が一切の道德一切の施爲の大本たる者は精一精淨なる一心の本性である。此精一の工夫を説くが本籍の大意である。

樂軒快翁弓に神妙を得たり。一得齋これを師として射法を學ぶ。既にして墓目の法を傳授せり。

樂軒快翁も一得齋も假托の人物ぢや。墓目の法とは墓目は鏃の一種で、木製にして鏃矢の鏃に似て長く、凡そ四寸ばかり、圍み五寸、五孔又は

六孔あり、射る物に傷けぬ爲に用ふるのぢや。空氣に觸れて高く響けば妖魔を伏すといふてある。

適其隣の者に狐附てさま／＼罵り狂へり。妻子の歎大かたならず。一得齋見るに忍びず。其妻子に謂て云、我墓目の妙術をもつてせば、稻荷の鳥居を千遍こえたる古狐也とも早速に落すべしと日を約す。

狐憑は一種の精神病ぢや、愚俗の輩はチブス熱の譫語さへ狐附といふて騒ぐ、大いに戒めねばならぬ。地方によつては犬の憑くとかあり、狼のつくともある、皆精神病に外ならぬ。或精神病患者は空中に天使を見ると思ひ、他の患者は腹中にて肝臓が言語を發するを聞くなど皆妄想に憑れてゐるのぢや。また二重人格、多數人格と稱して人格が忽ち一變して従前の人物と全く異なる人と爲り、従來の事を悉く忘却して新人格となり、更に又前の人格に復歸する患者がある。此等は皆愚俗の輩に狐憑と信ぜらるゝのである。一得齋も慢心と稱する狐に憑れたのぢや。

其の日にいたれば數多の人集り見る。一得齋來つて墓目の術を爲せども、

狐は更に落ず、反て嘗り笑ふて言、汝が墓目の法少しも恐しからず。實の墓目を稽古して来るべし。外見名聞を本として、脱却の墓目にて、我を退んとは殊の外顔の皮の厚耻しらすなり。急々に立されと、悪口罵詈する事甚し。

一得齋慢心と名聞の雑念に馳られ、見物の人は心を配り、少しも精一の念がない。こは恰も案山子が弓箭を持って立た如くで、小雀も之を怖れぬ。況や古狐をや。餘念雑念は一切藝術の大敵である。されば古への劍士が劍法を教ふるも十二時中油断なきを旨とした。昔し或劍法の達人があつて弟子に教へて十二時中油断を禁じて置いて、弟子が水を汲まんと井戸に臨む時に後より之を打ち、飯を食はんと兩手に食器を持つ時に之を打ち、絶えず之を打ち懲して油断を戒めた。されば弟子も大いに警戒してゐると、或日先生が給仕をせよと命ぜらるゝに依て、左手に茶碗をとり、右手に杓子を取て飯を盛んとする時、先生は電光石火、弟子を打たんとしたが、此時弟子は三尺計飛び去つて打たれなかつた。先生大いに

喜びあつばれちやぞとに讃められると弟子も欣び、「難有御禮申上ると頭を下げた刹那、先生の一撃は美事弟子の頭上に的中した。されば如何なる名人でも餘念があれば隙が生ずる。一得齋は隙だらけであるから、狐に乗せられたのぢや。

一得齋は墓目の功もなきのみならず、かへつて稠人にて耻を與へられ、今は是までなり。此以後人に後指をさゝれんよりは、さやつを討殺て我も死なんと思ひ極め、勃然として刀を抜て飛かれば憑附人大きに恐れ、色を失ひ、表の方へ一さんに逃行しが、忽ち狐は落て本性に成ける。

これは一得齋の心が精一になつた爲め、狐も怖れて落ちたのぢや。或人が猿を家に飼うて戯れに弓を以て之を射るに、一々箭を捉へて遊んでゐたが、他の弓術師が同じく弓に矢をつがへて立向ふと未だ發せざるに猿は樹を廻つて叫び泣いた。これ弓術師が猿を射んとの精一の心あるを知るからである。これと同じく兩親の叱咤するは如何に高聲にても子供の心にこたへぬ。之に反して他人の小言は一言でも身にしみる。故に眞の

眞は未だ發せずして人之を威れ、眞の喜は未だ謂はずして人之に和らぐのである。

一得齋師の許へ行て此由を物語して墓目の神妙なき事を演る。快翁一得齋に曉して云、我汝に傳ふる所の墓目の法、神妙なきに非ず。その神妙なる所は汝が精一にして一毫の妄念妄想なき虚々漠々の一心地より生じ来る也。一切の神妙は虚々漠々の無我無念より生じ来るので、禪家には之を本來無一物といふ。其無一物とは一毫の私欲妄念の無い所ぢや。妄念が無ければ之に對する眞念もない、一に清淨心のみである。淨家の念佛も其通で南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と申すうちに憤怒の念や、愚癡の念や、利欲の念や、姪欲の念を却けて感謝報恩の正念を相續し精一に信仰して行くのぢや。精一の心が缺けると何事も失敗する。昔し吉岡建法が劍術の名人でありながら板倉家の臣太田忠兵衛に斬られたのは一念の油断からであつた。吉岡が京都なる宮中に御遊宴があつて市民が見物を許された時、宮庭に入て亂暴を働いた。此時太田忠兵衛が吉岡を討とらんと進ん

で一合二合火花を散した時吉岡は如何にしけん物に墮いて倒れた。太田は此時大音に吉岡建法起上つて勝負に及べ、倒れたる者を斫るは死人を斫るも同然ぢや。武夫は死人は斫らぬぞ、起上れと呼んだので、吉岡は立上らんとする一刹那、太田は飛込來て敵を一刀兩斷してしまつた。吉岡ほどの劍客も起上るまでは大丈夫と一念油断を生じたのが一生の不覺ぢや。

汝既に墓目を傳授せりと自慢自負の念慮あるをもつて心を精一にせず。墓目の傳を頼にして其法をのみ知て其法を行ふ所以をしらず。神妙なき等の事也。全く墓目の咎には非ず。狐にしたゝか悪口せられ、稠人にて大きに耻を蒙りたる時、彼を書し我も死なん、たゞ一條に打ひかふ所に於て、一毫の雜念なく、心精一になりたる所が、すなはち傳受なり。墓目の法のみにあらず、一切の事に廣く通じて其妙あるは心の精一なるにあり。

杉浦重剛氏の叔父で劍法の指南をした人が杉浦氏に語られた語に劍法の秘傳は思無邪の三字にあるのとであつた。此思無邪の秘傳は素人にも

敵へらるる。即ち敵が上段に構へれば己れは青眼に構へ、敵が青眼に構へれば己れは上段に構へて、敵の己れを斬るには少しも關せず、敵を相打に斬るので、敵が己れの皮を斬れば、己れは敵の肉を斬り、敵が我の肉を斬れば我は敵の骨を斬らんと一心に身を捨て敵と戦ふのが思無邪であるといはれた。身を捨てこそ浮ぶ瀬もあれで素人が大敵と戦つて勝たんと思ふは大なる妄心ぢや、故に此邪念を起さず死を極めて一心になるが思無邪で、即ち精一の工夫である。

昔唐土楚國に熊渠子といふものあり。草の中に大石の有しを虎と思ひ、弓を彎てこれを射たり。手ごたへして金を没し羽を飲。立より見れば虎にはあらで、石なり。熊渠子も驚きながら、扱は我弓勢の強ゆへと自慢心にて、かさねて射て見るに金劈矢柄くだけて立す。これ初は虎とのみ思ひつめて餘念なく精一なるによつて、硬石をも貫けり、既に石と識ては思惟に入、眇も擬議するの念起るゆへ、精一の心たゆむをもつて、石に入す。佛法に剩法と名付、法執として眞實の道を修するさまたげとす。

熊渠子とは韓子外傳にある。漢の李廣の傳にも同一の記事を載す。剩法とは無用のものぢや。

法執とは法に執著して心に忘るゝ能はざる心病ぢや。

飛衛が紀昌に射法をまじゆる時、小なる物を見る事大のごとく、微なる物を見る事著るゝが如くなる時、我に告よ、射法を傳んといへり。紀昌其命を請て蝨を木の枝に掛てこれを見る事三月の後、やうやく大きに見へたり。三年の後には車の輪の如くに見ゆ。其時燕角の池、朔蓬の幹を授て射法を傳授せり。これ眼を精一ならしむるの教なり。

紀昌飛衛は周の人の名で、列子に此記事がある。紀昌學射飛衛乃至昌以鼈懸蝨於牖、南面而望之、旬日之間寢大也。三年之後、如車輪焉。以視餘物、皆如丘山也。以燕角之弧、朔蓬之箠、射之貫蝨之心而懸不絕。以告飛衛。飛衛高蹈、拊膺曰汝得之矣。

燕角之弧とは列女傳に以燕牛之角纏弓、以荆麋之筋糊弓とある。朔蓬之箠とは朔州の蓬を以て作りたる箠か、列子の注に勁矢なりとある。

竹中半兵衛重治、軍物語の時、子の左京未だ幼なりしが、座を立て何方へか行き、暫くして歸り来る。重治軍物語の半に罷立ことやあると叱りければ、左京、小便に立ち候といふ。重治怒て小便に立度ば何とて座敷にて小便を致さぬぞ。竹中が子が武道の咄に聞入り、座敷を汚したりと言はれなば、我家の面目なりといはれた。これ亦武道に精一なれとの教訓である。

これらの事をもつて墓目の神妙は汝が精一の心頭より出る事をしるべし。これ禪家に所謂教外別傳の旨と相同じ、しかれば其神妙不測の所は我も汝に傳ふる事能はず。よくく學んで自得すべし。其神妙何ぞ得がたき事か。是あらん。それこれと思へ。

精一の工夫は言説を以て明かにするのはできぬ、畢竟學者の自得に待つ外はない。

細川幽齋が家に千鳥と號する香爐あり、天下に類なき器なり。文祿の頃、八月十五夜に、蒲生氏郷、今宵は良夜なるを、徒らにせんやと、千利休

を同伴して、幽齋が邸に來りければ、幽齋喜びに堪へずして、種々饗應しけり、折柄隈なく照渡り、一入興あり。氏郷兼ねて香爐のこと望み思ひしかば、今宵ぞ能き折なりとて、其事申出で所望ありしに、幽齋常に替りし氣色にて、今宵は便りなければ、又折もこそあるべけれと辭し申し、を。氏郷強て御秘藏の重器なれども、今宵の御饗應これに過ぎずと望みしゆゑ、幽齋否み難く、灰を除て香爐を出し差出したるしが、最と不興氣にぞ見えける。氏郷手に取て熟々一覽あり。誠に名に負ふ名器なりと賞美しけるに、幽齋にはしかくの挨拶もなく納めける。氏郷不審し、其後紹巴に此事を語りて、幽齋老には、生質和順にて、仁厚なるとは勿論なり、然るに其夜の會釋は何とも心得難しと言ひければ、紹巴沈思の體なりしが、手を拍て申すは、幽齋は誠に歌人と覺え候。偕々斯く優には座しける。是は順徳帝の御製に『清見瀉、雲もなきたる、浪の上に、月の限なる、村千鳥かな』といへる秀歌あれば、今宵は便りなしと辭せられけるにや、と感に及びしかば氏郷は大に慚ぢ、此事主に問はず

ば、彼老人の深き心をも知らず過ぎなんかし。能くも申出したり。返す
く、慚かしけれとて、夫より猶々幽齋に親み學ばれたりと記してある。

幽齋はかく風雅にも精一であつたから名人となつたのぢや。
幽齋、似我與左衛門に太鼓を學べり。似我曰く、殘る所なき御拍子ひょうしなり、
然れども撥びか未だ切れ申さず、是某に劣り給ふ所なりと。幽齋種々工夫
しけれども、合點行かず、或時弓を射しに、絃つな切れければ、弓を地に投
げ候て、今より太鼓の撥の切るゝと云ふとを合點したり、似我を呼びに
遣はせとて、太鼓を取出し打居し所に、似我來り、之を聞き倍もく太

鼓の撥が始めて切れしと言ひく、幽齋の前に來りしとぞ。
かく和歌にあれ、詩賦にあれ、劍法にあれ皆悟入がなくてはならぬ。山
岡鐵舟は由利滴水和尚より兩刃交鋒不可避、四好手猶如火裏蓮てふ二句を
示されて之を工夫し參禪するうちに一日豁然として劍法の極意を悟り一
刀流を見破つて無刀流を起した。これ居士が大悟底の劍道である。禪家
の一念不生の端的は言句を以て曉すとのできるものでない。

教外別傳とは經教の文字に現はれたる以外に心法の傳ふべきものがある
との意ぢや。

伏翼兩端

本篇は人心兩端に惑ふ時は必ず大蹉跌を來すとの意を抒べたのぢや。前篇には精一の工夫を説き本篇では精一が破れて兩端となるの病を指示するが目的ぢや。凡そ世の中の事は一として相對を爲さぬはない。天には地、虚には實、陽には陰、來には去、高には下、遠には近、白に黒、明に暗、長に短、清に濁、重に輕、大に小、細に麤、男に女、吉に凶、福に禍、喜に怒、苦に樂、智に愚、生に死。斯く相對を爲すから人心も此二邊に惑ふて、兩端となり、擬議を生じて一刀兩斷の大決心ができぬ。楠正成と楚俊和尚との問答にもある如く、「兩頭共に截斷して一劍天に倚て寒し」といふ風でなければ大丈夫とは謂はれぬ。然れば此兩頭を截斷する利器は何かといへば精一なる至誠清淨の一心ぢや。此清淨の一念さへあれば窮するにも樂み、通ずるにも樂む、これが窮通を截斷したのぢや。福の時も天を樂み、禍の時も天を樂む、これが禍福の兩頭を截斷し

たのぢや。病氣の日にも命に安んじ、健康の時にも命に安んずる、これが病健の兩頭を截斷したのぢや。喜んでも中庸に當り、怒つても中庸に當る、これが喜怒哀の兩頭を截斷したのぢや。苦痛の時も天を怨みず、快樂の時も人を咎めず、これが苦樂の兩頭を截斷したのぢや。何でも擬議を入れず、驀直に去るがよい。却說本文は蝙蝠が兩端を懐く咄しで別に一々論ずる程のとはない。

羽蟲三百六十種の大將鳳凰龍門の桐の木のもとにて婚禮あり。翼下の鳥ども孔雀、鶴を初とし、鴛鴦、鴛鴦のすへくまで、思ひくの音物を持來つて其慶をのぶる。

羽蟲云云とは大戴禮に羽蟲三百六十而鳳凰爲之長とある。雄が鳳で雌が鳳ぢや。

龍門は河中府龍門縣に龍門山といふがある、禹王が之を鑿て河の水を落した所ぢや。

桐の木とは圓機活法に格物論を引いて、鳳非梧桐不栖、非竹實不食、非

醴泉不飲。凡所栖止衆禽必隨之とある。
鴛は鴛ともいふ。

音物はつかひものぢや。
山雀は胡桃姿、鶉は粟の節、雀は筭、鴈は芦の葉の粽八百を送れり。其中に伏翼も鮐桶を持來つて云、今度鳥王の婚儀を嘉し奉るの驗に世間希なる物を献じ奉る。これ麒麟のこけら鮐なり。むかし魯の哀公十四年大野に狩せられし時、叔孫氏が車士、鉏商と云もの麟を捉得て干物にせしを我家に傳へ持たり。其麟に違のなき事は其時代に孔子の目利して置給ひ、これによつて春秋の書を作り給ふ事はあまねく人の知る所也。

麒麟の事は春秋にある、獲麟というて麒麟が捕へられて殺されるやうでは王道も今は末に爲つたと孔子が歎いて春秋を修め中興の教としたのぢや。また神仙傳に麟の脯は仙人の饌とある。

鳳鳥が云、汝が希代の音物過分なれども麟は毛蟲三百六十種の大將なり、汝じ素より鼠の功經たるものなれば、麟の部下にて獸の中也。鳥の部類に

はあらず、しかれば非類の汝より何も受べきやうなし。殊に麟は聖人の御代に現るゝの仁獸なり、我其肉を食ふに忍びず。忽で持歸るべし。

流石鳳は鳥王だけあつて、蝙蝠よりの賄賂は受けぬ。賄賂と懷爐は懷ろが温つて好いなどと非類の唐人からでも袖の下を受る今の大政治家とは違ふ。

毛蟲云云は大戴禮に毛蟲三百六十而麟爲之長とある。牝が麒で牡が麟ぢや。

仁獸とは廣雅に麟は仁を含み、美を懷き、行步現に中り、折旋矩に中る。遊ぶ時は必ず土を擇ぶ。翔けて而て後に處る。生虫を履まず、生草を折らず。群行せず、旅行せず。陷罪を犯さず、網罟に羅らずとある。

伏翼が云、君のいふ所もつとも也。去ながら某甲そのむかしは鼠にて麒麟の部下なれども、数年の功を経て造化主人より翼を付てもらひ、飛行自在を得たれば、今にては獸の部をはなれて鳥の部なる事明か也。其うへ某が一類鳥に變じたる事は、田鼠化して鴛となる。是其證據なり。

田鼠とをば列子に、燕之爲蛤也。田鼠之爲鴉也。朽瓜之爲魚也とある。塵が蚤と爲り、垢が虱と爲り、蕎麥殻が蟷と爲り、藁が紙と爲り、百姓が官吏となり、大名が乞食となり、娘が婆となると同じ理ぢや。

雀海中に入て蛤となる時は既に鳥の部をはなれて甲蟲三百六十種の中に入て、龜の部下となる時に、君は古への雀の事、揚て蛤も鳥の部とし給ふや。

我もとは鼠たるを以て鳥の部にあらずとの給ふと同じ理也と詞を巧にし、辯舌に任せていひ釋ば、鳳鳥も伏翼が我を詰とはしりながら流石仁鳥なれば強く答ず、伏翼がいふに任せ、宥恕して其贈物を請納たり。

雀が蛤となるとは和漢三才圖會に、雀老而斑者呼爲麻雀、小而黃口者爲黃雀。九月雀入大水爲蛤。乃至、南海有黃雀魚、常以六月化爲黃雀。十月入海爲魚、則所謂雀化蛤者、蓋此類也とあるが、這はやはり羽織は質屋に入て酒となるの類ぢや。

甲蟲云云は大戴禮に甲蟲三百六十而神龜爲之長となる。折しも獸の大將麒麟が方にも婚禮大饗あり、數多の獸郊藪の岡に會合して、

いろくの藝をつくして樂む。猫は三弦をひき、狸は腹鼓、鹿は笛を吹、馬は大鼓の役をつとめ、猿猴は月を取所を藝とし、兎は波を走る所を學び、狐はこんくはいの所作、さまざまなる所へ、伏翼扇箱を持參して云、

郊藪の岡とは圓機活法に、周成康時、麟鳳在于郊藪とある。此度獸王の婚禮を祝し奉るの験に微小の物ながら世に得かたきものなれば

獻じ奉る也。此扇子は當昔黃帝の御代に鳳凰來儀して東園に止まり、或は阿閣に巢をかけて住しが、黃帝登天し給ふ時、此鳳凰も死したり。故あつて其羽某が先祖持傳しを此度扇子に造り獻じ奉る也。

來儀とは書經益稷篇に、簫韶九成、鳳凰來儀とあつて、鳥の來り舞ふて儀客のあるとぢや。

東園云云は韓詩外傳に、黃帝乃服黃衣、戴黃冕、致齋于宮。鳳乃數日而至。黃帝降于東階、西面再拜稽首曰、皇天降祉不敢不承命。鳳乃止帝東園、集帝梧桐、食帝竹實、沒身不去とある。

阿閣のとは帝王世紀に、黃帝時鳳凰巢于阿閣とある。東園は東の苑、阿

聞は聞の名ぢや。

麒麟が云、汝が希世の送り物、祝著なり。去ながら汝は獸の部にあらず。もつとも其古へは鼠なれば、我部下の物なれども、今は其如く翼あれば鳥の部也。非類の物より何も受べき道理なし。伏翼が云、翼ある物を皆鳥の部類とし給はば、飛龍にも羽あり。しかれども鳥類には非ず。鱗虫の部なり。殊に某が翼は全く鳥の羽に類せず、顔貌はとりも直さず其以前の鼠なれば、豈獸の部類ならずやと辯舌に任ていひ掠んとす。

飛龍とは本草綱目に、龍有鱗曰蛟龍有翼曰應龍、有角曰虬龍、無角曰螭龍とある。三才圖會に、泰山山有應龍。應龍有翼龍也。昔蚩尤禦黃帝帝令應龍攻于翼之野とある。飛龍とは應龍のとぢや。

某が翼云云は蝙蝠の翼は全く手の變形で、五指が延長して其間に膜があるだけで、人間の手と構造は少しも違はぬ。

麒麟大に怒て云、汝しらすと思ふか。日外鳳凰が婚禮の時、彼を祝するの音物として我肉のこけら餅と名付て、えしれもなき腐肉を献じ、其うへ、

あ●れが翼あるを楯にして、さまざまといひ廻し、鳳凰に一盃啜らせ、ま●んま●と鳥の部類へ入ながら、今又我もとへ來つて、獸の部類なりといひ掠●ひ。是鳥の部類ともなり、獸の支族ともなつて、鳳凰に追蹤し、我に輕薄●し、其間に於て阿●り諛●ひ、あ●れが身を利せんとなす。所謂摸稜の手をのべ●て、兩端を持するの曲物なり。蘇味道楊光遠が面影をうつすか。汝は誠に●姦●邪●の●倭●人●、阿●黨●の●匹●夫●なり。

摸稜の手とは事類全書に、唐蘇味道爲相。常謂人曰、決事不欲明白、誤●則●有●悔●、摸稜持兩端可也。世號摸稜手とある曖昧手段ぢや。

楊光遠は初め唐の莊宗に仕へ、次に晋の高祖に事へ、後に契丹に通じて●晋●に●背●いた●曲●物●ぢ●や。

近くは吾朝建武の比にありし、赤松圓心、宇都宮公連、足利直義が輩一時●の●豪●雄●といへども、彼に附、此に頼の病ありて金石の忠義全からず。中に●も●直●義●は●兄●尊●氏●に●罪●を●得●て●イ●む●方●の●な●ま●ま●に、遂に髪を削、衣を着して、●南●帝●の●憐●を●阿●諛●の中●に●得●て、又●後●に●敵●と●なる。平治のひかしは三位入道頼

政、義朝の援兵にありながら、義朝義平父子の急戦を救ずして軍兵を班め、收め、其雌雄を見物し、源氏勝ば源氏を輔け、平氏勝ば平氏に附んと兩端を持するをもつて、義平に疑はれ、同士軍をしたり。頼政さしもの大將なれども摸稜の讖を受たり。世にいふ所の内股齋薬これなり。權勢ある人に媚、富貴ある人に諛ひ前にて褒るかとするれば、後に貶る。これ皆佞人の常なり。汝鳳凰が所へは我肉を献じ、我所へは鳳凰が羽扇子を送る。汝が佞邪曲にあらざる事を得んや。誠に聖賢の罪人なり。四靈の首長なる我を化さんとは膽の太き匹夫なりとしたか、に呵れ、不首尾にて立歸り、鳳凰がもとへ行ども鳳凰も伏翼が陰惡を惡んで寄附ねば、せんかたなく橋の下故宅などに偏居て、今に晝は出る事能はず。

四靈とは禮配禮運に、何謂四靈。麟鳳龜龍謂之四靈とある。

彭天顔壽

此篇は莊子德充府の大意を叙する寓言ぢや。德充府の意は内德を貴んで外形を忘るゝの一語に盡きてゐる。「其異なる者より之を視れば肝膽も楚越なり、其同じき者より之を視れば萬物皆一なり」と莊子にある通り、外形の上より見れば天下の物一として齊きはない、併し天賦の性德より見れば有情非情同時成道である。故に心を形骸の外に遊ばしめて、死生を以て一條とし、可不可を以て一貫とし、窮達、貧富、饑渴、寒暑、日夜に目前に相代るも吾人の靈府に入らしめぬのが佳いのぬある。菜根譚に、我貴くして人之を奉ずるは此峨冠大帶を奉ずるなり、我賤うして人之を侮るは此布衣敝履を侮るなり、然ば則ち我を奉ずるに非ず、我胡ぞ喜を爲ん、我を侮るに非ず、我胡ぞ怒を爲んとある如くで、世に所謂貴賤高下は、我内德の貴賤高下ではない、官位人爵の高下である。世に所謂貧富窮達は我内德の貧富ではない、衣食住處の多少である。此等外物の多

寡大小によりて吾内徳を傷くるは愚の至りぢや。錦衣玉食は五尺の腐肉を食ふに足るも、眞の吾を養ふとはできぬ、布衣麤食は五尺の身を饑すに足るも、眞の吾を饑すものではない。然れば吾は錦衣玉食の時も増さず、敝衣粗食の時も減らず、何ぞ之を以て靈臺を煩はすに及ばんや。黄金の中に起臥する乞食もあり、半文錢の貯もなくして王侯の富を有する者もあり、百年の壽を保ちて人生の無常を啣つ老婆もあり、一日の生命を欣んで人生の悠久を樂む哲人もある。古人が
窮釋子口稱貧、實是身貧道不貧、貧則身常披縷褐、道則心藏無價珍とい
うた所以はこゝにある。

彭祖は八百歳にて死し、顔回は三十二才にて死す。其神靈途中にて行逢たり。
天壽の長きもあり短きもある。長きが幸でもなく、短きが不幸でもなく天壽を以て幸不幸を判断するは衣服の長短を以て人の賢愚を判断するが如くぢや。チンメルマンの語に

長く生活せんとの希望は、善く生活せんとの希望より大なるが如し。今人間の希望に由て生命を測る時は、彼は十分に之を遂ぐべき長壽を得たりといふと能はず。人間の功績に因て之を測る時は、亦十分に之を遂ぐべき長壽を得たりといふと能はず。されども其惡業に因て之を測る時は長壽に過ぎたりといふべきなり
とある如く、吾人の希望よりすれば百千歳の壽命を保つとも短命ぢやが、吾人の惡業よりすれば一年の壽命も長きに過る。恐らくは今の代に長壽に過ぎぬ人は一人もなからう。

彭祖は列仙傳に、彭祖諱鏗、帝顓頊玄孫、至殷之末世、年已七百餘歲而不衰とある。
彭が云、汝は孔子の弟子の中に十哲の隨一にゑらまれ、孔門の道統をも継べきものなれども、明春道學に精神を弊し、一生孔子に附まはりて司馬桓魋が圍に胸をいたため、陳蔡の難に師弟の喰物なく、無用の賢人達して養氣の法を知らず不便や天死したり。

孔子の十哲とは孔子に陳蔡に随つた門人の中に優れた十人で顔回字は子淵、閔損字は子若、冉雍字は仲弓、冉耕字は伯牛、宰予字は子我、端木賜字は子貢、冉永字は子有、仲由字は子路、言偃字は子游、卜商字は子夏の十人ぢや。

道統とは傳道の正統といふとで宋儒が禪の嫡々相承の説に摸して唱へ出したとぢや。其例を挙げると、伏羲—神農—黃帝—堯—舜—禹—湯—文武—周公—孔子—曾子—子思—孟子—周子—程子—朱子といやうに聖々相承けて道を相傳する系統を示すのぢや。

道學とは一には儒學、二には宋儒の理學、三には黃老の學を指す。今は儒學のとぢや。

桓魋のとは孔子が術を去つて宋に適た時、弟子と禮を大樹の下に習はれた。宋の司馬桓魋なるもの之を殺さんとして其樹を伐つたので、論語述而の篇に、天、徳を予に生せり、桓魋其れ予を如何とある。陳蔡の間のとほ淮南子に、孔子遭厄陳蔡之間、絶糧七日餒病、孔子絃歌

とある。

養氣とは心氣を養うて害せざるとで、彰祖の傳に、少好恬靜、惟以養神治生爲業とある。また仙を修するものは口常吐死氣取生氣、慎笑、節語、常思其形とある。

其上孔子の弟子の中にも子貢は貨殖者也。汝と原憲は一人當千の貧乏人也。それゆへ今の世までも貧乏なる事をいはんとては、汝と原憲は一番に引出され、ちのづから窮鬼の先祖となる事、死後までの耻辱ならずや。

子貢は論語先進篇に、賜不受命而貨殖焉とある。

顔回は論語雍也篇に、孔子曰賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂。賢哉回也とある。莊子讓王には孔子謂顔回曰回來、家貧居卑、胡不仕乎。顔回對曰不願仕。回有郭外之田五十畝、足以給飡粥、郭内之田十畝、足以爲絲麻、鼓琴、足以自娛、所學夫子之道者、足以自樂也。回不願仕とある。

原憲のとは同書に、原憲居魯、環堵之室、茨以生草、蓬戸不完、桑以爲

樞、而養牖二室、褐以爲塞、上漏下濕、匡坐而弦。子貢乘大馬、中紺而表素、軒車不容巷、往見原憲……子貢曰嘻、先生何病。原憲應之曰憲聞之、無財謂之貧、學而不能行、謂之病、今憲也非病也。子貢逡巡而有愧色とあり。

我は養氣の法をもつて精神を收め、形を訓練して地仙となり、八百歳の壽命を保てり。汝が賢人達も短命にては無用の事也。

地仙とは飛行自在にして天に昇るに至らず、人間の儘で地に行く仙人の
とちや、地行の仙といふ。

顔が云、我汝が惑を解てとらすべし。それ天下の寶とするものは軀命也。貴ぶ所のものは面貌也。倚所のものは手足耳目なり。身首四肢の六用一源に會するものあり。汝これを知るや。天地の長久なるは形と氣とをもつてのみに非ず。人の視聽操履も耳目手足心をもつてするに非ず。耳は聽、目に視、手は操、足は歩行といへども、死する人にも耳目手足あり。何ぞ視聽操行せざる。心よく思ふといへども、死人にも七竅具にあり。何ぞ知識なきぞや。

なきぞや。

人の寶とする所は生命で生命に代る寶はない。また人の大切にする所の者は面貌である。併し面貌は生命の衣服である、身命はまた吾人の本性の衣服である。譬へば枝葉は樹木の衣服、毛皮は走獸の衣服、羽翼は飛禽の衣服、森林は山岳の衣服、波浪は大海の衣服、山川は地球の衣服、萬象は宇宙に充滿せる一大靈心の衣服である。故に吾人が身命は此一大靈心の衣服たるに過ぎぬ。されば吾人は衣服を重んじて衣服の主たる靈心を等閑にしてはならぬ。況や身首四肢の如きは末の未たるものぢや。而して其大本大原は即ち一大靈心たり、一大生命たる一物で、之を道とも、眞如とも、佛性とも、法性とも、神とも、如來ともいふぢや。

天地の長久なるは陰陽の氣と之より生じたる形とより成るとは儒者の説であるが形も氣も皆此一大靈性の變態であると知らねばならぬ。眼の見るも靈性が見、耳の聴くも靈性が聴き、手の操るも、足の歩むも心の思ふも皆此靈性の作用ぢや。

七竅とは莊子に、人皆有七竅、以視聽食息とある。眼二つ、耳二つ、鼻の孔二つ、口一つで七つの穴となる。

六用とは佛教には六根即ち眼耳鼻舌身意のはたらきで、證道歌に、六般神用空不空、一顆圓光色非色とある。今は身首四肢の六用としたのぢや。但虚にして靈あり、一にして體なきものあつて客人となり來る。其名を玄徳といへり。天地萬物を總持するものにて、天地は我と同根萬物一體也、孟子の所謂萬物皆我に備はると、これ天地と我と並び生じ、萬物我と一たる所以なり、草木も人間も同根同生の物にして、人は草木の知恵あるもの也。故に其順に逢ば生、其逆に値ば死す。既に死して後は瓦礫も同じ、汝骸の八百歳を重んじて自己の身に具たるの徳の事を忘れたり。忘るべき形を忘れずして忘るまじき天徳の事を忘れて可ならんや。

天地萬物を總持する無限の靈心は大小長短の形狀、青黄赤白の色彩を以て辨ずるとできぬ者なれば虚ともいひ、體なしともいふので、空無なのではない。此靈心が上つて天と爲り、下つて地となり、凝て百鍊の鐵と

爲り、開いて萬葉の櫻と爲り、物にあつて理となり、人にあつて性となる。故に天地と我と同根で、萬物我と一體である。されば植物は無機體を吸収して有機體と化し、動物は植物を食ふて動物と化する。有機體も無機體も同根であるから此二つが同化し得るので、動物と植物が一體であるから此二つが能く融合するのぢや。

吾人人間には天地間の萬物が皆備つてゐる。吾人の身體の内には空氣の元素もあり、ガスもあり、低氣壓が生じて大風が起り、腸肛より出るともある。地の元素もあり、塵埃もあり、砂石までも尿道に生ずる。火の元素もあり、火熱もあつて體温を保ち、電氣も生じ、腹中には雷鳴もある。カナダのウンベツグといふ所にては空氣が乾燥して人身に生じたる電氣が發散せぬ爲め、婦人が頭髮を梳ると毛が直立して眞に山の神の相貌を現はすといふ。また吾人の身體からは宛然地球より蒸發氣が上る如く汗が絶えず蒸發してゐる、されば地球上の露と同様に身體にも露を結ぶ。地球に無感覺なる草木の生長する如く身體にも髮毛鬚髯爪齒等の無

感覺なるものが生じ、地球上に禽獸がある如く、身體にも寄生虫が生ずる。斯く吾人の身體は一個の小天地であるのみならず、吾人の心は鬼をも出し、佛をも出し、修羅ともなり、餓鬼ともなり、畜生ともなる。孝悌も仁義も、不孝不悌も、不仁不義も皆吾人の心に備つてゐる。是を以て孟子は萬物皆吾に備はるといつたのぢや。
人は草木と同一類の生物で、少しく智慧が多いといふに過ぎぬ、故に吾人の身は埋めば土、焼けば灰で少しも他の物質と異なる處は無。さすれば此身體が八百歳の壽を保つたとしても、何の詮もない、假令僅か一日の生命を保つとも、吾人の受けたる靈心を全うして之を活用すれば之に勝つた好いとは無いのぢや。
玄徳とは淮南子に、執玄徳於心而化馳如神とあり、註に玄は天なりと釋してある。
天地同根とは莊子に天地我と並び生じ、萬物我と一たりとあるより出た説ぢや。

汝養氣調練の法を修して八百歳までの壽命を保てりといへども、鶴は千年龜は萬年、東方朔は九千歳といへば、汝が八百歳は天死也。大椿は一萬六千年を一年とす。これらより見れば汝は落地兒にも非ず。汝が養氣調練は死を畏れ生を貪つて、骸をのみ大事と思ひ、壽を是とし、天を非とす。是非好惡の念慮絶す。自然にしたがはざる病によりて八百歳を一期として死したれ共、汝に何の徳がある。是骸を修して徳を修せざる也。

人は何十萬年生きたりとてそれにて満足といふ事はない。臥雲夢語集に、彭祖八百歳而死、其婦哭之慟。其隣里其解之曰、人生八十不可得、而翁八百矣、尙何尤。婦謝曰、汝輩自不喻其八百死矣、九百猶在也とある。かく吾人の慾に制限なく天命に安んずる事を知らねば何萬歳にても天死と思ふであらう。熊澤蕃山は之を戒めて、『順逆は人生の陰陽なり、死生は晝夜の道なり、何をか好み、何をか悪まん、義と共に從て安し』といふた。

東方朔は前漢の武帝の時の人で仙術を修して長壽を保つたとの俗説があ

る。

大椿とは莊子逍遙遊篇に、上古有大椿者以八千歲爲春、以八千歲爲秋とある。

常に自然による時は益所もなく、損する所もなし、然るに長命を好み天死を惡て、是非の内に在て形骸の外を論じ、形骸の内を議せざるは人と類を同する也。形骸の外を忘れ、是非を外にして天徳内に全きは天の徒なり。

柳は緑なるが其天真で増す所も減する所もない、それが最上の天命、花は紅なるが其天真で餘る所もなく足らぬ所もない、それが絶好の境涯である。人も亦其通りで、短命の人は短命で是もなく非もなく、絶好の天命、長命の人は長命で、過もなく不及もなく、最上の天命である。故に松平樂翁は、『梅が香を櫻の花、柳の枝になどとは思ふまじき事なり。花の紅、柳の緑、心をわけて樂ひべし』というた。さるを短命を惡み、長命を好んで、是非なきに是非を立て外部なる形骸に心を囚はれるは人欲に殉ふ者であるから人の徒ぢや。之に反して是非を外にして天命に安ん

じ、天心のある所を悦ぶ時は天徳を失はぬから天の徒と謂はるる。

汝が八百歳も我三十二にて眞の即の時より見れば小兒の如し。これ汝は形骸の外物に壽命を得て人に屬すれば也。何ぞ天に屬せずして八百歳の自慢片腹いたき事なり。自己の天徳充足て感ずる所に隨て相應ず。思ふ事もなく、爲す事もなし。寂然として遂に萬像に通ず。これ莊子が徳充符の意味なりと論じ終て別れ去る。

彭祖は養氣の法を以て形骸の壽を保ち、顔淵は玄徳を修めて皇天の壽を全うした。天壽は窮りなく、人壽は限りがある、故に顔氏の壽は三十二にして彭祖の八百歳に萬倍するといつて佳い。所謂天徳とは宇宙を總該する一大靈心其物であるから、此天徳が自己に充つれば感ずる所に應じて其妙用を現はす。例せば孝子節婦の行ひは此天徳が其親に應じ、其夫に應じて發したので、忠臣義士の行ひは此天徳が其君に應じ其主に應じて現はれたので、佛祖の出世とは此天徳が一切衆生に應じて煥發したに外ならぬ。然而して此天徳即ち靈心は思慮するとなくして能く一切を攝

理し、爲すと無くして能く爲さざる所はない。されば寂然として無爲無事なれども其活動は春の花となり、秋の紅葉となり、夏の月となり、冬の雪となる。これを萬像に通ずといふのである。斯く天徳に充ち足るを以て、天壽死生の如きは論するに足らぬ。古人が、當其貫日月、死生安足論、地維賴以立、天柱賴以尊と謂うたのはこゝである。眞に即くとは死するとなや。

金鐵論功

本篇は老子に『不善人善人之資也』とある一句より得たる寓言じぢ。人は兎角卑きを嫌ひ、暗きを厭ひ、賤きを惡み、貧きを避け、醜きを憎むのが常情なれども、高きは低きを以て基とし、富めるは貧きを以て始めとし、貴きは賤きを以て本とし、多きは少きに因り、大なるは小なるに依り、美なるは醜なるに由るとに注意せぬ。昔し『比田武右衛門と云ふ者、武田家に奉公を望みて來れり。如何なる武功ありしやと問ふに、其身の惡きことをのみ算立て、武者奉行に返答しけり。肝煎の者、腹立して、如何なるとにさは申さるぞ、都て身代持き候者は覺えある譽を申べきに、惡きことのみ申たる上は、定めて御抱あるまじくと言ければ、武右衛門聞て、眞の信玄公ならば深く御思慮あるべしと言ふ。武者奉行有の儘に告げれば、果して之を怪み、其士しれものなるべし。能き働は飾りても言ひ出すべきに、惡きとのみ言て望むからは、其器量察すべきと

なりとて、目見申付て召抱たり。果して目利に違はず、武田の鬼武右衛門と異名なされたり。」

我身を卑きに置き、我悪きとを人に語るは大勇の人にあらざればできぬ。道がに信玄は武右衛門が此大勇を看破して臣としたのは深慮の人というてよい。若し吾人にして悪名を避けず、悪衣を嫌はず、悪食を厭はず、醜きを悪まず、卑きを哀まざれば、必ずや芳名を流し、錦玉を著け、尊貴の位に居るの大業を成すことができる。

禪門の修行も亦左の如くで一法も嫌ふ底のものはない。菩提も可なり、煩惱も可なり、地獄も可なり、天堂も可なりぢや。靈山和尚に一僧が問うていふ、「坐禪せんとすれば貪瞋痴が起り候は如何」。和尚答ていふ、「貪瞋痴をば除かんとせば除き得るまいぞ、賞翫して置け」。これ實に金言ぢや。煩惱を嫌ふて之を除かんとするが煩惱で、猶ほ賤きを嫌ふの心が賤しいのと同じぢや。臨濟は、
迥然獨脫不與物拘、乾坤倒覆我更不疑、十方諸佛現前無一念心喜、三途

地獄頓現無一念心怖。緣何如此……三界唯心、萬物唯識、所以夢幻空華、何勞把捉。唯有目前現今聽法底人、入火不燒、入水不溺、入三途地獄、如遊園觀、入餓鬼畜生而不受報、緣何如此、無嫌底法というた。一も嫌ふ底の物がなれば低きが其儘高く、卑きが其儘尊く、貧きが其儘富み、煩惱が其儘菩提となる。烏地雨田翁が鐵棒の如きものを畫いて其贊に

我行か婆、閻魔も鬼も粉微塵

と物したのを見た。予は直ちにこれに下の句をつけて

阿彌陀に遇はゝいかにするらん

とした。閻魔も鬼を殺すは好いが、彌陀は如何にしてかたづけけるか、此點が禪者と念佛行者と異なる所ぢや。三祖大師は至道無難唯嫌揀擇といはれた。此揀擇せず一法も嫌ふ底の法なさを説くのが此章の大旨ぢや。五金の首領黄金大真人、嶺南夷獠の洞穴に於て閻魔の鐵に謂て云、五金は金銀銅鐵鉛で古へ金屬を五種に分類したのぢや。

大真人とは老莊に所謂聖人の異名。

嶺南夷獠とは大庾嶺の南で夷人の住處ぢや。六祖大師が五祖に謁した時、五祖問曰汝何方人、欲求何物。六祖曰弟子是嶺南新州之百姓、遠來禮師、惟求作佛、不求餘物。五祖曰汝是嶺南人又是獠獠、若爲堪作佛。六祖曰人雖有南北佛性本無南北とある。

閩廣は嶺南の州の名で鐵の産地ぢや。

天地の萬物、人畜を初とし魚鳥蟲介の微物にいたるまで各々其類によつて部を分ち殊族を別にして、三百六十種とし、一類毎に首を立て其種族を領せしむ。これ古人の定むる所なり。

こは大戴禮に毛蟲三百六十而して麟之が長たり……羽蟲三百六十而して鳳凰が長たり……甲蟲三百六十而して神龜之が長たり……鱗蟲三百六十而して龍之が長たり等とあるを指したのぢや。

就中我々が殊類は金銀銅鐵鉛を五金として其外の金物を約めたり。我は五金の首たるのみに非ず、七珍萬寶の長として我に勝る物もなし、天竺にて

は蘇伐羅と名付、仙家には大真と稱し、あるひは鑿錄といふは我美なるの名なり。佛の肌になとへては紫磨黃金とし、八功德池の砂も我なり。

これは黄金の自負高慢に托して小人の倨傲を戒めたので、「乃公出ですんば蒼生をいかん」などほざく政治家や、「おれが居ねば此家は暗夜だ」など放言する慢心者を罵る著者の意を汲んで讀むがよい。鍋島直茂は「老年に及び、夜々小便に通ふに、女共の臥居たるを見て、拜みて通りたり。何れも不審に思ひ尋ねければ、直茂、偕は女共見答たるか、我等若年の頃は、中々不如意に候ひつるに、只今召使下女等、結構の夜物杯を著たるを見れば、偏に天道の御恩恭くと、身に餘り存じたる故、覺えず拜みて通りたり」といはれた。人は斯くこそありたいものぢや。陽明先生は一個の傲の字が一切惡徳の本だといはれた。

七珍とは七寶ともいふ。翻譯名義集に、一蘇伐羅—金、二阿路巴—銀、三琉璃、四頗黎、五牟婆洛揭拉娑—硨磲、六摩羅伽隸—碼瑙、七鉢摩羅伽—眞珠とある。

鑿鑿とは爾雅に黄金謂之鑿、其美者謂之鏐とあり、字彙に鏐者白金之美者也とある。

佛の肌云云は佛の三十二相の中に佛身は紫磨金色とある、真金の美なる者は紫色を帯る故紫金といふ。

八功德池とは稱讚淨土經に、何等名爲八功德水、一者澄淨、二者清冷、

三者甘美、四者輕軟、五者潤澤、六者安和、七者飲時除飢渴等無量過患、

八者飲已定能長養諸根四大增益とある、極樂世界の池の砂は金ぢや。太

眞とは金の異名なると三才圖會に見える。

かほど貴き我仲間わがなかまに汝が如く俗姓そくせい鄙く、色黒く、心かたくなにして柔和な

らず、中々金には似も付ぬものを何とて古人は五金の類にしたぞ、合點がてんの

行ぬ事なり。尤も古人は汝を以て五金の部類には入たれとも、いかにして

も我々が仲間なかまの顔汚かほにくなれば今よりは五金の部類ぶるいを省也。

これ亦小人倨傲の失を誡むる寓言ぢや。陳幾亭の語に、「君子に二の耻あり、能くする所に於る耻なり、能くせざる所を飾る耻なり」とあり、ま

た伊藤東涯は「苟も善あれば當に謙讓して以て之を晦らすべし、豈之を誇揚すべけんや。其之を誇揚するは乃ち其善を喪ふ所以なり」というた。熟く思はねばならぬ。

鐵が云、汝の性質美なるを自負して某が稟受の野鄙やびなるを厭ひ、古人の定置たる五金の部類ぶるいを今更退いまのりんとは非理なり。

こは洵に鐵の云ふが如くで、人間界に於ても白人が黃禍論を云々して東洋人を排斥し、米人が日本人を忌み嫌うて人間並の權利を與へざるが如きは非理の極で、天人の齊しく許さざる所である。

生れ付たる色の汝と異なるをもつてならば同じ五金の内にも、銀は白く、銅は赤く、鉛は淡黒し。これらも全く金に類せず、彼らは其儘ままさし置て、

某斗まがしを厭ひ惡むは何ぞや。生れつきたる色の米人と異なるを嫌はゞ黃人は黄く、印度人は赤く、歐州

人は白し。彼等は其儘に置いて獨り日本人を惡むは何ぞや。金が云、彼ら全く金の内なり。銀を白金と名け、銅を赤金と稱し、鉛を金

公とも青金ともいふ。皆金の名を得たり。汝と一類には云がたし。鐵が云彼らのみ金の名を得たるに非ず。某も黒金といひ烏金とも名づく。金が云古人五金の部を別に於てしばらく汝に金の名をあたへゆるすといへども、禹貢の三品に金銀銅を用ひて、未だ汝を用ひし事を見ず。これ汝が下凡下劣にて賈物に堪ざるに非ずや。

金は鐵を其種外に排斥して獨り其美名を恣にせんとし、米人は日人を其國外に排斥して獨り其利を恣にせんとする。これ鐵あつて始めて金の美現れ、日人あつて始めて米國の繁榮を來す所以を知らぬによる。天は獨占壟斷を許さぬ、峻き山は必ず崩れ、大なる波は必ず碎けて平衡に歸する。天は米人の大なる富と高き自負心とを崩潰せしむるに相違ない。昔「内藤昌豊の妻死す、其母一向宗なれば、一向僧來る。昌豊亡人の膳如何にも見事に申附し時に、上人我宗にては、阿彌陀へ食を備へば、脇々は入らぬことにて候と言て備へず。昌豊夫は何として他宗には異なる立派なりと尋ねければ、上人阿彌陀こそ肝要にて候へ、脇へ食を備ふるは

迷の心にて、我宗より他宗を笑く存ずるといふ。昌豊亡者飢ゑなば如何と問へば、上人阿彌陀さへ食を備ふれば、それが悉くの衆生へ施しになると云ふ。昌豊聞て手を合はし、偕も殊勝なり、他宗と違て造作もなき宗旨哉。一尊の施し萬人に渡るとは珍敷、先以て重寶なる宗旨哉と譽むれば、上人大に喜びて、我宗程殊勝たるはなしと自讃せり。偕昌豊自身膳を据ゑ、残り百人餘の坊主に、一切膳を据ゑず。坊主共是は如何と膳を乞へば、昌豊よく御口の違たること哉、上人にさへ参り候はゞ、外々の僧達は腹一ばいかと存じて、斯の如しと言ければ、坊主共詫言して、亡者にも膳を据ゑ、餘宗の如くして執行しとなり。今白人等が所謂道徳なるものは一向宗の膳の据ゑ方と同じぢや。彼等は白人てふ本尊にさへ膳を据ゑれば好いと心得てゐる。他の人種、他の國民、他の生物は白人の爲に生存し、白人に仕へんとて生きてゐる如く思つてゐる。彼等は黄人や黒人を虐待しても少しも不道德とは思はぬ。其非理悖徳なるは黄金が鐵を排斥するよりも太甚し。

銀は爾雅に白金謂之銀其美者謂之鏤とあり、銅は説文に赤金也とあり、鉛と金公といふは鉛と記すからで、説文に青金也とあり、鐵は説文に黒金也とある、烏金も同じとちや。

禹貢とは書經の夏書の篇の名で、禹が九州を巡視して水利地質の上下、物産の多寡を調査した時の記録ぢや。

鐵從容として笑つて云、それ物の妍媸善惡の質同じからざるは自然の性也。妍媸ものは媸きものによつて美麗の名を得、惡人に對して善人の名を顯す。世間をしなければ妍き者のみならば、其美しきの名いづくよりかこれを得ん。善人のみならば善と指す所あるまじ。老子の云、惡人は善人の質とこれなり、妍媸善惡は自然の對待にして、日に對して月あり、晝に對して夜あり、陽は陰によつて陽の徳を顯す。此理に依て見れば某が如く色黒く野鄙下劣の物あるによつて汝の金徳もあり。しかれば汝の徳を顯すものは我あるゆへなり。荆山の人は玉を礫にして鳥を撲、連城夜光の明珠も瓦礫にひとし。これ玉のみ多くして對すべき下劣の物なきによつて反て玉の徳を失ふに似たり。

たり。

此一段が老莊の本意ぢや。善人とは不善人に對する假の名のみで畢竟は善もなく不善もない。世に所謂惡人とは天賦の佛性を己れ一人又は我家内のみ發揮して他人他家に及ぼさぬので其所謂善人とは天賦の佛性を他人他家まで及ぼすのみぢや。されば盜賊も殺人犯も己れ一個としては善人で、我家に居ては義人である。然るに他人に對し他家に入つては我家に居る時の佛性が味んで行はれぬ。偏狹なる愛國者も其如くで我國に對しては善人であるが、他國人に對しては大惡人となる。要するに人の天賦には善惡は無けれども、其天賦の良能を發揮する範圍に廣狹の差がある。されば善人も誇るに足らず、惡人も自ら棄るには及ばぬ。且つ賤き者あればこそ貴き者もあり、陰があればこそ陽もあり、暗があればこそ明もあるなれ。金玉の美なるは岩石の醜きより生じ、花の妍きは根の醜きより生じ、王侯の貴きは百姓の賤しきに養はれつゝあるでないか。故に人の世に處する貴き者は身を賤きに置き、高き者は心を低きに安ん

じ、富める者は貧きを忘れず、功なる者は功なきが如く、名ある者は名なきが如く。安き者は危きが如く、智ある者は愚なるが如くするが天道に契うのちや。

荆山の人云云とは劉子新論に、崑山之下以玉抵鳥、彭蠡之濱以魚食犬とある。

連城とは卞和の璧ちや。秦昭王が十五城を以て之に易んと乞ふた故に連城といふ。揚炯の詩に、趙氏連城璧、由來天下傳とある。夜光とは述異記に、南海有珠、即鯨目夜可以鑒。謂之夜光とある。

汝は本より萬貨の長として壹歩と變じ、小判と化し、大判と成、世間を通用して貧窮を救ひ國を富すの大徳、某が企及ぶ所に非ず。しかれ共我は小にしては小刀菜刀の類に身を變じ、大にしては鎗長刀と化して強敵を征し、罪ある者を伐し、天下國家の不虞に備て太平の功をいたす事は汝の及ばぬ所なり。汝を以て刀に造り劔戟に作るも某がごとく劔戟の用には立す。古へより和漢の名劔多しといへども、未だ金にて造りし事なし、所詮物を

切の役に立ざれば也。これ汝の不能自然の性質にて某より劣る所以ならずや。しからば汝の貴も貴に止まらず、某が賤も賤に終らず、汝いかんとするかといへば、金更に返答なし、

天地間の物は各其位に居れば其位に居て其儘最貴最上である。金は金として最貴最上なれば、鐵は鐵として最貴最上、眼は眼として最尊無上、鼻は鼻として最尊無上、臍は臍として最尊無上である、鐵をして金たらしむるともできず、臍をして眼たらしむるともできず、山をして海たらしむるともできず、虫をして鳥たらしむるともできず、伯樂をして蓬蒙たらしむるともできず、孔子をしてナポレオンたらしむるともできず、釋迦をしてワシントンたらしむるともできぬ。故に人各其位に居て最善の力を盡せばそれにて天下萬姓を益するのである。淮南子に、神農之法曰、丈夫丁壯而不耕天下有受其饑者、婦人當年而不織天下有受其寒者とある通り、其位に居て其事を勉めざれば天下にそれだけの害を及ぼす。されば人は自己の位置と境遇とを省みて最善の力を致すが肝要ちや。黄金

が鐵に對して誇るが如き妄想は速かに捨てねばならぬ。我禪門の修行は一に我心に物なきを貴しとする。不識庵主人上杉謙信が家訓に、「心に物なき時は心廣體胖なり、心に我慢なき時は愛敬を失はず、心に欲なき時は義理を行ふ、心に私なき時は疑ふとなし、心に驕なき時は人を敬ふ、心に誤りなき時は人を恐れず、心に邪見なき時は人を育つ、心に貪りなき時は人に諂ふとなし、心に怒なき時は言柔なり……心に曇なき時は心静なり……心に自慢なき時は人の善を知り、心に迷なき時は人を咎めず」とある。よくよく思ふべきである。

不虞とは不測の禍のとぢや。左傳桓公十七年に、備其不虞とあり、詩經に、用戒不虞とある。

石白生死

此篇は莊子大宗師の大意を示す寓言ぢや。莊子が大宗師は、發性命之源頭、闢修証之實義、直洩造化之機、以開仙佛之門と評してある通り、生死存亡の間にあつて不生不死の妙境に遊ぶのが本意で、古之真人不知說生、不知惡死、其出不訢、其入不距、修然而往、修然而來而已矣とある。生死は人生の大事であるから、此生死の二つに惑ふやうでは道を得たものとは謂はれぬ。修証義の第一節にも、「生を明らめ死を明むるは佛家一大事の因縁なり」と示し、さらに生死即ち涅槃と明むれば生死の厭ふべきもなく涅槃の欣ぶべきもなし」と生死を明むるの方法を説いてある。「生も一時の位死も一時の位」「生死は佛の御命なり」とは承陽大師の金言である。此旨を體したならば生も可なり死も佳なり、

をもしろや散る紅葉も咲く花も

自らなる法の御すがた

咲けばちり散ればまた咲く年毎に

詠めつくせぬ花のいろく

咲くもよし散るも美事の櫻かな

と悟入して死生二つながら忘るゝとができる。こゝを莊子は、夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死。故善吾生者、乃所以善吾死也といふた。マールカス、アウレリアスは、死は生と同じく自然の妙用なり、同じ要素の結ばるゝと解けて又同じ要素となると唯これのみ。されば何人も有限の身なるを耻づべき理なし。死は人の天性に反するにあらず、又其存在の理由に反するにあらずと明めてゐた。かく哲人の見る所は古今一轍ぢや。

豆腐石白に謂て云、天地の間に死ざるものありや。石白が云、天地の萬物死せざる物なし。たゞ我斗は生ありて死なく、火に入ても形を滅せず、水に入ても損せず、土に埋れても朽ず、壽命を天地と共にして萬代不易の性を得たり。汝がごとく脆き物に非ず。不死の物といふは我を外にして誰か

あらん

萬物一として生死なきはない、生死は萬物の變化で、萬物の變化は萬物の活動で萬物の活動は萬物の生命ある所以ぢや。若し生死なく變化が無ければ萬物は死物で取るに足らぬ。吾人の生死は日々夜々にあり時々刻々にあり、昨日の吾は今日の吾でない、今日の吾は明日の吾でない、朝の吾は夕の吾ではないのである。かくてこそ少年も壯年となり、壯年も老年となるなれ。故に人に死あるは吾人の生命ある所以で寔に吾人の喜ぶべき所ぢや。マールカス、アウレリアスは、『人若し自己の智と靈とを重んじて、常に之を存養せば、悲哀なく、苦悶なく、強て人を避くるを要せず、又強て友を求むるを要せず、強て死を求むるを要せず、又強て死を避くるを要せず』といふた。即ち居る所に安んじて、將らず迎へず從容として適する時は我心に生死の恐れを入れぬ、生死の怖れがないから、不生不滅の大安心ぢや、石白の言ふが如く生あつて死なきを希ふは即ち生死の凡夫で最も憐むべき境界といはねばならぬ。

豆腐が云、汝にも生死あり、犬芝が暮に生じて朝に死し、横花が日陰を待ぬよりも短きは汝が命也。生れ出て知もなく、意識もなく、動かず、働かず、死骸にて産るゝものゝごとし。

石臼は智もなく識もなく兀然として動かす恰も不老不死の如く見ゆるが、事實は然らずして天地の悠久なるに比すれば、植花の墓なきよりもはかなき壽命ぢや。ホーマーは、「嗚呼人間の代々は歳々の木葉にさも似たるかな。一年の紅葉風に舞ひて地に散りしゆくや、復も樹林は蕪穢として春の緑を芽し來る。斯の如く人も亦然り、一代朽ちては一代繼いで興る。嗚呼誰か永遠に春ならんや」と云うた。

犬芝とは列子に、朽壤之上有菌芝者、生於朝死於晦。註に、糞土之芝也、朝生暮死とある。莊子に、朝菌不知晦朔。註に、犬芝也天陰生於糞土、見日則死とある。

石臼が云、我本然は塊々としたる小石なり、年經るにしたがひ、生長して大盤石となる。然れば我死物には非ず、今石臼となつても引廻されて、働

く也。汝何ぞ動かす働かずといふぞ。豆腐が云、汝生長するを以て死物にあらざるといふ、これはもつとも也。然れ共、石臼と成て動は人の手に引まはされて動くなり。これ則人の心識の動く也。汝が動くには非ず。我汝にも死ありといふは其ごとく石臼に成たるが證據なり、それをいかんといふに、汝が本然の儘にて土中に埋もれて居る時は生長すべけれ共、石臼と成、又は石燈籠となるにいたつて、玄能鐵槌を以て自然の性を損じ破られて死する也。故に石臼石燈籠の毫髮も生長したる事なし。これ自然の生氣を漏して死する也。汝にも死を逃れざる事明白ならずや。

逃るべからざる生死を免れんとするが本來迷ひぢや、生は生に任せ、死は死に任せて置けば何の患ひも無い。莊子に子祀子與子黎子來の四人が相語つて云ふ、孰能以無爲首以生爲脊、以死爲尻、就知死生存亡一體者、吾與之友矣。四人相視笑、莫逆於心、遂相與爲友となる。死生存亡は一個の物に就て云ふのみで、宇宙全體より見れば死も無く生も無く存も無く亡もない。況や天地を該羅する一大靈性より見れば不生不滅不増不減

ぢや。人生は此靈性の活動であるから、これ亦不生不滅で、一毫の増減もない。さすれば吾人が死生を見るは四時の交謝を觀るが如くすべきぢや。鍋島直茂は「常盤たる松の緑も春くれば、今一しほの色まさりけり、と此心をもつべし、何日も出ず入ず一つ様にし、春くる時色まさりたるがよし」というた如何にも面白い。

それ生死は晝夜の如し、子は亥に生じて丑に死す、これ時刻の生死也。日は朝に生じて昏に没す、これ一日の生死なり。春は冬に生じて夏に死す、これ四季の生死也。萬物は天の道を得、天の命を受けて生じては喜ぶべし死しては生死二つながら忘れて自然に復る。獨來りて獨歸る。誰かこれを礙へん。易に云、始を原て終に反る故に生死の説を知ると。孔子のたまはく、朝に道を聞て夕に死すとも可なり。孟子の云、天爵貳す、身を修て命を俟つ、洞山の云、死して後一株の草とならんと、これ皆生死の的を破つて、天命自然の道を自得する意なり。

生死を以て晝夜に比するは老莊も儒佛も皆一轍である。莊子には死生命

也、其有夜旦之常天也と明言し、淮南子には生者寄也死者歸なりといひ、熊澤蕃山は死生は晝夜の道なりといひ、子夏は死生有命、富貴在天といふた何れも死生を以て念となさず、天に任せ命を樂むが諸道の極致とする所である。ハイデイは、「夜明くれば我身の夕景までに死すると之を考へよ、日暮れば翌朝まで我生命の保證し難きを思ふ。一言にして盡せば常に死に處する準備をせよ、何時死するも俯仰天地に愧ぢざるに準備せよ、誰かいふ死は苦痛なりと、死は最上の樂園なり」と公言した。易に謂ふ所も孔子の説く所も、孟子のいふ所も、洞山の示す所も皆安心立命の四字に外ならぬ。

洞山とは洞山良价で曹洞宗の祖師ぢや。死して一株の草となるとは洞山録に、僧問、亡僧遷化、向甚麼處去、師云、火後、一莖苒とある此を指したのであらう。

石臼が云、道とはいかやうなるものぞ。豆腐が云、道いふべきものならばこれ嚙にして道に非ず。道いひ難きものならばこれ瘡にして道に非ず。道

聴くべきものならばこれ聲にして道に非ず、聴がたきものならばこれ聲にして道に非ず。道はいふべく聴べきは生也。いひがたく聴がたきは死なり。皆生死に属すれども生にも非ず、死にも非ず。金の堅も火に逢ば流、水の軽く清も風日に逢ば消これ體のあるものなればなり。道は體なし、既に道と指名付る所あれば體なきにもあらず、自然の大宗師なり。

道とは絶對の靈心であるから、言詮の及ばぬ所ぢや、されど言詮も亦道を離れてあるものでない。また道は耳口を以て傳ふべきものでない。されど耳口も亦道を離れてあるとはできぬ。故に古人は道を以て月に喩へ、言句を以て月を指すの指に譬へた。道は隨處に生じ、隨所に滅する。萬象皆道なれども、道は萬象にはあらず、

「はなてば手に充てり一多のきはならんや、語れば口に滿つ縦横窮りなし」と承陽大師のいはれたるはこゝぢや。是を以て道は方寸の中にも隠れ。六合にも充つる。これ道の生死出沒で、其不可思議なる所以ぢや。道は體ありといはゞ無礙の道でない體なしといはゞ如何にして萬象を生ずる

ぞ、こゝが實參實究すべき所ぢや。

大宗師とは道の異名ぢや。人天の間に分見し、死生の外に存する絶對の那一物を大宗師といふ。

嗚呼天命は不生不死の本體なり天地萬物同一氣に出、同一氣に入。汝は石にして硬、我は豆腐なれば脆和らかなり。汝が硬は汝も知ず、我和らかなるは我もしらず、識心分別の知る所に非れば、自然に委ねて止むこれ。莊子が大宗師の意味也。

萬物皆道より出て道に入る。硬さも柔さも、美しきも醜きも大なるも、小なるも麤なるも、細なるも、長きも短きも、乃至貧きも富めるも、貴きも賤きも、窮するも通ずるも、死するも生するも、皆命の存するあれば之に委ねて喜憂を爲さぬが莊子の立命ぢや。熊澤蕃山は、「富貴なる時は富貴を行ひ、貧賤なる時は貧賤を行ひ、すべて天命を樂みて吾あづからず」といひ、王景文は、「禍を避くるに心あるは運に任すに心なきに若じ」といひ、マ、ーカス、アウレリウスは、「宇宙よ汝に宜しき事にして一

として我に宜しからざるはなし。汝の時に適へる事一として吾爲に早きに過ぎ、若くは遅きに過る爲し。自然よ汝の季節によりて生ぜらるるもの一として我を養はざるはなし。萬物悉く汝より出、汝の中に存し而して又汝に歸る」というて命を樂んだ。

順逆兩忘

著者は前篇に於て大宗師の主旨を説き生死を透脱して不生不死なる涅槃の妙境に遊ぶべきを論じたれば、更に本篇に於て生死海中にあつて順逆の波濤を如何に度るべきかてふ方便を示すのちや。熊澤蕃山の云く、小人は「順を好み、逆を厭ひ、生を愛し、死を惡みて、順のみ多し、順は富貴悅樂の類なり、逆は貧賤患難の類なり」と。げに蕃山のいへる如く凡夫は順逆の兩頭に心惑ふが故に生死に於て自在を得ぬ。若し佐藤一齋の如く、

順境如春出遊觀花、逆境如冬堅臥看雪、春固可樂、冬亦不惡、
と觀じ來れば順逆を打して一片とする事ができる。又勝海舟の如く、
世路の風霜は、吾人の心を鍊るの境なり
世情の冷暖は、吾人の性を忍ぶの地なり
世事の傾倒は、吾人の行を修むるの資なり

と違すれば順逆二つながら吾に可ならざるは無い。法然上人は七旬に餘る老いの身を以て土佐に流され、毫も君を恨み人を咎むるの心なく、却て邊土の士女を教化するを得たるを欣びて、君恩の忝なく、如來大悲の導きを感謝した、されば信仰は毒を變じて藥と爲し、禍を轉じて福と爲し、鐵を點じて金とする力がある。カアライルは

信仰は世途患難に處して唯一必要のものなり
というたが、洵に名言ぢや。

垂柳子順の一字をもつて一生の受用とす。莊翁問て云、汝が平生受用する順の字の義理はいかん。垂柳子が云、順はしたがひ逆はざるを道とす。剛ものは折やすく柔かなる物は敗れ易し、柳の枝に雪折のなきは剛にも非ず柔かなるにもあらず、順の道をもつて逆ざるゆへ也。我に逆なるものに對しても順の道をもつて逆ざれば彼が逆は逆にして我順の道に害なし。萬事の上に付て順なれば物と逆はず。逆ざれば争ひなし。争ひなければ人に恨られず。平生和平安穩にして一生身を全す。我順の一字を受用するは此ゆ

へなり。

垂柳子の受用する順の一字は老莊の和を主とし、柔を守るの教へぢや。夫れ兵強ければ滅び、木剛ければ折れ、皮固ければ裂け、齒は舌よりも堅くして之に先つて破る。男子は強くして其壽命短く、女子は弱くして其壽命長し。骨は硬くして折れ、肉は柔かにして折れず。刀は鋭くして缺け易く、紙は剛ければ用ひ難し、故に剃刀を以て菜を切るべからず。西洋紙は以て涕をかむべからず。故に孫子は

百戰百勝は善の善なるものに非ず、戰はずして兵を屈するは善の善なる者なり

というた。されど順を守れば逆が之に従ふ、順逆相對すれば必ず吾人の方寸に波瀾を捲き起すを免れぬ。これ莊翁の未だ可とせざる所以ぢや。莊翁の云、汝が生涯の受用もつ共至極なり、しかれども未だ盡さる所あり。それ順は逆に對するの名なり。水火善惡の對待するが如し。汝順に執著して逆を惡むに心あり。順逆ふたつながら忘れて、平等一枚の地に居て

世間順逆の境界を見よ。本來順もなく逆もなき事を自得して、順の字に縛られたる自縛の繩を脱するのみならず、順逆を是非するの心病天然と治すべし。これ禪家に所謂不思善不思惡の旨と一轍なり。

順逆の生ずるは我てふ一念が本ぢや、我てふ一念は天地同根萬物一體の理を體せぬから起る執著で一切罪惡の母である。既に我てふ一念があれば好惡が生じ順逆が生じ、是非が生じ善惡が生じ、得失が生じ利害が生じ、一切の對待が競ひ來つて喜怒哀樂の情を誘起する。世人が泣いたり笑うたり、怒りたり哀んだり、諍うたり戦つたり、切つたり殺したりするは皆これが本ぢや。故に順をも好まず、逆をも惡まず、順逆二つながら忘れて平等なるが第一ぢや。

自縛とは無繩自縛と稱して繩もないに自ら縛して不自由をするをぢや。順逆は本來なきを自ら惑うて解脱するとができぬ。古人が、願くは吾に解脱の法門を與へよと云ふ人に對して誰か汝を縛すと答へたのはこゝぢや。

不思善不思惡とは六祖大師の語に、心要を知らんと欲せば一切の善惡都て思量すると勿れとあり、承陽大師の語にも、善惡を思はず是非に管すると莫れとある。

芳野の山にたどりて花を賞ずる人は風を惡で花の爲に逆なりとす、しかれども風は發散の役人なれば花の爲に逆なりとて吹すにはあらず。のこりなく散るぞめでたき櫻花

ありて世の中はての憂ければ
と古今集にある通りぢや。

これ花を賞する時は逆也といへども炎帝柄を乘て夏の暑氣酷しき時は納涼の庭に風を戀、扇團に招き寄て身の爲に順也とす。

風に順逆はないけれども人に順逆の心がある。炎帝とは淮南子に、南方曰、炎天、乃至南方火也。其帝炎帝、其佐朱明、執衡而治夏とある。娥捨更科の月を弄する人は村雲を逆なりとして惡めども村雲は雲の役人なれば三五夜中にも遠慮して出ずにはあらず。しかれども世界早魃の折からは

突兀山の端に面さし出すといなや、皇天の加祐を得たる心地す。これ月には逆なりとて悪む村雲も早魃の時は順とす。しからば順も順に非ず、逆も逆に非ず。順逆の當體いづれの所に於てすべけんや。

洵に莊翁の云ふが如く、人間ほど我儘なものはない、各、自分勝手に物に順逆をつける。一日の天氣に就ていへば、或者は遠足を試んとて晴天を希望し、或者は紙鳶を飛さんとして強風の吹くを願ひ、或者は旱天を厭ふて雨のふらんとを望み、或者は屋外にて撮影せんとして曇天を希ふ。而して各、其望む所を得ざれば逆といふ、しかも順逆の當體無所得なるを知らぬ。

日は晝を順とし夜を逆とし、月は夜を順とし晝を逆とするに似たれ共、日月ともに順逆に心はあるまじ。順逆の名は人の名付る所なり。且それ伯益は井戸を鑿て民に水の利を教へ、燧人氏は石を鑽て火を取の道を教ゆ、食を燒湯を沸も水の利用大にして皆これに頼り。しかれども知伯は水を以て趙の城を浸し、董卓は火をもつて漢室を焚捨たり。水は伯益の手に在ては

順となり、知伯に在ては逆となる。火も燧人氏に在ては順となり、董卓にあつては逆となれども、水火何ぞ順逆を事とせんや。順逆は人の一心より製造いだす物なり。汝順逆是非を心に置ずんば胸中明らかなる鏡の如く、順相をも迎へず、逆相をも送らず、萬像を止めず、常に悠然たらんのみ。

順逆を忘るゝ最簡の法は逆境を樂むにあり。逆境は小兒の灸、澤庵大根の重石、食物の鹽、親の小言、苦い藥と心得るがよい。此等は皆吾等の嫌ふ所なるも悉く吾身の爲に必要なものぢや。逆境あるは天恵の豊かなる所以と信じて之を樂めば順逆二つながら順である。抑も天地間の物一として犠牲に甘んぜざるはない、水土は草木の犠牲となり草木は禽獸の犠牲となり、禽獸は人間の爲に犠牲となり、子は親の爲に、犠牲となり、親は子の爲に犠牲となり、朋友は朋友の爲に犠牲となり、兄弟は兄弟の爲に犠牲となり、忠臣は君主の爲に犠牲となり、愛國者は國家の爲に犠牲となり、聖賢は人類の爲に犠牲となる。而して彼等は皆此犠牲の爲に進歩し向上する。一粒の米の如き稻より打落され、穀臼にひかれ、

杵にてつかれ、水にて洗はれ、火にて炊かれ、飯となりて齒にて嚼まれ、胃にて消化せられ、千辛萬苦を経て始めて進歩向上して人體となる。是を以て吾人は此犠牲献身に甘んぜねばならぬ。甘んじて犠牲と爲り献身の行を樂めば逆境の厭ふべきはない。佛家にて人世を娑婆といふは實に深い意味の存ずるとちや、娑婆は忍耐の意で此人世は一切の苦痛患難を忍ぶべき所ぢや。山東京傳の語に、

金のなる木のこやしといふは、堪忍なり、よく堪忍した目から見れば
あたふくも楊貴妃、小町に見え、摺鉢に植ゑた唐辛も立田山の紅葉に見え、引窓から見た四角な月も娘捨山の田毎の月に見る目は同じとなり……是れ堪忍の徳にして金のなる木のこやし方なり

とある通り、人世は何事も堪忍すべき所で、此堪忍は進歩向上の唯一の路であると信じ、喜んで逆境に處すれば逆境其儘順境である。古人は、氣にいらぬ風もあらうに柳かなといひ、中根東里は

他山の石は玉を磨くべし、憂患のとは心を磨くべし、水を飲で樂むものあり、錦を衣て愛ふる者あり、出る月を待つべし、散る花を追ふ勿れ

というたでないか。

伯益のとは淮南子に、昔者蒼頡作書而天雨粟鬼夜哭。伯益作井而龍登玄雲神棲崑崙とあり、注に、伯益佐舜初作井鑿地求水とある。

知伯のとは知伯率韓魏二國伐趙、圍晉陽、決晉水而灌之、城下緣木而處、懸釜而炊ある。

董卓が洛陽の宮廟を燒きて都を長安に遷したとは誰も知る通りぢや。

三 猿會心

此篇は老莊の説といはんよりは寧ろ禪理を説くに近い。達磨大師の所謂「心牆壁の如くにして始めて道に入るべし」の一句を骨子としたる寓言や昔し程明道程伊川の二人が他に招かれて饗宴に臨んだ時座に遊女の侍するを見て伊川は大いに主人の無禮を怒り、直ちに起つて歸り明道は其儘快く遊んで歸つた。翌日に至つて伊川は昨日の怒猶ほはれやらず、明道に向て其不都合を責めた時、明道は、昨日は席上に遊女あつて我心に遊女なし今日は席上に遊女なくして汝の心に遊女ありというたと傳へてある。また奕堂坦山の二老僧雲水の時相伴ふて川を渡る。後より妙齡の婦人來りて川を渡らんとするを見て坦山婦人を抱いて渡り、渡り了つて行くと里餘にして奕堂坦山の非法を責めたるに、坦山從容として、予は婦人を川の邊りに置き來れり、汝は今猶ほ抱き居るやというたと傳へてある。明道の用心、坦山の工夫如何にも大人の氣象が見え、塵中に和し

て心に汚れをつけざる所、即ち心牆壁の如くなる心法を得たものぢや。山王の猿ども集りて庚申待をしたり。親猿が云、汝ら今夜は藝盡をして樂むべし。去ながらいつもの如く猿の木登も輕捷もふるめかしければ氣をかへたる事をすべしといへば、一疋の猿は兩手にて眼をふさぎて見猿となり。一疋は耳を塞て聞猿となり、一疋は口を杜て言猿となる。

庚申待はかのえさるの日に帝釋と青面金剛の祭として三猿の像を祀る。これを縁として著者が寓言を作つたのぢや。耳目口の三を塞ぐは五欲を閉ぢて心を湛然たらしむる工夫ぢや。涅槃經の譬喩に、能く猿を捕ふる者があつて山に入て膠の如き粘著する物を案上に置いて物陰に潜んでゐると、猿が來て、這は定めて食物ならんと口に銜へると、口が粘著して離れぬ、兩手にて離さんとすれば兩手も粘著して離れぬ、依て兩足にて踏み離さんとすれば兩足も粘著して離れぬ。そこへ以前の人が物陰より現はれ棒を以て猿の手足の間に貫いて負ふて歸つたとある。此猿の兩手兩足口と五ヶ所が粘著して離れぬ如く、凡夫は眼耳鼻舌身によつて色聲

香味觸の五境に執著して外物に繫縛せられ心の自由を失ひ遂に無常の獵夫に生命を奪はるゝに譬へたのである。又外物に心を奪はれぬやう眼耳鼻舌身意の六根を收接するを龜の藏六にも喩へてある。龜は頭尾兩手兩足の六を甲殻の中に入れて危きを免れる。智者も亦其如く六根を收攝して散亂の難を免るる。故に禪家には

收攝其心安住不動如須彌山

といふのぢや。

親猿が云、庚申待には彌花出來たり、世にいふ所の庚申は神道にては猿田彦命を齋祭るとし、佛法には青面金剛とす。猿田彦といふ名の縁によりて猿を用ゆるか。然れ共もと神道の物にも佛道の物にもあらず、道家の物也。人の身に三尸蟲といふ虫あつて此蟲人の善惡を庚申の夜に天帝へ告るゆへ、庚申待をして寐されば此虫告る事能はずといへり。

青面金剛とは夜叉神ぢや。其像は身の色青く一身にして四手あり、これが青面金剛で五夜叉の一に位す。

三尸蟲とは太平廣記に、欲長生先去三尸、三尸常以月望晦朔、上天白人間罪過、使人不壽とある。

夫は各別、汝が見猿となれる心はいかん。見猿が云、眼は諸欲の媒なり。他の金銀財寶を見ては貪慾の念を起し、他の婦の美なるを見ては姪慾の念を起し、遂には不義不道の資に落入て身を誤る。目にさへざる物とに付て惡念萌すゆへ、たゞ何事も見猿となるなり。五色は人の目を盲すとは老子の詞なり。

こは猿の言に托して己れに迷ふて物を逐ふの病を戒めたのぢや。古人の語に一日除目を見れば三年道心を失すとある。一日他人の任官して出世するを見ると妬みの心が生じて三年道心を失ふと歎いたのぢや。されば禪家は切に心を前境に奪はるゝを忌む。春風に吹かれて春澤に遊ばざる用心が専一ぢや。程伊川の語に

心要在腔子裏、只外面有些隙罅、便走了

とある如く。吾人の心は少しにても外面に隙があれば身外に走り出て、

心猿惠馬が跳び廻つて如何ともし難い。昔し「武田信玄十九歳にして婦人少年等を集め日中にも戸を閉ぢ盡間も蠟燭を立て、一切夜晝の分ちなく、夜は鶏鳴までの遊蕩、晝は九時分まで寝ね……適表へ出る時は僧侶を集めて詩を作る……誰にても異見申人なく既に武田の家滅亡せんと風聞せり……板垣信形深く之を憂ひ、友夢居士に就て詩を習ふ、信玄何故ぞと問へば、殿の遊ばす義を臣等愁に御家の宿老の真似にて仕らざるは如何と存じ、作り習ひ候といふ。信玄大に喜び、信形が我爲を思ふと是にて知れたり褒稱斜ならず。信形能々機嫌を見澄し、涙をはら々と流し、居直りて申けるは、恐ながら殿は武田の家の總領として當國の太守に渡らせ給ひぬれば、國中の四民皆殿を以て父母の如くに仰ぎ候、殿も又四民を以て子の如くに撫育し給ひて、御政道に私なく賞罰明かに遊ばされてこそ、御父信虎君を廢去し給ひたるも理なりけれ。今に成りては信虎君の暴は屑ならず……御心の好む所に任せ給ひて美女を以て友と遊ばされ、御遊興にあたら月日を送り給ひ、又僧を召すと申せば詩歌の

みの御友なり……斯る御行跡にては、甲斐一國を永く御治めあらんことは如何候べきや、惡事千里を走る習なれば、此事隣國に隠なく、既に村上諏訪等が武田家を亡さんと打入しも其事より起り候。斯く申す信形悪しく候はゞ速かに首を刎らるべし、元より君に奉る一命、戰場にて死するも、今諫言して死するも同じとなり、何卒御行跡を改められ候はゞ、假令泉下に罷在るとも何の喜か之に過ぎんと聲を揚げて泣きければ、信玄聞て云、我若年にして前後に辨へなく、計らずも酒色に耽り、今汝が諫言肺肝に徹して慚か敷、今更千悔すると雖も返らず、汝が忠言を守るべしと暫く涙を流して誓紙を書て信形に賜はり……愛する所の美人を残らず追出し、斷然と行迹を改めたり」とある、實に慎むべきは酒色の慾である。

又聞猿が心いかん。聞猿が云、聲耳に入て心に應ず、我を褒るの詞を聞ば喜び、我を謗の言を聞ば心に怒、人を恨、他を咎め一朝の怒毒によりて身を誤る。又は他人の好事を聞ては羨み、無根無形の聲の爲に惑さるゝ事多

し、但何事も聞猿となつて善惡是非の事を耳へ入ざる也。五音は耳を聳るとは是亦老子の詞也。

毀譽褒貶に心を動さぬとは易きが如くにして實は難中の難事で、此一關を通過したなら大丈夫の漢ぢや。されば佐藤一齋も、「毀譽得喪は眞にこれ人生の雲霧なり、人をして昏迷せしむ、此雲霧を一掃すれば則ち青天白日なり」というた。マアカス、アウレリウスは毀譽を離るゝの工夫を説いて、「毀も譽も畢竟人の唇齒の音である、唇齒の音によつて喜憂を爲す必要はない」というたが、單に斯様に心得たとて容易に毀譽に心を動さぬとはできぬ。要は西郷南洲の言うた通り天を相手として人を相手にせぬが第一ぢや。何事も人を相手にして人に示さんとの心を捨て天に事へ、神に仕へると思つてゐれば他人の評言に心を動さぬ事ができる。人の善惡は棺を蓋ふて後に定まる、狂歌師の鬼卵は

世の中の人と煙草のよしあしは

煙となりて後にこそしれ

というた。故に生存中他人が何といはうとも自ら信ずる所を行ふに如くはない。王陽明は、「毀譽榮辱の來る獨以て其心を動さざるのみならず、且之を資り以て切瑳砥礪の地をなす、故に君子は入るとして自得せざるとなし、若し譽を聞て喜び、毀を見て戚まば夫れ何を以て君子と爲さん」というたが、這は陽明の實行した所である。

言猿が云、口はこれ禍の門なり、舌はこれ身を斬の刀なり。人の善惡是非を評判すれば惡きものに忌惡まれ善言も盡ざれば反て人の謗を受、多言なれば敗れ多し。孔子金人の背に銘をし給ひし三絨の旨にも言を謹むを第一にし、又飲食を簡にし言をつゝしむといへば、善惡是非の事に於て但何事も言猿也。

伊藤仁齋は、「多言は憎をとり、多動は謗をとり、多學は徳を害ひ、多説は理を亂す」というた。また黄山谷は萬言萬當するも一黙に如かずと云ひ、春日潜庵は「謹言は自ら責むるより來る、尤も好し」と云うた。多言の人に賢者はない、饒舌の人に謹嚴の人はない。スウィフトは多辯の人は

其言語と材料とに乏しきに由るといひ、ブラウスは沈黙は雄辯なりともいうたでないか。シエツフェルソンは怒つて言語を發するを戒めて、怒りたる時には言語を發する前に十の數を算へよ若し甚しく怒つたる時は百の數を算へよというた。これ眞に好個の工夫である。怒の發したる時は數息觀、即ち我と我呼吸の息を一つ二つと算へるが好い。また四百四病は口より入るとあるから口の節制が肝要である。加藤清正の家法にも、食は黒米飯たるべしとあり、細川忠興が狂歌に、うつけたる人と題して

醉狂に、利口顔して、自慢だて

ざれことながく、あばれ喰する

とあり、太田南畝の如きすら、童謡に曰く、おまへその様に酒のんで、猩々にならんす下心、猩々能くのもめども禽獸をはなれず、人として禽獸に鹿猿べけんやというた。金人のとは孔子家語に、孔子觀周廟有金人焉三緘其口而銘其背曰古之慎言人也とある。

親猿が云、汝らがいふ所、誠に世間に處して人と接るの要路也といへども未だ至極とはいひがたし。眼は物を見、耳は聲を聞、口は言が其職なれ共、眼にて見るに非ず。耳にて聞にあらず、口にて言ふに非ず、見るべきもの、聞くべきものいふべきもの身の外に宿居る。汝ら知るや否や外に在る眼口を塞て外をのみ防ぎて内を守るの要道にうとし。常に内を防ぎて我一心頭に見猿聞猿言猿の三猿を養ひ置ば、眼にて見る所、耳にて聞所、口にて言所も、此三官の諸欲を門を固守る三猿が防ぐをもつて貪り求むるの心路を絶す。砂糖を見て甘からんと思ふは我心眼の爲に亂さるゝ也。其甘からんと思ふ所を防ぐべし。これ禪家に所謂心は牆壁のごとくして道に入べしといふ所にて心路を斷する旨也。

肉眼を破壊しても心眼は能く物を視て止まず、耳根を斷しても心耳は聲を聞いて止まぬ。故に諸欲を斷するには心根を斷ずるがよい。心根を斷ずるとは一念不生の端的を守るので、達磨の所謂心牆壁の如くなる所ぢや、一念不生とは木石の如く無情なるをいふではない、見聞覺知する上

に精神の本體が動搖せぬとぢや。老子の無爲、莊子の坐忘で、眼の見る所を從にして更に好悪なく、耳の聞く所を横にして更に是非なく、口と言ふ所を從にして更に利害がないのである。ハクスレイが、「涅槃に入りし聖者は何等の欲望も活動力も、又現象界に現はるべき可能もなしとせり……人の性情を充分に了解せし佛陀は禁欲主義に依て人の欲情を盡滅せられ得べきものにあらず、須く其根本を撃碎せざる可らず。开は之に反する人の心を發達せしむるより成遂らるべしとなし、慈悲謙遜報恩平等の諸徳により、自己満足の消滅によりて到達し得べしとせり」と論じた如く、如何に禁欲主義を嚴守しても耳目口鼻の欲を絶滅し得べきものではない。故に此等の諸欲をして正道を得せしむるより外に良法はない。此等の諸欲をして正道を得せしむるには一念不生の心體より平等博愛慈悲同情の諸徳を養ひ立つるより外には良法はない。故に一念不生の心體を涵養するが禪門の要訣ぢや。

汝何とて書を焚ぞ、彼人答て云、佛書は不淨を拭ふの紙屑なり。儒書は聖人の詞の糠なり、今までは徒に文字の上に於て道を求む我文字の上に道のなき事を自得せり。故に焚捨んと思ふなり。禪僧が云、四書を焚ずとも汝が腹中の書物を忘るべしといへり。これらの意味を甘なひしらは、眼取口を塞に及ばずと曉せば、三疋の子猿詞をそろへて云、親父殿は何猿にならんと思はるゝや。親猿が云、我は何事をも不思議になるべし、口は鼻の如くし、眼は耳の如くにし、耳は尻の如くせば、適として可ならざるなし。親猿が何事も思はざるに爲らんといふは實に面白い、此不思議は薬山の所謂非思量の端的で、非思量は佛の境界なりとある。右人は之を驢の井を見るが如く、井の驢を見るが如しというた。鳴長明は一代の守りとなるべき語を求められて、

さもりとは己れも知らず小山田に

弓もてたてる案山子なりけり

と答へた。山岡鐵舟の句にも

倒れても弓矢を捨ぬ案山子かな

とある。此案山子の如くにして始めて非思量の地に入るとができる。佛書は不淨を拭ふ云云は禪書に多くある文字で、臨濟録にも、三乘十二分教皆拭不淨故紙とある。聖人の詞の糟とは莊子天道篇に、桓公讀書於堂上。輪扁斲輪於堂下、釋推鑿而上。問桓公曰、敢問公之所讀爲何言耶、公言聖人之言也。曰聖人在乎。公曰已死矣。曰然則君之所讀者、右人之糟魄已夫とある。眼は耳の如く云云とは列子に、横心之所念、横口之所言、亦不知我之是非利害歟、亦不知彼之是非利害歟、亦不知夫子之爲我師、若人之爲我友、内外進矣、而後眼如耳、耳如鼻、鼻如口、無不同也とある。孝經の註にも、口をして鼻の如くならしめば終身事なしとある。

蚊 子 議 和

此篇は足るとを知れとの寓言ぢや。人は足るとを知るが幸福の第一である。カアライルは人生を分數に比してゐる。即ち幸福快樂は人生の分子で之に對する欲望は人生の分母ぢや。されば人生の價値を大にせんとせば分母を小にするか、分子を大にするかの二法より外にない。然るに分子たる幸福快樂を増大すれば分母たる欲望も同時に増加するのが人生の常であるから、如何に分子を増加しても人生の價値は依然として同じである。併し分母たる欲望を減すれば少しの幸福快樂でも人生の分數は其價値が大になる。

カアライルは

代數學が嘘付ぬなら零を以て一を割らば商は無限大である、汝の要求を零とせよ、さらば全天下は汝の脚下にある

と公言した如く吾人の欲望を減すれば減ずるほど吾人の幸福は増加する。

從て吾人の欲望が零となれば無限大の幸福が得らるゝ。

惜しやほしやと思はぬ故に

今は世界がわがものぢや

と盤珪和尚もいはれた。安東省菴も

無求是至貴、知足是至富、安心是至樂

というた、深く省るがよい。

蟲ども徒黨して蚤の住家へ取かけたり。蚤どもも一類を集め既に争論に及ぶ。一疋の蚤進出て云、我一族久しく貧窶子の襤褸の中に住で安樂に暮す所に夜前汝が人類我々が住家へ不遠慮に來り貧窶子が太股を食ふゆへ彼はなはだ怒て汝を捜求むる事急なり。其時汝ら飛さつて身を藏せり、不仕合にて我々を見付、汝らが食ひしを我々がわざと思ひ、彼が手に懸つて我一族を捫殺せたり。これ汝が罪咎を我々に嫁與置て塵埃の中に潜りかくれて我々が禍を樂む惡徒也、毎度汝がわざによつて我々が横難を受る事無念千萬なり。今より後我住家へ來るまじきや否や、さもなければ千手觀音へ申上

て汝らを急度糾命すべしと詰かけたり。

こは蟲に托して吾人の足るとを知らざるを誦るのぢや。枚乗は、越女前に侍し齊姬後に奉じ、往來游讌、曲房隱間の中に縱恣するは是れ毒藥を殮し猛獸の爪牙に戯るゝを甘んずる也と戒めた、ざるを汚れたる利欲を食る輩は蟻虱の膿血に甘んじ娘蛆の臭糞を食ふに異らぬ。

蚤の方より一疋飛出て云、汝等も我々も人を血食して性命を養ふ所は相同じ。去ながら夜前の事は我々が仲間には非ず、汝が仲間を詮議すべし、且又我々も人を血食すれども足事を知て厭までにせず、人を恐るゝがゆへ害に逢事もすくなし。汝らは厭足事をしらず、食たるが上にも食ひ、腹は垂て膝を過ぎ蟲脹て歩行事のならぬまで喰付、人を見ても逃かくらざるゆへ爪尖の横死せる也。汝ら何ぞ我々を咎むるの深きや。

古人は愚人財を食るは蛾の火に赴くが如しというたが、如何にもその如く、財は財を用ふるだけの徳があつて始めて安全で、若し財を用ふるだけの徳がなくして財を得る時は必ず其身に災が來る。猶ほ虱の食り食ふ